

第四編 經濟地域構造論

第一章 經濟地域構造の概念

第一節 經濟地域の構造要素と條件

前編に述べたる經濟地域の劃定は、一定の地域の有する經濟的個性によつて之を企圖したものであるが、かくの如き地域的個性は自然的文化的經濟的諸要素及び諸條件の複合關係によつて構成されたものである。而して經濟地域の劃定は經濟地理學の前提であり、且つ終極點なるが故に、經濟地域の劃定が正確詳密なる場合に於て、初めて經濟地理學の研究は完いのである。従て經濟地域の個性を構成する構造要素及び構造條件の分析とその意義の究明より始めねばならぬ。例へば家屋の建築學的研究をなすに方りて、各地域に存する無数の家屋を一定の標準によつて大別すれば、西洋家屋、支那家屋、日本家屋の如くに分つ事が出来るが、かかる區別は或は家屋の形狀により、或は構造に基づく特異性によるものである。而してこの特異性は各民族の性格、生活意識、生活様式、生活目的によるのみならず、その自然的環境、社會的環境、建

築資材の如何に依て決定せられる。更に日本家屋のみにつきて見るも、各地方によりて著しき差異を存するのであるが、それには常に一定の理由がなければならぬ。かかる家屋の特異性を研究せんとすれば、先づその家屋の構造が如何なる要素、條件、環境の下に出來上つて居るかを研究しなければならぬ。之と同じく經濟地域の個性も亦有形無形、凡ゆる構造要素、構造條件によつて規定されて居る。併し如何なる場合に於ても、個性の構造要素及び條件は無限に存在するが故に、この無限なる構造要素、條件を凡べて網羅する事は不可能であり、且つ不必要であつて、その個性をして特異性を有し、他の個性と根本的に區別せしめらるるが如き本質的なる構造要素並に條件につきて研究すれば足るのである。而かもその何れを最も明確に高調すべきかは、研究の對象又は目的によつて異なるが故に、場合によつて同一ではない。或るもの個性高調に必要な構造要素も他のものにつきては左迄重要ならざる場合がある。從て構造要素は如何なるものにつきても絶對的に必要にして、之なくんばその存在なしといふが如き要素と、或るもののみ特に必要なるものがある。又例へば建物につきて見るに、建物そのものの構造要素たる種々の資材、その建築の様式を支配する設計者又は所有者の性格或はその地方の風習、その地方又は家屋の所在に於ける自然的社會的條件によつて家屋の形態、構造が異つ

てゐると同様に、經濟地域を以て地域の經濟的個性の表現であるとするならば、經濟地域はその構造形成の本質的固有の要素と、その構造要素の取捨選擇並に要素の機能發揮に影響を與ふる所の條件とによつて自らその構造が異らざるを得ない。例へば家屋たる限りは、屋根、柱、棟、梁、壁等の如く、之なくんば家屋たり得ざる要素が在る。之は家屋構造の本質的固有の構造要素といふべきである。併しその屋根の形態、之に用ふる資材は種々の條件によつて異なる。雨の多き地方に於ては屋根の勾配を急にし且つ瓦、石、藁、茅等それらの事情に應じて最も有利なる資材を使用しなければならぬ。又その形態も地方の習慣、風俗によつて著しく異つてゐる。併しかくの如き差異を生ぜしむるものは、固有の構造要素に非ずして、構造形成の條件にすぎない。然るに従來の經濟地理學に於ては、或は地域論にしる、或は經濟現象の分布論、更には立地論にしる、その地理的特異性の形成を論ずるに方り、要素と條件とが混同され、同等に取り扱はれてゐる。余も亦舊著に於ては之が區別をなさずして、經濟的要素、自然的要素、文化的要素といへるが如き區別をなしたるに止るが、これは論理的に見て明かなる誤謬である。經濟地域が空間現象であり、自然及び文化一般と不可離の關係に在るとはいへ、經濟は經濟としての獨自の存在を有するものであつて、その構造、組織には一定の基本的なるものがなければ

ばならぬ。同じ地表空間も、宗教、政治、藝術を標準として地域を劃定しうるのであるが、かかる地域が經濟地域と區別されるのは經濟地域に固有の要素が存するからである。例へば家屋には家屋たる基本的構造要素が嚴として存在するのであつて、家屋建築の資材たる瓦、石、材木、鐵が多數に存在するか、或は容易に獲得しうるか、有能なる大工、設計家が居るか、建築に必要且つ適當なる土地があるかといふが如きは、家屋そのものの本質的構造要素ではなくて、建築の條件にすぎない。併しこの條件なくんば建築も不可能であり、又この條件によつて建築の構造、形態、組織も異なるのであるから、經濟地域の構造を研究するに方りては、構造要素と構造條件とに分ちて考察しなければならぬ。而して一定の經濟地域に於ける經濟的なる諸現象は即ちその地域の構造要素にして、之なくんば經濟地域そのものが成立し得ない。之に反し經濟外の諸文化現象及び自然現象は、經濟地域の構造の各部分に對し、又その形態、様式等に對しては頗る重要な影響を與へるが、經濟地域の構造そのものの構成要素ではなく、條件にすぎない。個々の條件は經濟地域の構造の個々の要素につきてはその可能を決定するが、併し經濟地域そのものの存立が失はれるわけではなく、却て之があるが故に地域的個性が形成されるのである。

第二節 經濟地域の構造條件の分類

前節に述べたる經濟地域の構造要素は經濟的有機的構成に於ける根本的要因なるが故に、その地域の大小、經濟的發達度の高低、經濟形態の如何を問はず、必ず何等かの形態、程度に於て存在しなければならぬのである。従てその要素は量又は質に於て類別しうるに止る。然るに經濟地域の構造條件は、構造要素の量質、形狀、機能等に對して可能的又は破壊的潜在條件をなすが故に、一定の經濟秩序、經濟組織又は個々の經濟活動に對して相對的、主觀的にその作用する所が異らざるを得ぬ。併し乍らこの相對的主觀的に異なる作用が更に經濟現象の空間的特異性を決定し、それは懸て地域的個性を決定するものである。而してかかる條件は自然的、文化的事象に互るものにして、時には又經濟現象そのものも與へられたるものとして循環的に條件をなす場合もある。従て個々の事實を列擧するが如きは全く不可能の事であるから、先づ概念的に種々の立場より分類し、一定の地域又は事實につきて研究する場合に、之を具體化して、その相對的主觀的影響又は意義を論ずるのを至當とする。故に本書に於ては主要なる分類を概

念的に決定するに止めよう。

第一 一般的構造條件と特殊的構造條件

一般的と特殊との區別は、他の諸分類に於けると同じく全く相對的のものであるが、經濟活動をなさんとする場合に、それが經濟活動たる限り一般的に必要とするものと、必要ではあるが相對的に特に必要不可欠にして之なくんば特定の經濟活動をして成立し得ざらしむるが如きものがある。例へば土地の如きは農業にあれ、工業にあれ、一般的に必要にして、何れも好條件を望むのは當然である。從て土地は一般的構造條件といひうる。併しその土地の重要性は相對的には夫々異なるのであつて、農業に於ては土地の肥沃度が絕對的に重要であるが、工業に於ては土地の肥沃度は必しも重要でないから、土地の肥沃度は農業にとりては特殊的構造條件である。即ちある地方が進歩せる豊饒なる農業地域なりとせらるゝ場合には、他の經濟的社會的自然的條件を必要とするも、先づ土地の肥沃である事が基礎となつてゐる。又水利の如きは經濟活動に絕對的に必要であつて、之なくんば人間は生存すらも出來ない。故に水は一般的構造條件といふべきである。併し水の必要度は産業によつて著しく異り、例へば同じ纖維工業に

於ても紡績工業は直接に水に依存する程度少きに反し、人絹工業に於ては第一に水の量、質によつて決定される。又同じ農業に於ても歐洲の農業は僅少の水分を以て足るが、我國の農業は頗る多量の水を必要とする。故に水は人絹工業、日本農業にとりては特殊的構造條件といはねばならぬ。かくの如く一般的特殊的の區別は相對的主觀的のものにして必しも重要な區分ではないかの如く見ゆるも、地域の個性の構造を決定するものとして、特殊條件が特定の經濟活動に對して特に必要であるといふ相對的特殊性を考察する事は極めて重要である。

第二 地方的構造條件と地區的構造條件

これは比較的廣大なる地域を一體として觀察した場合に考へらるゝ類別である。例へば一の國民經濟の各地域を觀察するに、東北地方とか、關西地方とかはそれぞれ異なる經濟地域をなして居るが、その經濟的特殊性を生ぜしむるの條件は地方的構造條件である。然るにその各地域の内部を更に仔細に検討すれば、それぞれ各小地域が異なる經濟的個性を有する。例へば關西地方といふも、大阪、京都を中心とする地域は著しき差異を有する。又同じく大阪といへる經濟地域を見るもその各部分に存在する主たる經濟形態は同一でない。かくの如き地域の經

濟的個性を形成せしむる要因を地區的條件と稱す。故にこの類別には多くの段階が存するわけであるが、經濟地域の特殊的構造を形成せしむるに對し全く異なる作用を有するものであつて、經濟地域の特殊性を分析究明する上にはこの類別は頗る重要なものである。特殊産業が一定地域に集中分散して特殊なる經濟地域の形成されるのはこの兩條件の關係による所が少なくない。即ち一定地域に於ける地區的構造條件の組み合わせ如何によつて工業の集中度は異なり、又集中せる工業の經營規模、種類が異なる。特に工業地理學に於いて地方的及び地區的分布條件の理解を絶對的に必要とするのはかゝる理由に基づくのである。

第三 文化的構造條件及び自然的構造條件

一定の地域がそれぞれ經濟的特殊性を生ずるのは、一派の人々の論ずるが如く自然的事情のみ因るのではない。諸種の文化的條件も與へられたるものとして重大なる影響を及ぼすものである。殊に近代の如く人知が進歩發達せる場合には、却て文化的條件によつて經濟的活動が影響を蒙むる場合が多いのである。凡ゆる文化的組織は自然の潜在力發現の爲めに考案されたものではあるが、一旦成生したる組織は一定の所與として嚴存するのであつて、これを無視し

て地域の經濟的特殊性を理解する事は出来ない。而して文化的構造條件は更にこれを經濟的條件と社會的條件とに區別する事が出来る。之等の諸條件の複合關係によつて一定地域に於ける經濟活動が制約され、從て各地域が異なる構造を有する經濟的個性を形成するのである。併し乍らこの區別は、今日に於ては、經濟地理學が地表に顯現せる經濟的文化そのものの地理的構造を研究せんとするが故にその重要性は減少し、特に自然的要素は一の與件としてのみ意義を有するにすぎない事は屢々述べた通りである。

第四 普遍的構造條件と偏在的構造條件

之はその所在が地表の各部に普く存在し而かもその移動の極めて容易なるか、或は一地方のみに限定して存在し、且つその移動の頗る困難なる事等によつて區別されたものである。而して偏在的條件は地域の特殊性を最も顯著に構成するものであり、特にその條件が一定の經濟活動をなすに絶對的に必要なるが如き場合に於てさうである。普遍的條件は地區的個性の形成に對しては殆ど影響する所がない。かのウェーバー(Alfred Weber)の工業立地論に於ても普遍的原料は工業の立地にさしたる影響なしとせるが如きは即ちかゝる事情に由る。

第五 代替的構造條件と不代替的構造條件

人間の經濟活動には必ず一定の手段を必要とし、その手段の種類、性質、數量によつて經濟組織、更には一定地域の經濟的個性の構造が決定される。併し乍らその必要とする構造條件は必しも一定地域に存在せず、他より之を移入するか、或は之に代るものによらねばならぬ場合が少くない。又從來充分に獲得し得た條件が種々の事情のために全く喪失された場合には他の新なる條件に俟たねばならぬ事がある。更に一定の産業或は人、社會が、事情變更の爲め方向を轉換しなければならぬ事もある。かゝる場合に容易に轉換しうるか否かは地域の個性を決定する上に大なる關係を有するのであつて、常に進歩發展する地域と保守固定的なる地域との差異を生ずるは、一定地域が代替的構造條件を有するからである。又之に反し不代替的構造條件を多量に保存する場合には却てその經濟地域の存在は強力にして他の追従し得ざる地域たる事が出来る。何れにするもこの區別は、今日の如く急速に經濟社會の變化する時代に於ては、經濟地域の構造を考察する上に重要な役割を演ずるものである。我國の如く經濟生活の多種多様な場合に於て、若しその生活資材の獲得が困難となれば、自國內に於て新なる産業が代替

して成立し、茲に經濟地域の個性の變化を來すであらう。現に我國と外國との輸出入關係の變化が經濟地域の變革を齎せるは右の如き條件に基くものである。

第六 建設的可能條件と破壊的否定條件

凡そ條件といふ場合には、一定の事物の存在又は成立を可能ならしむるものをいふ。從て普通に條件といへば建設的可能的條件である。併し一定の地域を特殊の个性的存在として見る場合には、その存在又は成立を可能ならしむる條件の外に、之を不可能ならしめ、又はその存在を否定し、破壊するところの條件がある。之を破壊的否定的條件と名け、前者を建設的可能的條件と稱する。建設的可能的條件は成るべく多く存在する程、一定の事物の存在成生を可能ならしむるものにして、その量、質の結合如何によつて個性が決定せられるが、之に反し破壊的否定的條件は事物の存在、成生に對し急激なる變化を與へるものであつて、例へば戰爭は凡ゆるものに對し破壊的力が最も強大であるから、その頻發する地方と然らざるものとの間には著しき差異を生ぜしむる。又地震、暴風、洪水、旱魃の如き自然現象も亦破壊的條件であつて、かかる天災地變が如何に地域的構造を變化せしかは言ふ迄もない。

第七 集中的條件と分散的條件

事物の運動は常に辯證法的である。殊に經濟活動を地域的に見るに、常に一定地域に集中一體化せんとするの傾向が頗る顯著であるが、併しその集中一體化の運動の中に實は分散離反の契機を包藏してゐる。即ち經濟活動は求心力的運動をつゞけつゝ實は遠心力的運動を繼續してゐる。他の事情にして同一であるとするならば、凡べての經濟活動はその細分せる分化によつて實は統一的合化を求めらるものであるから、集中一體化するに從てその機能は愈々發展するのであるが、併し空間は限定され、同一の場所を多數の物が同時に占據する事は不可能であり、又それに於ける種々の要素、條件は異り、或ものは集中を可能ならしめ、或ものは反對に不可能ならしめ、從て集中せるものも分散せざるを得ない事がある。一地域に於ける産業の集中度の如きは全くこの矛盾せる二條件の止揚度によつて決せられるものである。この二條件の區別は小地域に於ける經濟的特質の比較研究には最も必要なる概念である。ウェーバーの所謂集積分散因子 (Agglomerations und Deglomerationsfaktor) は大體之に該當する。

第二章 經濟地域の構造要素

第一節 經濟地域の構造要素の意義

經濟とは人間が社會生活に必要な物質的欲望を充足する爲めにする行動の組織的秩序であるから、經濟に固有の法則によつて指導され、組織されるのは當然であつて、それが一の地域的現象として顯現される場合にも、經濟に固有なる構造がなければならぬ。而してその構造は量、質に於て千差萬別である事は、恰も家屋の構造が何れも異なるのと同様である。構造が量、質に於て異なるはその構造要素が異なるからである。先にも述べたるが如く、構造要素は自然的社會的條件によつて著しく影響せられ、或る意味に於ては決定的なる場合もあるが、併しそれは飽迄も條件であつて、經濟地域の構造要素といふ事は出来ない。故に經濟地域の個性の構造が如何にして形成されてゐるかを研究するに方りては、要素と條件とを概念的に區別する必要がある。而して構造要素とは純經濟的概念であつて、經濟外のものは凡べて之を條件とし

て見ねばならぬ。經濟的諸現象が一定地域に顯現したる場合に初めてその經濟的個性が形成され、他と區別さるべき存在となりうる。故に經濟地理學に於ても第一義的に經濟諸現象を研究の對象とするのであるが、純粹理論經濟學が時空を離れて經濟現象を研究し、經濟史が一定の時間に關係せしめて考察するに對し、經濟地理學は一定の地域に關係せしめて、即ち空間的面に於て研究し、而かもその空間的面の構造要素として觀察する所に特質を有するのである。換言すれば同一の經濟現象は、他の事情にして同一でありとするならば、一定の地域に於ては一定の現象形態をとつて顯現するのであるが、併し現實には各地域によりて決して同一ではない。この無數の經濟現象の地域的差異の複合關係が一定地域の經濟的個性の構造を決定するのである。従て經濟地理學はこの地域的個性を形成する構造要素の分析的研究を主要なる任務とする。而してこの構造要素の分析によつて各地域に存する地域的構造が理解され、更にその構造が構造條件と如何なる關係に在るか、要素と條件とが合理的關係に在りや否やが究明されるのである。若し地域的個性の構造要素と構造條件とが合理的適應關係を有せざる時は、その社會は地域的統一を缺き、有機的經濟體たり得ない。従て經濟的發展、文化の向上は束縛され、經濟合理主義を實現する事は不可能となる。地表の各地域に於て經濟的文化の高低の差異を生じ、又

は折角發達せる經濟社會が衰退崩壊するものも、かかる事情に基く場合が少くない。故に經濟地理學に於ては經濟地域構造論が最も重要な部門を占むるものであり、之が明かにされて初めて經濟地域編制論が成立しうるのである。

第二節 經濟的指導原理

經濟活動をなす場合には必ず一定の指導原理又は精神によつて統制されてゐる。之は時代により地方によりて千差萬別である。それが異なるが故に各地方が夫々異なる經濟組織、經濟秩序を有し、従て經濟地域の特異なる構造が決定される。それは恰も家を建つるに當りて建築者の理想、社會觀、目的等によつてその構造、形態が異なるのと同様である。又農業經營のためにする建築と工場とは全くその趣を異にし、又同じ住居も中産階級が日常生活の根據とする場合と、富者が避暑の爲めに設くる場合とは自らその趣を異にするのと同じく、一定地域を支配する經濟的指導精神はその地域的構造を決定する根本的な力を有するものである。而して各經濟地域は決して同一の經濟的指導原理に依て支配せられて居るのではなく、従て夫々異なる構造を形

成してゐる。地球上には多くの國家、社會があるが、或は資本主義經濟の行はるゝ所あり、封建的經濟主義の行はるるあり、或はカスト的經濟主義の行はるるあり、或は共產主義の行はるるあり、或は原始農業共產主義の行はるるあり、又同じく資本主義の行はるるにしても決して同一の程度ではなく、量質共に著しく異なつて居る。而かもこれ等の指導原理に適應して凡べての生産組織、流通組織、人的結合關係、給付編制が異なるのである。今日世界各國を見るにそれ〴〵經濟的特殊性を有する所以のものは、固よりその自然的事情の差異にもよるが、その經濟活動に於ける指導精神、原理の差異に基づくものといはねばならぬ。故に經濟地域を考究するに際しては先づそこに普及せる指導原理の如何を見、更にその地域を細分して各小地域に於ける普及度を考ふる事を要す。蓋し同じく資本主義の行はるる國民經濟地域に於ても、各小地域の凡べてが同一の程度に於て資本主義が行はれて居るとは限らぬ。例へば資本主義の夙に發達したる英國に於ては各地域に資本主義が行はれ、農村に至る迄完全に支配的勢力を有し、從て資本主義の活躍し難き農業は早くも衰退し、農村人口の都市集中となり、農業の經營形態も一變した。この點は我國の如き資本主義の充分に發達せざりし國と大いに異なる所であつて、或るものにつきては英國以上に資本主義化されて居るが、或るものにつきては全く封建主義の

行はれて居るものが少くない。又或る地方に於ては封建的主従關係に於て生産の行はるる所もあれば、或る地方では原始共產制の存する所もある。同じ労働をなす場合にも、或は労働即生命と考へるものもあれば、労働を必要なる害惡として行ふものもあるが、之等も經濟精神の表現にして、それは懸て各地域に於ける經濟的特質を決定するに重大なる關係を有する。物的條件の存在するに拘はらず資本主義の發達せざる地方の存するもかかる事情によるものである。固より各地域によつてその指導原理を異にするは自然的事情の影響による場合もあるが、併しこれは短時間に自然的事情によつて生じた現象ではなく、長期に互る歴史的所産にして一定の所與として考ふべきものである。中央集權の極度に發達せし我が國に於て、なほ各地方が著しき經濟的特殊性を有するは、一面自然的社會的事情にもよるが、その指導精神の地方的差異に歸すべきものが甚だ大である。

第三節 經濟組織

經濟組織は一定の社會に於ける人的、物的、時間的、地域的給付の編制に關する系統的秩序

である。この秩序を貫き且つ指導するものは前節に述べたる經濟的指導精神であるから、この兩者は互に表裏の關係にあるものといはねばならぬ。人、物は夫々時間的空間的に分化し合化して給付をなす時に初めてその機能を發揮し、經濟的秩序が維持出来るのである。而して經濟地理學は人及び物が空間的連繫によりて經濟的給付に参加する關係を研究しなければならぬ。蓋し一定地域が独自の地域として存立しうるのは、そこに存する人と物との經濟的給付を通じて、地域的經濟有機體の一體たりうるからである。一體として地域的有機體に参加し經濟的給付をなし得る程度は經濟組織の如何によつて決定せられる。即ち經濟組織は經濟的給付編制の状態及びその合理化の程度と相關的關係にある。而して經濟的給付の編制は各種の産業の發展と存立とを可能ならしめ、即ち人的分業と地域的分業とを促進するものであるから、經濟的給付編制の合理化の進むにつれて、經濟地域の有機的統一が擴大され且つ緊密となる。經濟的給付の合理化は、技術、經營組織、交通通信機關、交換流通手段等の發達を必要とするが故に、經濟組織、之に伴ふ經濟的給付編制の如何は一地域に存する産業の分化合化、集中分散の程度を異らしむるものである。實に經濟組織、經濟的給付の編制は、建築物につきていへばその棟梁柱石の結合關連の状態に相當するものにして、この結合状態にして弛緩せんか、忽ちに

してその建築は崩壊するが如き肝要なものである。即ち經濟地域の構造要素としては最も緊要なるが故に、之が研究を怠る時は經濟地域の構造を理解する事は不可能である。かのマックス・ウェーバーは經濟史の根本的課題は經濟的給付編制の合理化の發展過程を研究するものであるとしたが、經濟地理學の主なる課題は經濟的給付編制の合理化の地理的分布過程の研究ともいふべきである。而してこの給付編制は更に労働組織、經濟單位、消費状態、富の生産及び集積状態、人口關係、交通制度、流通交換手段等に細分して考察するの必要がある。

第四節 労働組織

労働は一定の組織により一定の計畫の下に遂行されるものである。何等の組織と計畫もなく、動物が單に空腹を満たすために時に應じて食物を探索する運動の如きは之を労働といふ事は出來ない。即ち労働は人間が社會的集團をなしてその目的達成のためにする行動體系をいふ。故に労働組織は各人の經濟的給付の編制と一致すべき性質のものであり、又その生活する社會の廣狹、有機的統一と經濟組織の如何によつて異なる。從て労働組織は經濟形態とも密接不可離の

關係に在る。狩獵漁撈の如き採集的經濟形態に於ける勞働組織と牧畜、農業、工業、商業の如き經濟形態のそれとは全く異らざるを得ぬ。勞働の計畫はその目的、契機、指導的精神によつて支配されるが故に、原始的家族共產體に於ける勞働組織と近代的共產社會のそれとは同じく共產主義によるとはいへ、その勞働組織は同一ではない。又農業地域につき見るも、ロシアの如き農業勞働の行はるる所もあれば、支那の如く半封建的農奴的勞働の存する所もあり、更には英米の農企業の如く全く資本主義的經營の行はるる所に於ては工場工業に於けると同じく賃勞働組織によつて居る。我國の如く農業經營が或る程度に資本主義化されてゐるとはいへ主として小農經濟が一般的經營形態たる場合には、自家勞働のみに依て行はれ自給自足性を多分に保有する。土地の所有關係による自作、小作に於てもその勞働組織が異なる。かかる勞働組織の差異は他の經濟形態に於ても見らるる所にして特に工業に於て著しきものがある。勞働組織は常に經濟的並に經濟外の諸條件によつて影響され變化する場合が少なくないが、併し一定の時、一定の地域に於ては殆ど變化せず、且つ一定地域の經濟的個性を形成するの構造要素としては最も重要なものである。

右は勞働組織を社會的に論じたのであるが、更に之を地方的部分的に觀察するならば、人間は勞働能率を有效ならしめ、その成果を大ならしむるために、或は永續的に或は一時的に特定の勞働組織を形成する。之は勞働の對象、目的、人數、場所等によつて千差萬別であつて、各地方に夫々特殊の形態を以て存在する。故に一定地域の經濟的個性を考察する上には、一般的勞働組織の研究と共に、かゝる部分的勞働組織の特異性をも考慮すべきである。

勞働組織は人口の多少、その移動性、勞働資質、勞働に對する觀念によつて決定せらるる場合が多い。人口が稀薄なる地域に於ては勞働を集中して之を賃勞働として利用するが如き工場的勞働組織は不可能である。又かの大家族制度の如きは人口稀薄にして勞働が不足するが故に、之を結集して勞働効果を大ならしめんとする組織であらう。之と反對に如何に人口が多くとも資質が低劣なる場合には近代的工業に用ふる事が出來ず、封建的農奴的に驅使して低級なる農業を經營せざるを得ぬ。古來多くの奴隸經濟はかゝる事情に由るものであり、支那が長年月の間多大の人口を有し乍ら、資本主義經濟の發達しなかつた理由の一も茲にある。又最近に於ける栽培植民 (Plantage economy) の如きも、勞働資質が低劣にして勞働意欲の少きものを活用する方法として考察されたる新しき勞働組織である。最後に人間が勞働に對して有する觀念は勞働組織に對して重大なる關係を有するものにして、勞働を以て人生の最高目的であると考へ

る場合と、之を必要なる害悪なりとする場合とによつて、労働組織の異なる事は已に述べた所であるが、更に労働を以て利己的に考へる場合と社會的奉仕として考へる場合、或は職分完遂の道と信する場合とによりて労働關係は著しく異らざるを得ぬ。之等の關係は、或地方をして或は繁榮富裕に赴かしめ、或は窮乏退歩に至らしめる。進取發展、常に新しき産業の興隆を來す地方と然らざる地方の存するは、實に労働精神、之に指導せらるる労働組織による所が頗る大である。

第五節 人口及び聚落

人口及び聚落の問題が經濟現象として取り扱はるべきものなりや否やにつきては議論の有する所であるが、併し何れにするも人口及び聚落が經濟生活の基本をなすものであるから、之は單なる經濟地域の構造條件と見る事は出来ない。之は地域的個性の構造を形成する具體的且つ根原的なる要素といふべきである。人口の大小増減の關係、男女性別關係、年齢別關係、職業別關係の如きは一定の經濟組織、社會組織の反映であるが、併し又之が一定の社會、經濟組織

の基礎をなし、之なくんば一定地域の經濟的個性は全く考へられぬほどに重要なものである。諸種の人口關係は人間の生活可能地域 (Okumene) と不可分の關係を有するが故に、人口は即ち一定地方の生産力、經濟狀態の函數ともいふ事が出来る。併し乍ら人口關係を以て地域的個性の構造要素として觀察する場合には、從來の如く單にその數量關係のみの計量を以て足れりとせず、その資質の検討、性的、年齢的、職業的組み合わせ關係の闡明が最も必要である。或る地域の人口の密度が大であるといふ事が明かにされても、それによつて一定地域の經濟的個性が理解されるわけではないのであつて、例へば支那山東省の人口密度が我國のそれより稠密であるとするも、山東省の經濟が我國よりも發達せりとか、或は類似してゐるといふ事を意味するものではない。故に人口密度を如何に正確に計算してもそれだけでは經濟地理學的に大なる意義を有し得ない。要するに人間が經濟の主體であり、人間の意思によつて經濟が運営される以上、一定地域の經濟的個性は人口關係を根本的基礎とするが故に、一定地域に於ける人口關係を凡ゆる方面から詳密に研究する事によつて初めて、經濟地域の構造を理解することが出来る。而してかゝる廣義の人口關係は種々の條件によつて影響せられるけれども、同時に人口は自らの自律的法則を有するものにして、變化極りなきが如くにして、而かも一定の時、一定の所に

於ては與へられたる事實として存在する。故に人口關係は一定の經濟地域構造の重要な要素といふべきである。人口關係の地理學的研究は人口地理學として獨立の存在が可能であるが、同時に經濟地理學の基本理論たる經濟地域構造論の基礎をなすものである。

經濟地域の構造要素としての人口の考察は必しも人口論的方法と同一ではない。即ち單に人口を靜態的並に動態的に數へたものとして考察するのではなく、各地域に於ける人口關係の差異、類型の由て生ずる所以をも研究しなければならぬ。かゝる差異、類型は人種的關係、出生死亡の如き人口動態、或は移植民の如き人口の移動關係、人口の季節的移動性等によつて生ずるのであるが、之が明かにされて初めて地域的個性の構造が理解される。而して人口關係の特性は各國、各民族によつて異なるは勿論、更に一國內の各地方に於ても著しく異なるものであり、而かも之を數量的に展示しうるが故に、經濟地域の構造要素としては最も理解し易く、且つ地域的個性の最も明確なる表現と言ふ事が出来る。人口が地理學に於て夙に研究對象として取り上げられたのは之がためであらう。

人口は地表に生存する人間を數量的に計量し、抽象化したる概念であるが、この人口は一定の場所に定住し、立地を有する。水草を追うて轉々する遊牧の民と雖も一定の時間、一定の立

地に居住を有する。この居住立地の形態又は組織を聚落と稱する。聚落の形態、成立の過程等は聚落地理學の研究する所であるが、經濟地理學は、人口と密接の關係を有する聚落を地域的個性の構造要素として研究するものである。聚落は自然的、社會的、歴史的事情によつて無數の形態、様式を有し、全然同一なるものは決して存在しないが、而かもその間に一貫する根本原理が存するのである。即ち聚落はかかる自然的社會的條件の下に影響され乍らも、その生活目的特に經濟的活動に最も合理的に適應するが如くに形成される。從て社會狀態、經濟狀態の變化に應じて時間的にも變化し、又地域的に移動する。古來如何なる聚落も同一の形態をとり、同一の場所に停滯したものはない。かくの如く聚落は長期に互つて見れば人口の増減、自然的社會的條件によつて影響され、變化して止まないものであるが、併し之を一定の時、一定の地域につきて見れば聚落は一定の形態、組織を有し、且つその地域に於ける經濟形態と大體に一致適應の關係に在る。例へば都市と村落とに大別された場合、都市に於ては原則として商工業が行はれ、村落に於ては農業が行はれる。又同じ都市の範疇にするものでもその主たる經濟形態によつて都市の形態、組織そのものが異つてゐる。村落に於ても亦然りである。かくの如き聚落の形態、組織の差異、その成立の關係を研究するものは聚落地理學であるが、經濟地理學

は、諸種の聚落を與へられたる構造要素として、それが經濟地域の個性の形成に於て如何なる意義を有するかを研究しなければならぬ。而して聚落は人口と共に經濟地域の構造要素として最も重要なものの一つである。尙ほ聚落の分類は實質的形式的の二方面より行はれてゐるが、經濟地理學に於ては主として實質的立場より之を分類し、その地域的構造要素としての意義を研究するものである。單に人口數によりて聚落を區別するが如きは經濟地理學的には殆ど意味を有しない。形狀によるものは一見形式的分類の如くであるが、併し之は實質的内容と不可分の關係に在り、地域的個性の形成には大なる意義を有するものである。聚落形成の單位たる家屋につきても、聚落を地域の構造要素として考察する場合に充分に考慮すべきものである事は言ふ迄もない。蓋し家屋夫れ自身が自然的社會的經濟的條件によつて決定され、更にその集積分散の度によつて聚落の形態が決定されるからである。

第六節 富及び生産手段の種類、集積状態

如何なるものを以て富と做すか、從て如何なる方法によつて之を獲得し、蒐集蓄積するかは、

社會の經濟組織、更には人間の經濟的心意によつて異なる。狩獵漁撈を事とする原始民族に於て尊重せらるゝ富と資本主義的文化民族の夫れとは全く異なる。從て富の一部を成し且つ之が獲得手段として最も必要な生産手段の種類、集積の状態も異なる。例へば富としての土地に對する觀念を比較して見るに、商工業本位の英國人と農業本位の支那人とを比較すれば兩者は全く異なる認識と評價とを有し、更に同じ農業國であつても米國の農民と支那の農民とによつても亦著しく異なる。その事は更に土地の所有關係に差異を生ぜしめ、その所有關係の社會的經濟的意義が同一ではない。又同じく權門勢家と雖も國により民族によりて、異なる富の蓄積方法によつてその社會的支配力を維持せんとする。かくの如き富及び生産手段の種類、集積の状態は、之を地域的に見るも著しき差異、特色を有するのであつて、例へば我國の内部につきて見るも、純農村に於ては農民は屢々利廻りを無視して高價なる土地を獲得せんとし、土地に絶大の評價と愛着を有するに反し、大都市の近郊に於ける農民又は不在地主は土地の利潤、價格のみによつて之を保有し又は處理せんとする。今日では個人、又は一地域の富力を表示するに貨幣價格を以てするが、併し之を實質的に見るならば大に異なる。大都市の居住者にして山林、耕地を有するものもあり、農村富豪にして株式、債券を有するものもあるが、原則的には、富の構成は

都市と農村によりて異なる。この差異あるが故に都市に富の大部分が集中し、從て又生産手段が都市に集積されて居るのである。而して富及び生産手段の地方的集中分散の大小の程度は、社會組織によるは勿論、交換手段、流通手段、交通機關等による富及び生産手段の所有の移轉、富の性質形態による場所的移動の可能性、集積の可能性、集積されたる富、生産手段の永續性等凡ゆる條件によつて決定せられる。富、生産手段とは抽象的概念であるが、何れも具體的に何等かの形に於て表現されてゐる。個人の富及び生産手段の集積及び所有は、今日に於ては證券化されて居るが故に、必しも具體的地域現象として認識する事は出来ないが、併し之を一國の富として、又は一地方の富として見る時は、必ず具體的事實として之を認識しうる。又之あるが故に一定地域の個性の構造が理解されるのである。富、生産手段の種類、その獲得方法、集積状態は經濟地域の構造要素として凡ゆる方面より研究されねばならぬ。

第七節 財貨が生産より消費に至る迄の諸過程

財貨は一定の方法によつて生産され、一定の過程を辿りて消費される。この過程を支配し、

その羅針盤となるものは經濟的指導精神であり、經濟組織である。從て之等の前提によつて財貨が如何なる過程を経て流通するかは、時と所によつて全く異なるのである。かのヒルデブラン (Bruno Hildebrand)、『ユルターヤー』(Karl Bücher)の如きは、或は流通、交換手段により、或は流通速度及びその距離の長短によつて時代區分を劃定したのであるが、かかる見解は、地域的個性の構造を考察する場合にも重要な意義を有するものといはねばならぬ。例へば經濟の發達せざる封鎖的家内經濟の行はるる場合には生産者即ち消費者であり、たとひ財貨が移動するも交換によるのではないが、更に都市又は市場を中心として生産者と消費者との直接交換が行はれ、更には生産者と消費者とが人的にも地理的にも全く離隔して市場生産、商品生産となり、遂には國民の需要を直接に充足する「貨幣」^{貨幣}、統制經濟による生産消費の適合が行はれる。之等種々の經濟秩序に應じて、交換手段即ち貨幣制度、金融制度、信用制度、結社、經營形態、配給組織即ち諸種の商業、取引機關、諸種の市場、更には之等諸機關の取り扱ふ財貨の種類、數量等は一定地域の構造の基礎的要素を成してゐる。故に一定地域に存する之等の諸要素を分析、綜合して初めて地域的個性が明かとなる。

更に生産され配給されたものは、或は再生産のために消費され、或は終極的消費に供せられ

る。如何なるものが如何なる程度に、如何なる方法により、且つ如何なる人又は團體によつて消費せらるるかは、一定地域の經濟的個性を最も明白に表示するものである。即ちその地域に存する經濟形態、人口關係、富力の程度の如き純經濟的事情を示すのみならず、更にその自然的文化的特徴をも反映するものである。只從來は消費は經濟外の問題とするもの多く、之に關する諸種の方式又は法則は寧ろ自然法則的なものであつて經濟的に非すと考へられ、經濟地理學に於ても、僅かに自然が消費に及ぼす影響如何の問題として論及されたにすぎなかつた。併し乍ら生産より消費に至る諸過程を經濟地域の構造要素として見るならば、消費の状態及びその組織は經濟的要素の一と云ふべきである。共同消費の法則による種々の施設、消費の代替性による消費生活の變化、財貨の保存、貯藏制度、浪費を助長するが如き施設の有無、節儉促進の施設、更には救貧、救荒の諸制度の如きも、各地域の消費状態を反映するものとして研究するに値ひする。從來全く等閑に附せられてゐた之等の諸要素を究明する事は、地域的個性を新しき方面より高調するに役立つであらう。殊に計畫經濟、統制經濟の發展に伴ひ消費規整が國民經濟上重大なる意味を有するに至れば、各經濟地域の構造要素として重要な地位を占むるであらう。蓋し生産は消費を前提として行はれ、而して之を終極點とするものであり、又消費

状態如何が結局國民生活の程度を表示するものであり、從て各地域に於ける文化度、地域的個性を表現する事となるからである。

第八節 交通、通信制度

經濟的個性の異なる多くの經濟地域が有機的に統一されて一體となり、更にその内部の人的、物的存在が給付編制を通じて地域的統一をなすは、之等のものを連繫する交通、通信の機關が發達しそれが一定の制度によつて整備されてゐるからである。如何に觀念的に遠隔の地域が理解されても、之と全く交通し得ざるに於ては未だ地的統一體を成せるものとはいふ事は出來ない。故に交通、通信の制度は、之を身體に例へて見れば、恰も血管の如く、神經の如きものである。身體の各部は各々その所を異にし、又その機能を異にするが、而かも一の血管によつて連繫され、一の神經によつて統一されてゐるが故にこそ、有機的統一體となり、獨自の機能を發揮しうるのである。身體の一部に血行が止り、或は神經の及ばざるに至れば、その部分は腐敗し脱落し、最早身體の一部たり得ないであらう。交通、通信の機關は空間的距離の克服をな

す唯一の手段にして、自然的社會的事情の異なる地表に於て之を施設し、各地域を連結するものであるから、交通、通信の施設ほど直接且つ一般的に地的統一に影響を及ぼすものは少ない。人文地理學中に於て交通地理學が最初にその分科として發達したのも之がためである。即ち自然が人間に與ふる影響の大なる事は交通施設に於て最も明白に着看する事が出來、又之と反對に、人知の發達、技術の發展は如何なる自然的強制をも克服して自らの欲する所に移動し、自らの欲する物を持ち來しうるの反作用を有する力が證明されるのである。交通、通信機關の發達は、各地域の有機的統一の根本的要素であるのみならず、自然的景觀を文化的景觀となし、自然的地域を經濟的地域となしうるの原動力である。

交通、通信の施設は自然的事情によつて決定的に影響されるものであるが、併し之が一旦完成した場合には、之は經濟地域の根本的構造要素であつて、眠れる潜在的な自然力は茲に現實的經濟力として利用發見される。自然的事情には何等の變化なき地域が交通の發達によつて全く新しき世界となれるが如き例は枚舉に遑がない。かくして交通の發展に伴ひ經濟地域の有機的統一が促進され、それは更に經濟地域を擴大せしめ、各地域はその固有の機能を最大限に發揮して地的編制に参加する事が出来る。而して交通は已述の如く自然的事情に影響される所は甚

だ大であるが、併し交通、通信には自己に固有の使命と法則とを有するものであつて、只、その時、所の自然的、社會的事情に應じて偏倚せる形態を有することは交通論の理論によつて明かである。従て交通、通信の施設は系統的には之を一元化するを以て最も適當とするけれども、その手段、形態は、その自然的、社會的、一般經濟的條件によつて限定される。故に交通、通信の施設は古來大に變化して居るが、併し夫々の機能に順ひ、條件に應じて存在の理由がある。これ等が充分に機能を發揮する時に、經濟地域の統一的要素たるの任務を遂行する事が出来るのである。故に地域構造要素として交通制度を考察する場合には、各種の交通機關の機能と各地域の構造條件との關係を明かにしなければならぬ。要するに與へられたる地域の經濟的個性の構造は交通組織を根本要素として形成され、又その有機的統一性が決定せられる。如何に豊富なる天然資源があり、有能にして稠密多大なる人口があつても、之を有機的統一化するの交通組織が完成されて居なければ、終に經濟力の發展を齎し得ない。故に交通組織は與へられたる地域的構造の重要な要素であると共に、國土計畫の實施される場合には、一定地域に於ける凡ゆる要素、條件を綜合し、現在及び未來を大觀して交通組織を考究する事が絕對的に必要なる前提である。

第三章 經濟地域の文化的構造條件

第一節 文化的構造條件の意義

凡ゆる社會現象は一國又は一民族の文化の反映であり、生みの子である。文化一般を離れて經濟現象を理解する事は出来ない。文化は人間が一定の社會的秩序の下に於て創造したる價值的體系であつて、その本質、意味を把握するには之を大觀的に綜合して考察すべきものの如くである。併し之は哲學のみ能くなしうる所であつて、形而下の學問に於ては、一定のアプリオリを定立し、之に基いて文化を各部門に分類して、その相互の關係を分析的に究明するの外はないのである。かくして分類されたる文化諸形態は勿論一國又は一地方の文化の本質をなすべき根本的指導原理によつて貫かれて居る。従て文化の本質を異にする場合に於ては、同じく宗教、藝術と雖も亦その内容、形態等を異にせざるを得ぬ。更に諸種の文化形態は自然的關係、又は他の文化的條件によつても影響され、その現象形態は固定してゐるものではない。併し乍

ら已に述べたるが如く、人間は種々の條件の下にその文化目的達成の爲めに凡ゆる創造をなし、之を共同の文化財として保存し、更に之を條件とし又は手段として無限の文化的創造をなすものである。人間は自然的關係によつて影響されて居り、その行動は所與の自然的條件によつて運命的に決定されて居るかも知れぬが、併し文化は決して運命ではなく、人間の意思であり、自由であり、創造であり、自己生命の再生産であるから、人間は却て自己の創造した文化的諸制度から束縛され、否、解放される事を拒否する場合さへあるものである。例へば一定の社會組織は人間が長年月の間に化成したる文化の一形態であるが、この社會組織は夫れ自身辨證法的に自己否定をなし、終には文化の發展の桎梏となる事は歴史に於ける事實であるが、而かもその社會組織の下に於ける人々は、それが已に存在の理由を失へるに拘はらず、尙ほも之を存続せしめんと努力する場合が多いのである。革新運動よりも現状維持運動が常に一般的であり、強力である事實に徴するも、この間の事情が推察出來よう。人間は自然に對しては常に能動的、否定的であるが、文化に對しては寧ろ盲從的保守的であるともいひうる。

文化をかくの如く觀する時は、文化一般は變化しつゝも常に經濟活動に大なる影響を及ぼすものである。従て文化は與へられたる條件として一國又は一民族の經濟活動に大なる影響を與

へるのみならず、更にその各地域の經濟的個性の構造を決定する最も大なる條件である。併し乍ら文化一般は概念的に經濟と區別さるべきものであるから、如何に文化一般が經濟地域の構造に對して大なる影響を與ふるにしても、それは構造の要素を成すものではない。例へば家屋の建築の例をとるに、その貧富の差によつて様式は異り、或は地方の風習により間取りが異なるが、この際の貧富の差、地方の風習の差の如きは建築構造の要素に非ずして一の條件にすぎない。又同じ程度の財産を有し、且つ同一の業務を營むものが、同一の材料を以て家屋を建築したる場合にも、その周囲の狀勢、本人の性格趣味、及び建築設計者、大工の技能によつて異なるものが出來上るであらう。文化が經濟地域の個性の構造に影響するはかかる意味に於てであつて要素そのものとしてではない。而してかかる意味に於ける文化は凡そ人間の創造せる凡べての方面に存するわけであつて、到底之を列擧しつくす事は出來ない。併しその影響が最も一般的にして且つ根本的なる條件と見るべきものは必しも無限に存するのではなく、又その影響或は作用の程度又は方向は夫々一定してゐるから、之を綜合大觀すれば自ら類型化する事が出来る。個々の地域につきその構造を分析して考察する場合には、文化の具體的表現形態によるべきであるから、本書に於ては、地域の經濟的個性の構造に對する最も一般的、根本的條件

となるべき文化の諸形態のみにつき概説する事とした。

第二節 政治組織

政治と經濟とは社會組織の兩面であり、前者は形式にして後者は實體である。政治を離れて經濟なく、經濟を離れて政治はあり得ない。併し概念的には政治と經濟とは異なる自律的法則を有するが故に、斷じて政治即ち經濟ではない。政治は種々の原則によつて指導され、之に適應して固有の秩序と組織とを有する。社會組織の形式たる政治と、實體たる經濟組織とがその均衡を失ひたる場合には、社會的混亂動搖が惹起される。歴史上の混亂時代、暗黒時代は概ねかかる場合の現象である。而して政治は一定の人によつて、一定の地域、そこに居住する人民を統治する秩序であり組織である。又一面より見れば政治の窮極目的は國家生活を通じて人格の完成をなさしむる事であり、而して國家はそれ自身一の地域性を表現するものである。換言すれば政治は一定の政治的指導原理により、一定の指導者、一定の地域及び人民の結合關係、編制關係である。故に現實の政治は地域的觀念を離れて存在しない。或る意味に於ては、政治

は經濟以上に地理的限定を受けてゐるともいひ得る。政治的領域の廣狹は政治組織の如何によりて異なる。血縁社會、村落、都市、領域、民族が一の地理的領域を形成しうるのは、その政治組織に基くのである。而してその政治組織の如何、その運営の如何は、各政治地理的地域内の經濟組織に對して重大なる影響を及ぼすものである。例へば同じく資本主義經濟の行はるる國に於ても、政治の如何によつてその弊害の生ずる所少く、社會の發展、文化の興隆を促進しうる場合がある。デモクラシー、專制主義、獨裁主義、全體主義、社會主義等種々の政治的指導原理によつて政治組織が存在し、原則的には何れを可とするかは決定せられるにしても、現實の場合につきて見れば、その指導者、運営の如何によつて、一國又は一地域の經濟に及ぼす影響は異り、又國民性その他の事情に應じて可否長短相異なるものである。従て或る一國、一地方に於て經濟的發展を齎したる政治組織が必しも他の國、地方に於ても同様の關係に在るとはいへない。かくの如く政治組織の如何は、一國又は一地方の經濟的個性を決定する上に最も一般的なる條件をなすものである。

政治組織が地域の經濟的個性に及ぼす影響として最も顯著なるものは、政治組織の發展によつて地域的統一が促進される事である。例へば之を一國內につきて見るも、中央集權政治が行

はれ一國が完全なる統一の下におかれる事は即ち國內の各地域が有機的に統一されてゐる事を意味する。各地域が有機的に統一されて初めて各地域はその固有の經濟的機能發揮し、全體給付の編制に参加し得る事となり、茲に地域的個性は益々發揮されるのである。之と反對に封建社會に於けるが如く地方分權主義の政治が行はれる時は、各地域は政治的に孤立閉鎖され、その結果、各地域が自給自足の經濟を行はざるを得ず、何れの領域も同様の經濟を營み、地域的個性を發揮する事は困難であつた。又各國が資本主義的國際主義によつて政治を行つた時代には、各國は自由貿易を營む事が出来、相對的原費の法則に基く生産と交換が行はれ、従て資源の有無の如きは問題ではなく、アウトアルマー、統制經濟、ブロック主義の如き經濟原則は何人も考へなかつた所である。然るに第一次世界大戰後、國民主義の政治が行はるるに至つてから、全く新なる經濟組織を必要とするに至つた。資本主義が崩壊し、新しき經濟への再編制をなすに方りては、經濟自身の力による事は出来ないのであつて、政治組織の力に俟つの外はない。茲に於て最近、政治が強力に經濟を支配するに至り、從來の如く政治と經濟とが全然自律的に自己固有の方向に進むといふが如き事は不可能となつた。封建社會に於けるが如く、政治と經濟が恰も同義であるかの觀を呈するに至つた。而してその政治組織の新秩序は種々の新原

理によりて指導され、之に適應してその運営、機構は異なるのであるから、この事は經濟の地域的編制に對しても革命的變化を來さずんば止まないであらう。故に政治上の新秩序は國家間に於てその地域的個性を變革するのみならず、更に之に適應して國內的でも各地域の經濟的個性の構造に大なる影響を與へる事は必然である。新秩序を確立せんとする國家が何れも國土計畫策定を主要なる政治綱領とするは國家の各地域の構造の變革を豫想せしむるものである。

かくの如く今日に於ては政治組織が經濟に重大なる影響を與へ、根本的變革を齎しつつあるが、併し政治組織は終に經濟の條件たるに止り、經濟地域の構造要素そのものではない。各經濟地域は特定の政治組織を條件として、之に適應するが如くに構造を形成し、國家全體、世界全體への地域的統一に参加するのである。何れにするも現代に於ては政治組織は地域的個性の構造を究明する上に最も重要な條件であつて、之を理解する事なくしては地域の構造の研究は全く不可能といふべきである。

第三節 社會階級制度

社會を構成する人間は先天的に生理的精神的に同一でないのみならず、その生活環境によつ

て優劣の差を生じ、更に人間の社會的編制に於てその活動の條件に差等を附せられる。天賦人權説の如く苟も人間たる以上は平等に社會的諸關係に入り込むべしとの理想は何人も望む所であるが、現實には異なる社會的條件の下に一定の地位に就きて社會的編制に参加してゐる。この社會的編制に於ける各人の地位は、或は職業形態によつて區別され、或は身分 (der Stand) の高下により、或は階級 (die Klasse) の如何によつて區別される。職業形態の差異は封建社會、氏族社會又はカストの社會に於ては身分によつて決定され、職業の上下は身分の上下と一致してゐた。併し乍ら形態の差異は社會的支配關係とは別個の概念であるから、今日では農工商は直接に支配關係を有するわけではない。若し一が他の職業に對して社會的支配力を有するとすれば、それは絶大なる資本力を有するからである。かくして今日では資本力による社會的支配力を有するか否かによつてその社會的地位が決定せられる。之が即ち階級關係である。而して社會階級の編制は經濟組織及び勞働組織に重大なる影響を與ふるものにして、從て各地域に於ける階級編制はその經濟形態、經營形態、經濟能力を決定するものである。蓋し社會階級の固定は、強力なる階級に屬するものをして絶對的支配力を揮はしめ、之に反し微力なるものはその人格が無視され、その機能を最大限に發揮する事が不可能なる場合が多いのである。又階級

制度の強固なる時は、階級の利益のために凡べてのものが運用される。例へば資本主義社會に於ては、凡べての經濟的活動は資本の收益率増大のために利用されるから、資本を有せざる労働者、小作人がその固有の經濟能力を發揮し得ざるは勿論、その經濟活動をなすべき場合につきても、只資本の收益率のみが唯一の指南車とされるが故に、産業の地理的配置の如きも、國民經濟全體の立場よりするは極めて不合理、不經濟なる場合が多かつたのである。かかる不合理は國民經濟の統一化と資本の集中獨占によつて或る程度に是正されたけれども、尙ほ群小の資本家は夫々の立場に於て利潤追求を事とした。一方、資本の集中獨占の結果は、多くの産業豫備軍を形成し、資本家は之を自己の欲する産業に吸収すると共に、自己の欲する地域に生産立地を決定して最大利潤の獲得に力めた。茲に於て階級分裂の強化と共に、産業の地域的集中分散の速度が増大し、都市と農村、商工地域と農業地域の區別が明確となり、更には商工地域、農業地域も夫々特殊なる構造を有するに至つた。

封建制度の如く身分の上下によつて社會的支配力が決定され、如何に多くの富力を有するも、高き社會的身分を有せざるものは階級として社會を支配する力を有しない。かかる場合には資本よりも直接に消費しうるもの、或は生活必需品に對する欲求度が高く、從て一般に農業が盛

に行はれ自給自足經濟となる。之に反し資本力の絶對的支配が行はるるに至れば營利活動が盛となり、物の生産、獲得はそれ自身重要性を失ひ一の手段と化するが故に商工業を主とするに至る。かくの如く階級制度は社會の經濟的指導精神に大なる影響を與へ、物の生産の意義、労働觀等も著しく變化するものである。労働を嫌惡し、結果本位、唯物的思想を醗醸し、更には階級意識を強化して鬭争的破壊的たらしむる。而して階級制は一國內に於ては同一の原則によるものではあるが、その階級分裂の度は各地方によつて異り、その分裂度に應じて經濟形態、經營形態が異り、更に一般經濟活動に於ける經濟觀、労働觀が異なるのであるから、それは應て各經濟地域の構造に大なる影響を與へる。例へば原則としては同じく資本主義經濟が行はれて居るとはいへ、我國と英米諸國とを比較して見るに、その經濟構造は著しく異り、更に國內の各地域に於ける構造が異つてゐるのは、勿論その自然的社會的歴史的條件にもよるが、階級編制の差異、之に基く經濟觀、労働觀が異なるからである。又同じ農業地域と雖も、そこに於ける地主、小作人の階級關係によつて、各地域の生産狀態、經營狀態、農民の生活狀態が全く異なる事は、各國の農業を比較して見れば明かであり、又國內の各農業地域を比較しても直ちに看取しうる所である。故に經濟地域の構造條件としては社會階級の狀態は最も注意すべきものにし

て、而かも各地域は夫々獨特の身分、階級が成立してゐるのであるから、之等の諸制度につき考察せねばならぬ。

第四節 社會的結合關係

經濟地理學の研究對象たる經濟地域は夫れ自身一の有機的統一體と考へられ、又その各地域が更に地的統一をなすものと考へらるるが故に經濟地理學の存立は可能である。而して一の地域が有機的統一であるといふ事は、その内部に存する人間及び地區が何等かの方法によつて結合してゐるからである。人間は社會的結合をなして初めて經濟活動をなしうるのであり、又その結合力の強固なるに従て經濟力は内包的にも外延的にも發展しうるのである。人間の文化の低き時代には單一なる紐帶によつて結合してゐたものと考へられ、例へば原始時代に於ては血縁又は地縁を同ふするの故に團結し社會を形成してゐたのであるが、文化の發展と共にその欲望が質量共に増大したるを以て、その欲望充足を全ふするために無數の結合關係を生じた。ある目的のためには全く地域、國境を越えての大同團結さへも生れた。かくして各地域は或は利

益社會として或は共同社會として結合されたのであるが、併しこの結合關係又は程度、更にはその目的、種類によつて各地域のもつ個性は異つてゐる。各地域内の諸事情に應じて結合關係は著しく異なるのである。例へば産業組合の地方的分布、及びその業績、内容を見るに各地方は夫々著しく異つて居る。政治結社にしても、或る地方に於ては團結力が強く且つ他に對する闘争力が大であるか、他の地方に於ては全く無關心なるものもある。かくの如き結合關係の強弱は經濟的精神的結合に大なる影響を及ぼし、經濟上の共同經營、信用狀態、隣保扶助等の如何も之によつて決定せられる。従て各地域に存する諸種の講、組合、仲間、結、郷倉、隣保事業等凡ゆる結合形態につきて研究するを要す。

社會的結合關係は社會的結合單位の分化合化の狀態と密接表裏の關係を有するものである。人間は社會をなしてのみ生活しうる。ピュッヒャーの所謂個人的食料探索時代の如きものは現實に在り得ない。必ず一定の集團をなす。集團はその構成單位の存する事を意味する。併し集團と單位の未分化の狀態があり得る。この未分化の狀態が家族共同體である。現代の地表に存在するものとして社會集團と單位とが未分化の狀態にあるものは極めて少く、自然民族に於ても必しも家族共同體ではなく、多くの家族が血縁又は地縁によつて結合せる共同體にして、家

族は分化獨立せる社會單位ともいひうる。只南スラヴのツアドルガは最近に至る迄典型的家族共同體とされ、組織と單位と未分化のものとされた。我國の氏族社會に於ても之に類似するものがあつたやうであるが、今日では極めて山間偏地に偶生的孤立的に類推物があるに止る。資本主義社會に於ては家族は全く獨立の社會單位となりて獨立の家計を有し、他の經濟組織と明確に區別される。即ち人間は家計以外に獨立の經濟組織を有し、企業を營み、生産に參加する。この家計と經濟組織との分裂は經濟形態によつて異り、小農經濟に於ては未だ家計と企業經濟とが分離してゐないが、商工業に於ては多分に分化してゐる。更に家族は必しも家計と一致せざるに至つた。即ち個人主義の發達による個人の解放は、個人の生活にとりて必しも家族制度を必要とせざるに至つた。茲にも亦經濟關係は著しき變化を生ぜしめた。家族を中心とするか、或は個人を中心とするかによつて如何に經濟狀態が異なるかは我國と歐米諸國とを比較すれば明らかであり、又我國でも今日と昔時とを比較すれば明瞭である。殊に家族主義によるか個人主義によるかによつて企業形態は著しく異なる。個人主義は結局株式會社の發達を必要とするが、家族主義は必しも然らず。更に株式會社を形成する場合にも、その内容、運営が異つてゐる事は、我國と歐米の株式會社が、形式的には同じく株式會社なれども、後者が全く營利的資本主義的

なるに反し、我國のは多分に家族的溫情的である。家族的血縁的精神の強き支那に於ては株式會社の發達は困難であり、印度の如くカストの家族制の存する限り近代的企業の成立は不可能である。要するに社會單位の分化の程度は經濟精神並に經濟形態に對して強力なる條件であるのみならず、他の高次の社會的團結に對する觀念も異り、それは懸て地域の統一に對しても大なる影響を與ふるものである。

最後に鬭争につきても考察しなければならぬ。右に述べたる所は主として人間の結合關係を促進しうる可能的條件として觀察した結果であるが、人間が一の社會をなし同一の目的を以て行動する場合に、必しも精神的物質的に利害が一致するとは限らない。殊に有限のものを無限の欲望に適應せしめんとする經濟活動に於ては、その共同團結の限度は頗る狭小にして、その限度を超ゆれば鬭争を惹起する。社會組織、階級制度は常にその内藏する矛盾にさらされ、鬭争が起り易い。相接する各地域、各國家も亦利害相反馳する場合が多い。舊時に於ては各村々之間に於ても殆ど年中行事の如く鬭争が行はれた。各國間の戰爭は永遠に無くならぬであらう。而してこの鬭争は種々の事情によつて惹起されるのであるが、併しその頻發度、鬭争形態等は國により、地方によつて同一ではない。鬭争は時に經濟的束縛を打破し、却て經濟的發展を促

す事もあるが、一般に經濟の發達を阻害し、文化を停滯せしむる事が少くない。殊に近代の科學戰に於ては、その規模が大であり、極めて長期に亙るを以てその消耗度は實に驚くべきものであり、全く舊體制を變革せざれば已まざるが如き影響力を有す。現に滿洲事變、支那事變によつても、我國の經濟機構は大なる變化を遂げ、更に産業の地域的編制の如きも急速に推移しつゝある。今後世界を擧げて大戰の渦中に巻き込まれ、知能の全力を以て戦火を交ふるに至れば、經濟の一般的機構は更なり、各地域の經濟的給付編制も變化し、遂に國家組織迄も變革されるであらう。戰爭は一見偶發的のものではあるが、地域的構造を考ふる場合には破壊的否定的構造條件として注目すべきものである。

一國內の地域を見る場合にも、鬭争の頻發度、形態は著しく異なるものにして、例へば小作争議、百姓一揆、打毀し、或は山論、水論の如きものは、一定地域の個性に影響する所が大である。かかる鬭争形態は地方的に特異性を有し、例へば我國の百姓一揆の如きもその地理的分布状態も一定の類型を有する事は注目すべき問題である。故に經濟地域の構造を研究する場合には、社會的結合を促進する條件の外に、破壊的否定的條件をも考察しなければならぬ。

第五節 民族的文化能力

各個人は夫々特殊の性情と體格を有し、人生觀を異にし、技能に巧拙あり、思索力に深淺あり、更にその生活様式、風習、趣味を異にするが故に、却て社會的結合をなし、相互に給付をなしうるのである。之と同様に一定の民族又は一定の地域を構成する住民も亦之を一體として見る時、著しき特殊性を有する。今日の人間は民族として統一される時に文化的存在たりうるのである。民族とは固有の文化の擔當者として一定の種族又はその集團を考察したるものにして、民族と種族とは必しも嚴密に區別する必要はないが、茲には假りに民族と稱する。個人の個性が先天的後天的關係によつて生ずると同じく、民族の個性即ち民族性、文化能力、更にはその地方化されたる地方人の人情氣質能力も亦その人種的由來によるは勿論、自然的社會的歴史的事情によつて長年月の間に化成されたものにして、部分的には變質し易きも、之を全體として見れば容易に變化するものではない。而して一民族又は一國家の文化は實にこの民族性の函數であり、教育、倫理、宗教、藝術、技術、科學の如きは、一民族又は一國家の文化能力を

表現するものである。即ち文化は民族性を離れて存在し得ないのである。然るに民族性なるものは極めて曖昧なる概念であり、從來は全く常識的に理解され、之を全體として把握するだけの科學がなく、その爲めに民族性なるものは科學の研究對象たり得ないかの如く考へられたのである。蓋し民族性は從來の科學を以てしては説明し得ざる神祕性を有したからである。然るに獨逸のナチスの出づるに及びて、文化創造の目的及び出發點を民族に在りとなし、更に民族の根幹を「血と地」(Blut und Boden)に求め、民族の純粹性の保存によつて固有の文化の創造發展を期しうるとしたのである。之がために先づ獨逸文化の破壊者であり、冒瀆者たる猶太人の徹底的排斥を行ひ、凡ゆる文化部門から彼等を追放した。かかる強硬手段に對しては、人道主義の立場より非難されたのみならず、有能なる猶太人を驅逐したならば獨逸文化は衰退するであらうと懸念されたのである。併し乍ら事實はそれと反對にして、少數の天才的學者、藝術家は影を没したけれども、却て獨逸國民一般の文化は向上し、所謂ゲルマン化、即ち文化の一般化が行はれた。之によつて見るに、文化の發展は必しも少數の天才によつて創造されるのではなく、又他國人の天才的業績を應用し又は採用するも、一民族の文化が本質的に變化發展するものではない事は明かであつて、全く民族固有の文化能力の中から湧き出づるものである。

而して文化の質、その普及度は一民族に於ても地方的に決して同一ではなく、性質、形態等著しく異つてゐる。文化の風土學的研究や文化景觀論が成り立つのは之がためである。一國民の文化は先に述べたる凡ゆる文化形態が渾然として融合し、均衡状態にある時に、文化は益々發展するのである。文化の均衡状態を失したる民族は健全なる發展をなす事が出来ない。一定の個人はその精神力及び肉體力が均衡状態にある時に健全であると同じく、一民族の文化の一部門のみが極端に發展せる場合は却て滅亡するの危険がある。古來多くの文化民族が跡形もなく滅亡したるが如きは多くは各文化部門の不均衡によるものである。故に極端に一部の文化形態の發展を要求し、之が促進に過大の國力をつくす事は、或る程度には可能であり、又必要な場合もあるが、それは民族全體の文化力を限度とするものにして、その限度を超ゆる時は、却て文化一般の衰退又は破壊となるの虞がある。一民族の文化力を無視したる性急なる文化政策の如きは大に注意すべきである。文化力が各民族、各地域に於て異なる事は已に經濟地域劃定論に於て概説したのであるが、本章に於ては、文化の各部門が、文化力を地域的に如何に表現してゐるか、而してそれが經濟地域の構造形成の條件として如何なる作用をなすかを略述するに止めよう。經濟地理學に於ては文化の一般的意義の究明を必要とせず、文化力の表現たる

種々の文化形態を與へられたる條件として、その地域的構造に對する關係を考察すれば足るのである。

第一 人情氣質

人情氣質の如きは極めて常識的非科學的なる概念であるが、併し乍ら一定の方法によつて研究するならば、各地方は夫々特定せる人情氣質を有する事が明かとなる。即ち人情氣質とは一定地方の性格を一般化し抽象化したるものにして、多分に心理作用の表現であり、社會環境の反映であり、從て道德觀、人生觀によつて影響される事甚しく、更に人種的、生理的、遺傳學的條件が根本的基礎をなす。而して一定の時、一定の地域につきて見るならば、勿論、例外的事實は存するにしろ、大體の傾向又は類型がある。かの「人國記」の記す所は人情氣質の地域性を最も巧妙に表現したものと云ふべく、個々の事實につきては尙ほ論議すべき餘地があるにしても、當時の學問を以てしては驚歎に値するものである。當時の如く科學的研究方法の發達せざりし時代に於てすらあれ丈けの研究が出來たのであるから、今日の發達せる科學的方法を以てすれば、人情氣質の如きは科學的に闡明しうる筈である。人情氣質は不知不識の間に地方人

の言動に表はれるものであり、又表はれざるにしても、事物の批判の基準となり、或は潜在的條件となる。地域の特殊性を研究する場合に理論的に説明し得ざる事實の屢々存するは、多くの人情氣質に因るものである。最も理論的たるべき經濟に於てすらその影響を見るのであるから、他の非經濟的事件に對する影響は少くない。只、人情氣質の如きものは之を計量し得ないために、地域的個性の構造を考察する場合には特に細心の注意を必要とす。然らざれば一方人に對し感情的誹謗論となり、或は盲目的禮讚論となるの虞がある。

第二 宗教并に信仰

宗教が經濟と對蹠的なるものである事は已に述べた通りである。對蹠的なるが故に宗教の如何によつて反對解釋的に地域の經濟的特殊性を視ふ事が出来る。宗教に對する觀念は民族により又文化の度によつて異なる。白人の如く少數の宗教を國教として強制され、國民全般が同一宗教に満足しうるものもあり、又我國の如く世界中の殆ど凡ゆる宗教信仰の自由を有し、更に同一宗教に屬し乍ら無數の宗派に分裂し、而かも信仰の度を異にするものが、同一の家庭生活をなし、同一の職業に協同するが如きは、恐らく外國人の理解し能はざる所である。又宗派の差

異のみならず、その信仰の深さも地方によりて著しく異り、之は總て經濟に對する觀念に影響し地域的個性の特異性を生ぜしむ。例へば同じ農村を見るも、眞宗の盛んなる地方に於ては村の民度に對して不均衡に大なる寺院が部落毎に聳えて居るが、天台、眞言宗の行はるる所に於ては僅かに山中に殿堂が隱見してゐる。或は鎮守の森の大小によつて神社に對する地方人の崇敬度を察知しうるであらう。更に外國を旅行すれば村の教會の姿により、或はドームの形によつて、キリスト教の新舊を知り、回教、バラモン等の弘通せる状態を知る事が出来る。又各地方に於ける墓場の状態を見る事によつてその宗教、信仰の度、民度、風習、更には經濟力を知る事が出来る。外國の如く宗教が特定されてゐるものに於ては、單にその信仰度によつて地域性を知りうるに止るが、我國の如く無數の宗教が分布してゐる場合には宗教は重要な地域的構造條件といはねばならぬ。而して宗教と一民族又は一地方の文化の度とは密接の關係を有し、淫祠邪教の興隆するが如きは文化の低度なるか、或は社會秩序が混亂して人心動搖し歸趨を失へる事を示すものである。殊に眞正の信仰に缺け、迷信の横行する場合には、人間の行動は全く非合理のものとなり、經濟の發達を妨ぐる事が少くないのは、經濟發達の幼稚にして文化の低き地方に不合理なる淫祠邪教、極端なる迷信の盛行する事實に照して明かである。固より人

生に於ては人知の及ばざる神祕の出來事の存することは明かであるが、卑近にして明瞭なる事實をも一々迷信によつて解釋するならば、計量と合理主義を根本とする經濟活動は不可能となるであらう。支那があれ程の古き文化を有し乍ら經濟の發達せざりしは迷信的道教が深く人心に喰ひ入つてゐる事も重大なる原因の一である。宗教及びその信仰の程度は具體的に計量する事の困難なるは、先の人情氣質と同一ではあるが、併しそれ丈けに又却て經濟地域の構造の特殊性に及ぼす影響力は大である。

第三 科學及び教育

科學は事物に對する構想力、推理力、論理追求力によつてその發達が決定される。故にこの能力を缺ける民族又は地方に於ては科學の獨創的發達は勿論、他人の科學的體系をも取り入れる事が出来ず、從て之を企圖せんとする關心もない。現代に於ては科學が最も文化力を明確に表現するものであり、文化力なき所に科學もなく、又科學なき所に文化の發達はあり得ない。而して科學とは必しも自然科學の謂に非ずして、自然現象に關するものの外、文化現象につきての科學も亦同位的に重要である。文化の低き國が科學の必要に迫られて科學を取り入れんと

する時には、往々科學を狹義に解し自然科學のみの發展に力をつくす場合が多いが、之は已に述べたるが如く重大なる錯誤にして、自然科學が文化一般と遊離して宙に浮べるものではなく、一民族の文化の反映、函數であり、文化一般に深く根ざして居る。而して文化は、宗教、教育、藝術、文學、歴史、政治、經濟といへる諸形態の有機的統一である。偉大なる文學も藝術もなき民族に、偉大なる自然科學のみが發展する筈はない。科學は科學的精神によつて創造される。科學的精神は森羅萬象に對する構想力、推理力、論理追求力の生みの子である。而してこの構想力、推理力等は民族により地方によつて著しく異り、容易に之を改變する事は出来ない。時にはその改變は全く不可能なる場合もあり、或る場合には極めて長年月を要する。民族の優劣、地方文化度の高低は全くこの精神力によるものといへよう。同一物を研究する場合にも、構想力、推理力の作用、形式が異なるのであつて、例へば支那に於ては古來種々の學問が發達したが自然科学的考へ方が生れなかつた。我國に於ても科學精神はあるが、分析的でなく概括的であり、即ち直觀、大觀の學が多いのに反し、西洋に於ては分析綜合による論證を主とする學問の發達が顯著である。之は極めて大つかみに比較したのであるが、更に仔細に検討して見れば、民族の各部分によつて科學能力、科學精神が著しく異つてゐる。今日の我國の各地域を見るも

經濟の發達せる地方と然らざるものとは、結局、科學が生活に多く取り入れられてゐるか否かの差異による。支那と我國とを比較しても亦然りである。斯くの如く科學能力は文化と共に在り、且つその變化發展は民族、地方によりて異り容易に變改出来ない。併し乍らそれは必しも運命に非ず、又その變改は不可能とは斷定出来ない。科學能力の涵養は一に國民の教育に俟て或る程度に發展改善を計る事が出来る。

教育制度も亦文化の反映にして、文化の高き國は教育が盛であり、教育制度の發達する時は文化も亦向上する。故に何よりも先づ教育制度の發展を計る事が必要であるが、教育の効果たるや極めて迂遠にして直ちにその成果を計量し得ないために、教育は往々にして等閑に附せられ、又教育の機會は身分的階級的に、又地方的に頗る不均等である。従てその教育制度の如何によつて青年が實際社會に立ちたる場合に、凡べての社會組織の運營、之に於ける地位が異り、延いては經濟組織の差異を生ずる。教育制度の如何は地域的構造の決定に對して大なる影響を及ぼすものであるが、從來は單に學校の數、教育の形式的程度、學生生徒の數等によつて地方的特色を見るに止つたが、併し教育者の素質、その教育上の根本精神等は一國文化の特色を支配するものである。學問を以て個人主義的に立身出世、求利の手段とのみ考へるか、人格の完

成そのものを目的とするか、或は國家本位たるか、國際主義たるか、精神主義たるか、唯物主義たるかによつて異なる事は言ふ迄もない。教育制度の如何は實に民族間に於ても亦一國內の各地域に於ても、文化一般に對し又經濟に對して重大なる條件をなすものであり、從て經濟地域の構造條件としては強力なる作用をなすものといへよう。

第四 技 術

廣く技術といへば人間が一定の目的に到達するために、目的と行爲とを適合せしむる手法である。故に技術は宗教、教育、藝術、文學の如きものにも存するわけである。併し一般に技術と呼ばれる場合には、經濟に於ける生産、配給の手法である。經濟と技術の關係につきては古來多くの學者の論じたる所であるが、技術としては可能なるものも經濟的には活用し得ない場合があるので、技術は經濟發展の原動力ではあるが、經濟的に常に制約されてゐる。經濟は技術に對する統轄者であり、技術は經濟に於ける限定者といはれるのは右の如き事情によるものである。而して技術は、凡べての人間の機能及び事物の機能を最大限に發揮せしむるために之等のものを結合する手段である。換言すれば、技術は人と人、人と物、物と物とを結合せしむ

る手法手練である。故に人間及び事物の本質が充分に認識され究明されなければ、眞の技術の發達はあり得ない。從て技術は、事物の本體を意識的に論證する事なく、全く偶然なる結合状態を制度化して技術となし、一定の目的到達に利用する事もあり得るが、眞の技術の發達は科學の發達と一般文化力に俟たねばならぬ。故に技術は、或は一民族の直觀能力又は科學能力によつてその巧拙、精粗が決定せられる。而して技術の最も進歩したる具體的形態は機械であるが、この完成されたる機械も亦その操作運用につきても技巧を必要とし、從て同一の原料と同一の道具又は機械によつても亦その生産結果に著しき差異を生ずる。かくして一旦制度化されたる技術は社會狀勢によつて變改され又はその存在の理由を失ふ事もあるが、一定の期間を限定して見るならば、技術は容易に變改されるものではない。殊にその技術能力に至りては全く民族的地方的に限定されてゐる。古來各地方に特殊産業の發達したるは、その原料の所在、保護獎勵にもよるが、地方人の技術能力による所が甚だ大である。而して一旦出來上りたる技術、その具體的表現たる機械、道具、之に關連する作業上の手法手練等が如何に一民族、一地方の經濟状態に影響を與ふるかは茲に絮説する迄もない。從て廣義の技術の發達程度によつて各經濟地域の構造は異なるのであつて、幼稚なる道具を用ふる有機的生產の行はるる所に於ては資本

主義經濟は發達し得ないし、又同じく機械による資本主義經濟の行はるる地域に於ても、或は重工業を主とし、或は化學工業、纖維工業を得意とするが如く、その地域に存する技術的施設又は技術能力によつて地域的に異なる様相を呈す。故に技術は常に變化するとはいへ、與へられたる文化的條件として見るならば頗る重要性を有するものであるから、地域の構造の究明には、一定地域に於ける技術の状態を凡ゆる視野より分析考察するの必要がある。

第四章 經濟地域の自然的構造條件

第一節 自然的構造條件の意義

經濟地域に於ける自然的諸關係が如何なるものなるかにつきては、已に經濟地域劃定論に於て少しく論及した。併し之は經濟地域劃定手段、標準として考察したのであるが、本章に於ては、經濟地域の構造の個性形成の條件として如何なる意義を有するかを概説する。

従來の經濟地理學に於ては、自然と經濟との相關關係、特に自然が如何なる影響を經濟に與ふるかを研究し、或は經濟又は生産要素として自然を觀察し、或は自然の經濟的説明を主としたのである。従て自然そのものを經濟地理學の中心問題となし、主なる研究對象と考へたのである。併し經濟地理學が獨立の文化科學であるとするならば、かかる研究的態度は妥當性を缺くものといはねばならぬ。言ふ迄もなく、經濟は人と人との關係に於て、外在する自然の潜在力を利用發現するの組織であり、秩序であるから、自然を全然離れたる經濟なるものは初より

存在し得ない。併し夫々の科學は一定の出發點を有するものにして、若しも密接なる關係あるの故を以て凡べてを自己の體系内に取り入れんとするならば、即ちその學問は獨自の科學たり得なくなる。一定の限界に於て切斷する事が絶対に必要である。經濟地理學は地表空間を一定の立場に於て地域的劃定をなし、その地域の經濟的個性の構造的聯關を研究するものであるが、その空間的地域そのものが已に自然であるから、當然に自然は經濟地域の個性の構造要素であるかの如くに思はれる。併し經濟地域なるものは、屢々例をとりて説明したるが如く、出來上つた建物である。建物は土地の上であり、土地なき建物は考へられぬ。又その土地のもつ自然的關係が建物の構造に影響を及ぼし、その土地と他の土地との關係によりてその土地に無き材料の獲得如何が建築構造に影響することはいふ迄もないが、併し之等はどこ迄も條件であつて、構造要素そのものではない。而して凡べての現象が條件なくして發生しないと同じく、經濟地域の個性の形成は自然的條件によつて支配せらるゝ事が最も顯著である。只、地理學は自然的條件が最も普遍的支配的であつたため、専ら自然的事情の研究を重要視したのである。

自然が經濟に對して如何なる影響を與ふるかにつきては、已に述べたるが如く古來多くの學者の研究したる所であるが、就中ラツチェルは最も系統的に之を究明し、爾來種々の立場より、

理論的實證的に研究された。之等は何れも特定の地域の經濟的個性の構造條件として研究したものである。而かも一般的且つ因果論的に考察され、從て必然論に墮したものが多し。併し一定の自然的事情が必ず一定の經濟現象を生み出すとは考へられない。ラツチェルは海岸に於ける一定の形狀をなす岩石に波が打ちあつた場合には、何度繰り返へしても同じ方向に碎けて行くのと同じやうに、一定の自然的條件の下に於ては、人間は同じやうな行動形態をとるといふ。之は一種の必然論である。併し波は物理的現象であるが、人間が一の社會組織をなして活動する以上、その活動そのものが異質であり、又同一の自然的事情も亦現實にはあり得ない、只類似のものが存在するに止る。特定の自然的條件なくして經濟地域は成立し得ないが、併し特定の自然的條件があれば必ず一定の經濟地域が形成されるとは斷定し得ない。一定の地表空間に配置せる自然的事情なるものは多種多様にして、その組み合わせ如何によつて所謂自然的景觀も成立するのであり、且つ之等の自然的條件は複合體として特定の條件となり得るのである。然るに從來の研究方法によれば個々の自然現象が個々の經濟活動に對して如何なる影響を及ぼすかを孤立的に研究するのを常とした。勿論多種多様な自然現象が一の複合體として經濟に及ぼす影響を研究する事は事實不可能であるから、他の事情にして同一であると假定し、個々

の現象につきて考察するの外はあるまい。併し現實にはかかる單純なる状態は存在しないし、又一定の自然現象が獨立のものとして與ふる影響力と、それが他の多くのものと結合せる場合とは著しく異なるべきは言を俟たない。故に自然的事情を以て、經濟活動又は經濟地域の個性形成の條件の如く取扱ふ事は只觀念上可能であるといふに止まり、現實には不可能であり、無意義であるとも考へられる。即ち自然的事情を以て一般的に經濟的構造條件として考へらるゝや否やが已に問題でもある。更に又同一の自然的條件が一の經濟活動に對しては可能條件であるのに、他の活動に對しては否定的不能條件たる場合もあり得る。例へば熱帶的高溫濕潤は甘蔗の栽培には絶對的に必要條件でもあるが、之は同じ砂糖の原料たる甜菜の栽培には全く不可能條件である。故に單に氣候の寒暖、地勢の如何が人間の活動に如何なる影響を及ぼし、且つ經濟地域の構造條件たりといふが如きは無意義にして、必ず一定の條件の下に特定の對象につきのみ考察すべきものである。従て構造條件として自然的事情は文化的條件と根本的に異なるものといはねばならぬ。

文化的構造條件中にも一定民族の鬭争性、破壊性の如き破壊的否定的作用をなすものもあるが、併し本質的には多くは建設的可能的である。然るに自然的條件は先にも述べたるが如く、

同一の現象が場合によりて或は可能的條件たり或は否定的條件たり得るのみならず、初より破壊的否定的なるものが少からず存在する。例へば種々の天災地變の如きものは、或は突發的に、或は繼續的に人間の創造せる文化を破壊する事甚しきものである。故に之等の破壊的條件の有無は、經濟地域の形成に對して重大なる關係を有する。然るに從來の地理學に於ては建設的可能條件のみが研究され、かかる破壊的否定的條件は殆ど省みられなかつた。蓋し歐米諸國に於ては比較的に天災地變少く、従て社會の關心が薄いために、地理學者も餘りこの問題にふれる必要がなかつたからである。併し我國の如く天災地變の頻發する國に於ては、之は地理學研究上に重大なる問題である。この問題を考慮に入れずして日本の歴史も地理學も考へ得られない。併しその影響する所は地域的に又經濟形態によりて異なるのであるから、その意義を抽象的一般的に論ずる事は、他の可能的自然條件と同じく、觀念論に墮するの虞が少くない。

右の如く、自然的構造條件は最も根本的であり普遍的であるが、その事は聽て個々の問題を論ずに方りて多くの困難を生ぜしむるものである。自然的條件を個々に分解して説明するが如きは果して現實的に可能なりや、又果して學問的意義ありや否や問題であるが、一應從來の研究方法、説明によつて、個々の自然的條件の特質を一般的抽象的に述べるであらう。

第二節 氣候

第一 經濟地域の構造條件としての氣候の意義

氣候が最も一般的影響を地表の萬物に與ふる事は已に述べたる所にして、從て氣候又は之を直接に反映する事項を標準とする地域の劃定は最も古くより行はれたる所である。人間は如何に文化が進歩するも氣候の影響から脱却する事は殆ど不可能の事に屬し、殊に物質生活の組織的秩序たる經濟に於ては最も強く影響せらるるが故に、經濟地域の個性の形成、從て地域構造の特性を決定する上には、氣候は最も重要な意義を有する事は言を俟たない。從來の地理學的研究に於て、各地域の特殊性が先づ第一に氣候によつて説明されて居るのにもかかる重要性に基くものである。次節に於て述ぶる諸種の自然的條件も或る意味に於て、氣候を具體的に表現するものとも言ふ事が出来る。

氣候とは一定地域に於ける氣象又は天候の平均状態を指稱するのであつて、時々刻々變化する氣溫、氣壓、乾濕の度、日光の強弱、日射時間の長短、風速、降雨量等を綜合的繼續的に觀察して得たる大氣現象をいふのである。大氣現象であるから空氣を離れて氣候の觀念は成立しない譯である。氣候の構成要素は夫々個々の人間活動に對し直接に影響し又精神的肉體的に影響し、總て人間の社會生活一般に影響してその文化的差異を生ぜしむるのみならず、更に人間活動の對象たる外的物體或は外的關係に影響する事により間接に人間の活動が支配される事は最も容易に看取しうるが故に、氣候に關する知識は歴史と共に發達した。特に文化の程度が低くして自然的生活の行はれた時代には一層氣候の影響を蒙り經濟地域の構造が著しく之によつて影響されてゐる。

氣候は地表の凡べての事物に對して影響を與へるが、特に有機的生活體に對して最も著しいものがある。人間以外の生物は全く氣候の絶對的支配下に在るといふも過言ではない。經濟の主體たる人間も一の生物なるが故に氣候の支配を離れる事は出来ない。固より凡べての生物は一定の氣候の下に於て之に順應するの機能を有し、長期に互つて見れば所謂氣候馴化の行はるる事は言を俟たない所であるが、併しそれは極めて微弱にして且つ頗る長期を要するものである。殊に最も進歩せる段階に在る人間は自己の内部的生理的適應力が微弱なるが故に、外的手段によつて適應せざるを得ない。原始的生活形態たる衣食住に關する諸活動は、謂はば氣候に

對する外的適應の表現ともいふ事が出来る。凡ゆる自然的關係の中に於て氣候ほど廣汎且つ深刻に人類文化に影響するものはない。今日の如く文化の發達進歩せる時代に於ても、各地方各民族が夫々異なる文化を有するは主として之に基くものともいひ得る。所謂風土學なるものが民族性の研究や文化史の研究に對して重要な地位を占めてゐるけれども、風土を決する最大要素は實に氣候である。古來多くの民族、文化の興亡盛衰につき、ハンチントンは一にその氣候の變倚に歸せしめてゐるのは尙ほ議論の餘地ありとするも、多くの眞理を含むものである。又所謂文化東西南北論が、文化の交流水準化は東西に敏速にして南北に緩慢であるとするは、氣候の差異の超克が頗る困難なる事を主張するものであつて、強ち牽強の説とはいひ難く、多分の眞理を含むものである。かくの如く氣候の一般的影响につきての研究はそれ丈けにて一の學問體系をなす程のものであるから、本書に於ては之を要約して、先づ氣候が經濟の主體たる人間の精神及肉體への影響によつて經濟現象の特異性を生ずる所以を述べ、更に經濟活動の對象たる物的手段及び生活資料への影響を通して人間の増減、經濟形態の差異を生ぜしめ、それが應て地域構造の特異性を生ぜしむる所以を明かにするであらう。氣候と文明とが相關關係を有しないにしても、極めて密接不可離の關係に在る事は直に理解出来る所である。

第二 氣候の肉體的精神的影響

氣候の變化、良否が個々の人間に對して肉體的精神的方面に於て著しき影響を與ふる事は古來種々の學者の主張する所であつて、從て一定地域、一定地方の人間の集團社會の活動にも影響する事は明かである。氣候が溫和にして寒暑の差少き事が人間の文化發展に對して有利なりや否やにつきては多くの議論の存する所であるが、極熱、極寒にして四時の變化なき所に於ては文化の發達なきは事實の證明する所である。蓋しかかる地方に於ては經濟活動の根本動力たる欲望の強度低く又その充足の緊張少きが故である。之に反し溫帶地方に於ては、四時の循行、季節の變化が極めて複雑にして秩序的なるが故に、消費需要も多種多様に於て變化に富み、その生活様式も自ら多様性を有し、從て計畫性の必要を生じ組織化せられざるを得ぬ。かくの如き消費需要の差異は必然的に經濟形態、産業形態に影響を與へ、應て一般的に文化形態の差異を生ぜしむるものである。ある民族が一定の氣候の下に多年生活して一定の消費需要が習慣化されてゐるに拘はらず、著しく異なる地方に移住したる場合には、多少その消費需要に變化を生ずるも容易に舊慣を脱する事が出来ないために、その活動力は著しく束縛され、元の如き文

化的發展をなす事は困難である。植民史を見るも、天然資源が豊富なるに拘はらず、母國以上の文化發展を遂げたる事例の少きは右の如き事情によるものが少くない。氣候による消費需要の多種多様性と之に適應する生産とが一致する時初めて文化の發展を見る事が出来る。故に同じく封建社會と云ひ原始共同社會といふも、仔細に之が内部組織を分析して見ると地方によつて著しき差異の存するは、人間の消費需要と生産關係に基因するものといふ事が出来る。東洋に於て夙に經濟的文化が發達したるに拘はらず、近世資本主義の發達しなかつたのは、その政治的自然的混亂の頻發せし事にもよるが、元來近世資本主義が量の經濟であり、大量生産、標準化、規格統一化、單純化による計算の可能性と計畫性とを根本條件とするものであつて、之は歐洲の如く氣候的變化が比較的單純にして消費需要が單純であり、從て之が充足のためにする生産が單純なる爲め、質を無視したる生活が可能であつた事が重要な前提條件になつてゐる。我國の如く多種多様の生活様式の行はるゝ所に於ては常に量よりも質が重要視せらるるが故に、資本主義精神及生産様式は一定の制限を受けざるを得ない。統制主義の發展と共に漸次量的生活となり單純化の傾向ありと雖も、日本民族の構成の複雑多種性と氣候的多種性とは、精神的要求と物質的需要の複雑多種性を必然的に要求するが故に容易に歐米の如き量的單純化

を爲す事も出来ないであらうし、又之をなさんとすれば多くの派生的問題を生ぜざるを得ない。この多種性こそは生活需要の代替性を大ならしめ、日本文化の優質性を維持しうるものと思ふ。計畫經濟の重大要素として國民生活の多種性を絶對的に必要とするが、この多種性の如きも、消費需要なき所に、強ひて多種性を作る事は困難にして、矢張り目に見えぬ氣候の多種性こそ國民の消費需要多種性を生ぜしめ、應て文化一般の特殊たる發展を齎すのである。

氣候の變化が人類の心理的並びに生理的狀態に影響を及ぼし、更にこれが勞働能率に著しき影響を與ふる事は、近時發達したる實驗心理學の研究によつて明かである。實驗心理學の研究は主として個々人につき比較的短時間に於ける實驗ではあるが、これを全體として考ふる時は、一定の氣候の下に於ける一定の經濟地域の勞働能率、生産力がこれに由て影響せらるる事は推論に難くない。人類は一定の地域に居住して氣候に馴化せる場合にも、なほ氣候の變化によつて勞働能率に影響を蒙るのである。最近アメリカの C. A. Mills 教授の景氣循環説の如きは太陽黒點の變化による氣候の變動が企業家の企業心を弛緩せしめ、その爲めに不景氣、恐慌が來るときへ主張してゐる。特に氣候の異なる地方に移住する時は、到底その本來の勞働能率を發揮する事は不可能である。固より人種によつて氣候馴化力に大小の差異はあるが、文化民族

に於ては夙にその馴化力が減退し、例へば白人の熱帶的氣候に對する抵抗力は頗る弱く、攝氏二十度以上零下二十度以下の氣温に於ては、彼等はその本來の居住地に於て有する勞働能率、精神力を充分に發揮する事は出来ない。併し乍ら熱帶寒帶に於ては氣候抵抗力の大小如何を問はず、如何なる民族と雖も、その勞働衝動が減殺され、勞働能率を破壊せらるゝが故に、高き文化を建設することは不可能である。溫帶地方の文化民族がかかる地域に移住し、文化を移植し得たりとするも、更に之を發展せしむる事は困難である。特殊なる人口牽引力によつて、氣候不良なる地域に人口が大いに集中したる場合を見るも、決して移住民文化を發展せしめた例はない。今日の文化民族がその發祥地たる高溫濕潤の氣候地帯に於て停滯し、溫帶地方に移動してゐなかつたならば、恐らく今日の如き文化階段に到達する事は不可能であつたと思はれる。熱帶地方は文化の擔當者たる人類の「苗代」にして、溫帶地方はその「本田」であるといふも過言ではない。原始的なる生長發展をなすが爲めには熱帶は有利なるも、これは苗代や溫室と同じであつて、長くこれに人間を止めおく時は却てその發達を阻害し、矢張り適順な氣候、即ち露地に相當する溫帶でなければ、人類の眞の發展は不可能である。

熱帶地方の住民はその高溫濕潤なる氣候の故に勞働の資質が破壊せらるゝのみならず、生活

需要が低級にしてその充足の容易なる爲め、勞働組織は種々の特異性を有する。即ち溫帶地方に於ては主として自由勞働が行はれ、たとひ強制勞働組織の成立を見るも直ちに自由化するに反し、熱帶に於ては笞杖の下に土人を勞働せしむる強制勞働が一般に行はれてゐる。熱帶地方が白人と交渉なく孤立して經濟を營みし時代に於ては未だ必しも經濟なる概念によつて律する事能はざるが如き野蠻状態にあつて、組織的勞働の必要を見なかつた。彼等の社會に於ては主として原始共産的なる狩獵、漁撈その他の採集經濟が行はるるにすぎず、農業の如き精神の緊張と計畫的組織とを必要とする經濟は存立してゐなかつた。然るに十五六世紀以來、白人は未開民族の無智無力に乗じて群盜的侵略をなし、熱帶地方は殆ど擧げて彼等の占領する所となつた。併し乍ら熱帶地方に於ては白人自ら勞働すること能はざるが故に、彼等は未開の自然民族の勞働によらんとしたけれども、組織的勞働を行はざりし自然民族は自發的に勞働せず、茲に於て白人は土着民族に強制勞働を課したのである。今日に於ては土着民族が多少進歩したると、人道よりして奴隸勞働が禁止せられたる爲め、強制勞働は緩和せられたれども、なほ實質的には一種の強制勞働が行はれてゐる。かの瓜哇に於ける *Desa, Kulturstelsel* の如きは一見自然發生的な原始共産的勞働形態の如くであるが、實は和蘭東印度會社が強制勞働の緩和、收穫増

大の一として發案せられたものの遺風であるといふ。最近文化民族の需要の質的量的増加、資本主義の變化とともに、熱帯地方の利用度が著しく増大し、巨額の資本と優秀なる労働を必要とするにいたつた。資本の投下は比較的容易なるも、優秀なる労働の獲得は困難にして結局温帯地方より移入するほかはない。併し乍ら温帯地方の優秀なる労働も一旦熱帯地方に來れば、その労働能率を減少し、生理的肉體的に労働に耐へることが困難である。故に熱帯地方に於ては、その地の産物を加工するが如き、機械的生産は殆んど不可能にして、動植物的原料生産地以上に發展するの餘地は少ない。かつてローマがアフリカ沿岸に於て奴隸による大規模の栽培植民(Plantage)を行ひ、アメリカ發見後、白人が黒人栽培植民を行ひたるが如きは、全く右の如き事情によるものである。又今日の資本主義國家が競うて熱帯地方に行ふところのものも、一種の栽培植民經濟(Plantagewirtschaft)の變形といふべきである。文明人が生理上根本的に變化せざる限り、熱帯地方に於ては肉體労働者となる事困難にして、只企業的指揮者としてのみ存立し得るにすぎぬ。従て熱帯地方の人民は常に一種の強制労働を課せられ、本國に於ける資本の收益率減少の補填の役割をなすべき運命におかれてゐる。資本主義が崩壊し、新しき經濟原則による廣域經濟圏が成立するも、熱帯地方に於ては特殊なる労働組織によるの外はあるま

い。この問題は將來大に注目すべき事項である。

第三 氣候と人口との關係

氣候と人口の増減、密度との關係を見るに、氣候の良否は直接に生理的機能を通じて人口の増減、密度の大小に對して影響を及ぼすのみならず、又間接には一定地方の生活資料獲得の難易を通じて影響するものである。氣候の良好なる地域に於ては一般に人口増加率それ自身が大にして、即ち人口の自然増加が多大である。これに反し、氣候不順の地域に於ては人口の自然増加の少きのみならず、絶えず氣候良好の地域に人口が流動移住せんとする傾向がある。歴史上に於ける民族の移動を見るに、當該民族の居住地域に於ける生産力が萎微し、更により高き文化の發達をなし得ざるに至りたるが故に、生産力の拘束より解放を求め、生活資料の一層大なる地方に移動せしものと考へる事が出来る。併し他の一面より見れば、直接に氣候の良否によつて移動を刺戟せられたものといへる。例へば歐洲の民族移動、支那諸民族の南下の如きは、寒冷且つ乾燥の地方より温暖濕潤の地を求めて、氣候良好なる安住の世界を獲得せんとする努力の表現である。又蒙古民族の征服的移動もその本國が次第に乾燥して農業を営み得ざるに至

つたからだともいはれてゐる。ユダヤ人の民族的離散もかゝる事情によるのであらう。固より最初に氣候の良好なる地に蟠據したる民族が、却て氣候不順の地に移住せし場合も少くないが、これは良好なる氣候の下に於て人口が増加し、その文化發展の飽和點に達したるが爲めであつて、他の事情にして同一であるとするならば、人類が氣候の良好なる地方に凡ゆる努力を拂つて蟠據し又は移動せんとする衝動を有する事は言を俟たぬ。一國の人口の増加力、交流度は殆ど全くその氣候の如何によつて支配せられるものであるが、只最近資本主義の發達は利潤の追求を第一義とするが故に、一見氣候を無視せるが如き移動が行はれてゐるやうに見ゆるも、他の氣候的社會的事情が同一であるとすれば、固より氣候によつて支配されるのは當然の事である。我國古來の人口移動につきて見るも、全く氣候と之に影響せらるる生活資料の獲得の難易によつて制約されてゐる事が明かである。然らば生活資料の生産力に對して氣候は如何なる關係を有するか。

文化の發展と共に生活資料の生産方法は次第に有機的性質より無機的性質のものに推移しつつあるとはいへ、生活の根本が變化し、生理現象が急變せざる限り、有機的生産即ち農業、牧畜、水産等を離れる事は出来ない。從來、資本主義國は國際自由貿易主義によつて主として工

業的生産に従事し、農業國の産物と交換せしが故に、かかる迂曲的間接的無機的生産に何等の支障を生じなかつたけれども、アウトアルキーやブロック主義の如き排他的閉鎖的經濟の行はるる今日に於ては、有機的生産たる農業時代に逆轉せざるを得なくなつた。而して有機的生産は氣候風土に影響せらるる所最も著しく、殆ど之によつて決定せらるるのである。牧場的、沙漠的、モンスーンの風土によつて文化を考へんとする見解も、一面から見れば、氣候的制約による人間の原始的な生活、有機的生産様式より見た文化史である。日本の農業は已にラートゲン氏などによつてその特殊性が論ぜられた如く、有史以來一圃式農法によつて反覆し乍ら周約的米作農業の行はれたのは、何といつてもモンスーンの氣候の結果に外ならぬ。恐らく日本の文化、歴史はこの特殊の氣候の下に於ける食料生産方法を考へずしては、之を理解する事は全く不可能であらう。

ラツチェル氏の研究によれば氣候の如何によつて一定面積の土地の生産しうる食糧の量、從てその土地の人口給養力に著しき差異の存する事が明かである。勿論人間は單に營養度とか食糧の數量のみによつて、一定地域に集中して生活しうるものではなく、食糧獲得以外の氣候風土の良否、人種による氣候耐久力の差によつて、食糧が比較的少くとも氣候風土の良好なる地

に生活せんとするの性向がある。前述せる熱帯地方に於ける栽培植民制の如きはこの矛盾を調整せんとするものである。ラッチェル氏の計算は已に古きに失するが同一面積の土地も氣候の如何によつてその給養力に大差の存する事が明かである。即ち温帯中の寒冷なる地方に於ては、一平方哩の給養しうる人口の最高密度は二千人、稍々温暖なる地方は三千五百人、更に温暖にして水の潤澤なる地方はその五倍に達するといふ。而してこれは各地域に於て生産しうる穀物によつて算定したものである。穀物以外のものによつて見るに、バナナはその榮養の多大なる事、熱帯がバナナを生育せしむる事の大なる結果、熱帯に於てバナナを栽培する時は小麥に比して同一の面積を以て凡そ二十五倍乃至三十倍を給養する事が出来るといふ。又降雨量と人口密度とが密接の關係を有する事はケッペン氏の研究に詳かであるから、茲に絮述しないが、之によれば温帯の氣候良好なる地域に於ても、人口密度高くして、一平方呎につき三十六人以上の人口密度を有するものは、所謂温暖適順の降雨氣候帯に限られ、又熱帶的降雨帯に於て例外的に人口密度の高きは、一に降雨の關係に基くのであつて、他に特殊なる人口牽引力なき限り、降雨量の多き温帯以外に人口の大なる集中は行はれ難いのである。

以上は概括的に氣候が人間活動に及ぼす影響を述べたのである。勿論人間はその知能

によつて氣候に適應するの手段を講じ、又自己の生理的適應力によつて、氣候の有利なるものは之を活用し、不利なるものは之を除去軽減する事が不可能ではない。併しその可能不可能は當該地域に居住する人々の文化力の程度によるものであり、それは總て人間の居住する地域の經濟的特殊性を決定するものである。殊に我國の如く經濟領域が南北に長大にして氣候の差異の著しき國に於ては、氣候は經濟地域の構造を決定する條件として最も大なる關係を有するものといはねばならぬ。故に我國經濟の地域的個性を研究するに方りては、氣候を綜合的に觀察して、その地域の文化、經濟との關係を明かにするのみならず、氣候の構成要素たる温度、湿度、光度、氣壓、風速、降雨量等に細分してその影響を考察するの必要がある。かかる些細なる事項が經濟地域の特殊の構成に對して微妙にして而かも重大なる關係を有する事が我國の特色ともいひうる。一國內の氣候的差異の少き歐洲諸國に比して遙かに氣候が我國の經濟地域の構造決定の條件として重要性を有するわけである。我國に於て特殊の産業即ち外國向の産業に於て夙に資本主義的經營が發達したるにかかはらず、日本固有のものに於てその發達遅かりしは氣候による所が少くない。要するに我國をして他の諸國と異なる經濟地域を形成せしめ、更に國內の各地域が著しき經濟的個性を有するは氣候によるところ頗る大である。

第三節 土地

第一 經濟地域の構造條件としての土地の意義

一般に土地といへば地表の陸地面の義にして、而かも地下資源、地質は固より、その上に於ける大氣現象をも含めて考へられるのを常とする。即ち人間の活動の舞臺であり、由て以て生活を保持する基盤としてその地表空間を意味する。併し本書に於ては地表上の大氣現象たる氣候は之を切り離して別個に論じたるが故に、茲では極めて狹義の地形學的、地質學的的土地につきて述べる事とした。固より同一の地形、地質の土地もその上に於ける氣候の如何によつてその機能、作用が變化する事は言を俟たない所であるが、便宜上純地形學的、地質學的に考察するのである。經濟地理學は地表を一定の標準によつて地域的劃定を行ひ、その地域が如何にして編制せらるるかを研究するものであるが、この劃定されたる各地域は、その有する所の地形學的、地質學的條件によつて夫々經濟的個性が決定されるのみならず、かくして形成されたる地域はその廣袤の如何、他の地域との關係如何によつて、二次的派生的に自己の特殊性を限定

する。故に地域の根本的條件たる土地は、夫々異なる地貌、地相、地形を有し、更にその内部的構造は地質の如何によつて決定される。かくして地形學的異同により一應地域の劃定が行はれるのであるが、その同一性、類似性の普及度によつて自ら地域の廣狹大小の差を生じ、更にその地域は他の地域との關係に於て相對的に經濟的意義が變化するのである。故に經濟地域の構造條件として土地を考察する場合には、地勢(地形、地相、地貌)、地質、廣袤、地位の四面よりする必要がある。併しこの四者の地域的構造條件としての機能は本質的に異なるものにして、地勢、地質が最も重要な構造條件である。地位と廣袤は二次的性質のものであり、寧ろ經濟地域の編制の變化、推移の問題と關連して考察すべきものであるから、之は次編に於て概説する事とした。

第二地 勢

地勢とは或は地相、地形、地貌ともいふべく、地表の高低起伏、山林原野の分布状態、河海湖沼の布置状態を綜合して觀念されたるものにして、人間でいへば、恰も人相骨柄に該るものである。地勢は人と人との社會的結合關係に影響する所が少くないけれども、特に生産技術の

方面に影響する所が大である。經濟形態が地方的に異なること、換言すれば産業の地方的分業の形成せらるる原因として地勢は最も重要なものの一である。我國は山岳極めて多く、平地は僅かに海岸又は河川の流域に之を見るのみにして、農耕を營み居住に便利なる平坦地並に斜面地は、我國全面積の僅に五分の一にすぎない。之を他の諸外國に比すれば平地の山岳地に對する割合は頗る少いのである。我國の農業が極めて小規模にして勞働的集約經營となれるは、人口が稠密にして水田耕作の行はるる結果ではあるが、同時にその根本原因は平地の少きことに在る。我國が古來農業を重要産業とし、その發達を計るに汲々たるに拘はらず、依然として舊態を脱し得ないのは地勢の關係によるものといはねばならぬ。又地勢の高低起伏が甚だしく、山岳重疊せるを以て、各地の間に生産上著しき差異特徴を有するも、その生産物を相互に交換し有無相通すること困難にして、交換經濟の發達が阻害せられた。これ我國に於て頗る長き間、封鎖的經濟、封建的社會が存續し、各人各地方が孤立して自給自足をなし得た所以の一つである。更に地勢は人類の居住形態に著しき影響を與ふるものである。密集式聚落、散居式聚落その他種々の聚落の形成せらるる根本原因の一としては地勢の如何を第一に擧げねばならぬ。又我國が他國に比し大都市が古くから發達し、一地方に人口の集中を見るに至つたのも、地勢の

關係による所が甚大である。而して聚落形態は經濟形態を反映するものなるが故に經濟地域の構造條件としては氣候と共に、地勢の關係は重要な意義を有する。

地勢の構成要素としての我國の河海湖沼を見るに、大河山大湖沼が少く、而かも河川は多くその延長短く流域狭小なる上に急流にして舟運の便少きを以て、舊來我國の河川は日本の經濟の發達にとりて大なる障害になつた場合が少くない。例へば水源が淺き爲め一朝大雨を見る時は直ちに洪水となり、堤防氾濫して人畜農作に大害を與へた。我國に於て古來治水は最も重大なる政治上の問題とせられたが、併し之は水を治めて積極的に經濟上に利用するといふのではなく、その害毒を消極的に防止し除去せんとするにあつた。美濃に於ける輪中制度の如きは河流と生活との關係を見る上に最も注目すべき問題を提供するものである。實に治水は我國の文化發達と密接の關係を有し、之をばなれて我が文化の本質は考へられぬ有様である。奈良朝時代に於ける開墾が常に水と結びつけられ、かの三世一身の法の如き、灌漑工事を中心としてゐるの觀がある。舊來の我國の政治家、學者の論策中に治水を論ぜざるものなく、政治家、學者は同時に治水土木の技術的専門家でもあるといふ有様であつた。我國に於て種々の經濟的施設が水と密接の關係を有し、殊に畿内地方に於て夙に文化の發達したるは、他の地に見ざるが如き

緩流の河川が多く、又我國最大の湖水たる琵琶湖の存在せしことが、交通發達の基礎となり、聽て經濟の著しき發展を促進したことは歴史に明かな所である。我國の内地水面は交通上の利便が支那、歐洲の如く大でないが、然し水源の涵養及び水路の開鑿等によつて、或る程度に交通路として利用せられたから、水路と無關係に發達せし聚落は極めて少く、特に中世以後各地に發生した都市はいづれも水利と結合してゐる。かくの如く日本の特殊なる水利は日本の經濟的發展をして特殊なる様相を呈せしめたのであるが、更に工業の發達するに及びては水利が重大なる意義を有するに至つた。即ち地表の高低起伏と水利の配置との關係上、水が巨大なる動力源となつて來た。我が國民は三千年來の慣習として米食癖を脱却する事困難なるが故に水田耕作を極度に周約的に經營すると同時に、その絶大の人口増殖力と相俟つて勞働周約の工業を經營してゐるが、この工業に於て水力が所謂白炭として利用せらるるに至りしがため、工業の集團性を大ならしめ、工業都市の發生を促しつゝある。今や我國が工業化せる農業國であり、且つ農業化せる工業國たるの觀を呈するに至りし一原因は、我國の地勢にありといふも過言ではあるまい。

我國の地勢が海を以て四方をめぐらされてゐることは、我國の經濟發達に對して種々の影響を及ぼした。我國は内地の水運に乏しきに反し、海岸地帯に於て夙に文化が水準化し、畿内地方の文化が比較的容易に各地に普及したるは海路による交通の結果に外ならぬ。例へば京都及びその附近の文化が北海岸に普及し、經濟的にも密接の關係を有したるは、琵琶湖より敦賀地方に至り、更に海路によつて各地に交通をなすことが出來たからである。又奥羽西岸の諸地方が、徳川時代に於て、空間的には江戸よりも遙かに遠隔の地に在りし九州西國並に大阪と經濟的に近接してをつたのも全く海運の賜といふべきである。京都と奥羽西岸地方と極めて風俗習慣の近似せるのも海上交通の行はれた結果であらう。若しそれ中古に於て支那及び朝鮮と交渉し、その文化を取り入れ、經濟的發展をなし得たる所以は、海がこれ等の諸國との間に介在したからである。固より廣大なる海が介在することは一面に於て交通を阻害する場合もあるが、交通機關の發達せざりし時代には、海が遠隔地交通に對して重要な役割を演じた事は東西との揆を一にしてゐる。

一國內に於ては山岳丘陵少く平地の廣大なるを以て經濟上有利とする見解は舊來一般に行はれたる所である。従て我國の如く山岳地帯が國土の大半を占むるものに於ては、支那、歐洲に比して頗る不利なりとせられた。併しこの有利不利は、只農業とか、工業、商業、交通といふ

個々の經濟活動を切り離して見た場合には一應肯定する事が出来るけれども、一國の經濟を綜合的に考察するならば、その得失は輕々に論斷し難いのである。例へば我國は山岳地帯が過大にして平地、斜面地が極めて少く、從て農業經營上には種々の不便があり、西洋流の農法を用ふる事は至難である。併し乍ら若し我國の如く國土全體が狭小にして而かも細長く海岸への距離の短き國に於て、山岳がなかつたとしたならば、到底今日の如き農業を営む事も出来ず、從て七千五百萬の人口を給養する事は不可能にして、英國、丁抹の如き状態とならざるを得ぬであらう。即ち土地に充分の水を供給する事能はず、從て水田耕作は成立し得ない。我國は水田耕作なるが故に巨大の人口を給養しうるのであるから、山岳少く水田耕作不可能となれば畑作を行ふの外なく、その結果は、人口給養力が著しく減少し、恐らく今日の日本とは全く異なる國民經濟が生れてゐたであらう。高き山岳が重疊する事は地形をして圓錐形たらしめ、而かも多褶性圓錐形たらしむるが故に、平面に比し數十倍の面積となつてゐるわけである。若し山岳が少ければ、たとひモンスン季に於て多量の降雨あるも、河流が短小なるが故に直ちに海中に流出し、長期に亘りて水量を保持する事は出来ないが、山岳が重疊せる場合には多量の降雨を之に蓄積し、徐々に下流に放出する事が出来、水田耕作が有利となるのである。更に北國に於

ては冬期に多量の積雪ありて之が初夏の頃迄保存されるため、恰も一大堰堤が山谷に築造されたと同様の作用をなし、之が農業灌漑并に水力發電に極めて有利なる事は他の諸國に比類を見ない所である。故に地勢として山岳の多き事の不利不便のみを考へ、平地の多き事のみを羨望するが如きは再検討さるべきである。高低多種多様の山岳の存するが故に、常に水利のみならず、降雨量の調節、木材の豊富なる供給、氣候の溫和、保健上の好影響等、無数の長所が存在するのである。山岳の高低多少が人心に及ぼす影響も大であり、今日の如き時代に於ては國防上にも多くの利點を有するものである。從て山岳の如何が地域構造に於て重大なる意義を有する事を研究するの必要がある。

第三地 質

地質は一定の土地又は地域の生産力の基礎をなすものである。地質はその内在する特質を意味し、即ち土地の肥瘠、地中に包藏せらるる鑛物、土壤の性質より構成せらるるものである。たとひ地勢が同一であるとしても、この地質の異なる時は、之に於て存する經濟状態、生産物等が異なる。例へば同じく農業を営む場合に於ても、地質が異なれば同一の作物を有利に耕作

し得ないから、夫々地質に適應せる耕作をしなければならぬ。又工業は農産物を原料とし、或は地中に埋藏せらるる鑛物を利用するのであつて、今日では交通機關の發達したる結果、遠隔地よりその原料を獲得することが可能となりしを以て、必しも原料の存在地に於て工業を営むの必要はなくなつたけれども、他の事情にして同一であるとするならば、各地はその原料の産出如何によつて、その形態、規模、生産物が支配せられざるを得ぬ。即ち工業の如き生産形態と雖も地質と密接の關係がある。工業の盛大にして多くの工場を集中せる地方を見るに、決して原料の産出又は供給状態と無關係に發達したものは無い。かの英國が近世に於て世界第一の工業國となりたるは、主としてその恵まれたる地質によるものといはねばならぬ。況や交通の發達せざりし時代の領域經濟に於ては、經濟は殆どその地質に基く原料生産によつて決定せられたのである。米國、ロシア、濠洲、印度等が農業を主とするのも、亦その地質關係に基くものである。我國が平原地の極めて少きに拘はらず、輪作を行ふことなくして三千年の間、所謂一圃式農法によつて米作を行ふことの出來たのは、モンスーンの氣候と共に我國の地質がこれに適當してゐたからである。之に反し工業特に金屬鑛物を原料とする工業が發達し得ずして、工業といへば主として農産物を利用するもの多きは、金屬鑛物特に近世工業の根本條件たる

鐵と石炭の産出少きによるものといふべきである。故に近時西洋流の工業組織の輸入せられたるに拘はらず、最近まで重工業、化學工業の發達が比較的不振の状態に停頓し、纖維工業が夙に世界各國を凌駕するに至つたのは、經濟力發達の程度にもよるが、我國の舊來の工業の基礎が農産物たる纖維植物に存し、長年月に互つて得たる傳來の技術、技巧を利用し、兼て勞働力の豊富なることに基くものであらう。我國の地質は運命的に金屬鑛物に乏しく、又石炭、石油の如き動力源少きが故に、世界交通が極度に合理化せられて資源の國際的開放が行はれ、或は科學的發明の行はれざる限り、我國は重工業、化學工業を發達せしむる上に多大の困難と不利とを伴ふものといはねばならぬ。我國が三千年の間種々の經濟的發展の萌芽を有したるに拘はらず、金屬による工業の發達をなし得ずして、常に農業本位の經濟を營みしは、種々の政治的自然的理由もあらうが、多くはこの天與の地質、地下埋藏物の關係に基くものである。東亞ブロックの形成もかかる工業資源の獲得の必要から當然生れて來たのである。故に東亞廣域經濟圏の確立に際しても、單純なる發達階段論に捉はれ、輕工業の次には重工業、精密機械工業、化學工業に進むべきものとして、急激に工業配置を變革するが如き公式主義は最も注意すべき問題である。況や日本人の生活に最も必要なる米の耕作が、果して大陸に於て充分且つ安全に

行はれ得るや否や、根本的なる研究を完成する事なくして、輕々に日滿支間に於て産業立地の編成替をなさんとするが如きは吾人の與せざる所である。

第四節 水利

第一 經濟地域の構造條件としての水利の意義

水利は元來氣候、地勢、地質と密接の關係を有するものであるが、茲では單に河海湖沼の配置、及びそこに存する水の利用度の立場より水利が經濟地域の構造條件として如何なる重要性を有するかを考察する事とした。水利は人間の生活に對して絶對的重要性を有するものにして、水利なき所に人間もなく社會もなく、從て文化の發展もない。炎熱砂塵の沙漠に於ても一度水が湧出して人間の利用しうる所となれば直に村落が生れ出るのである。如何に繁盛の都市と雖も水利が涸渴すれば衰退し、如何に文化の高き國家も水利が缺乏すれば即ち荒野と化した例は歴史の示す所である。併し乍ら水利の影響は人間の生活狀態、民族性の如何によつて決して同一ではないのである。我國の如く水田耕作を主とする國と陸田耕作を主とする外國とに於ては、

水利の意義は著しく異らざるを得ぬ。又同一の國內に於ても産業によつて水利に對する關係感度が異なる。例へば同じ纖維工業といへども綿絲紡績業とレイヨン工業では水利に對する感度が全く異つてゐる。かくの如く水利は人間活動に直接影響するのみならず、更に人間の生活様式又は經濟形態によつて水利に對する感度を異にするが故に、經濟地域の個性を形成する條件として著しき影響力を有するものといはねばならぬ。

右の如く水利が構造條件として有する作用は人間の生活様式、經濟形態によつて相對的に異なるが故に、時代によつても亦その影響力は異らざるを得ぬ。元來人間の居住は陸上に行はるるを原則とし、而かも古き時代には種々の事情よりして成るべく高所に居住するの傾向があつた。水上に生活するものは概ね一時的又は部分的にして、已むを得ざる場合に限られてゐる。從て人知の發達せざりし時代には、大なる湖海の存在は人間活動の障害物とせらるるの觀があつた。而かも地球上海洋が最も大なる部分を占めてゐるのであるから、人間の活動範圍は之によつて極限せられてゐたわけである。大なる河川湖海が文化交流の障害となりしことは舊時の行政區劃、民族の配置等に於ても之を見る。併し乍らこの限られたる陸地に於て生活を營む場合には水利は絶對的に必要であつて、奥地に生活するものは所謂水草を追うて牧畜を營み、河川湖沼

に接して農村を形成した。利用しうる程度の水流通、湖海があれば都市の成立、商業の發達を見た。マックス・ウェーバーの所謂治水灌溉耕作(文化)、奥地森林耕作(文化)、沿岸耕作(文化)の區別の如きは、全く水の利用如何によつて耕作形態、文化形態を類別したものである。古來文化の發展は、洋の東西を問はず、水利と離れて行はれなかつた。水利の涸渴の爲めに折角發展した古い文化も衰頹した場合があり、また古い歴史を有する都市が他地方に移轉した場合がある。奈良の平城京から山城に奠都したのは飛鳥川の涸渴によるものとの説さへある。近東に於ける古代都市の滅亡も水と密接の關係がある。

從來水利の問題が地理學や經濟學に於て論議されたのは、主として農業、交通及び飲料との關係より來て居るのであるが、文化の發達、及び陸上、空中の交通の發展、更に機械的生産の擴大によつて、これ等の科學に於て取り扱ふ水利の意義に著しき變化を生じて來た。特に東亞の諸民族の發展は、結局、食糧の充足にあり、而かも米作と不可分の關係あるが故に水利は新に經濟地理の問題とならう。

第二 海洋の新意義

海洋が經濟活動上に重要性を有したのは、世界經濟が發達して自由貿易が行はれ、且つ大船交通の發達に伴ひ運送費が陸上交通に比して遙かに低廉であり、境を接せざる遠隔の地を連結するの力を有したからである。即ち地表の四分の三を占むる海洋が經濟上の障害物より變じて有利なる交通路となり、その結果、世界の經濟的結合を密接ならしめ、貿易を増進すること甚だ大であつた。世界貿易の四分の三乃至五分の四が海洋を通じて行はれたる一事を以て見るも、一國の海洋との關係が如何に經濟の發達に重大な關係あるかを知ることが出来る。併し乍ら海洋による交通運輸には一定の限度がある。航海技術の上よりも飽和點の存することは争はれない。殊に世界大戰後、民族主義の興隆と世界經濟の極度の萎縮とは、各國民を驅つて排他主義に走らしめ、世界貿易のより大なる發展を望む事が困難となつた。民族的計畫經濟、ブロック經濟の發生は世界の交通貿易を阻害し、國民的自給自足經濟の道を辿らしめつゝある。經濟の發達の結果、工業生産に従事するものが増加し、農業特に牧畜を經營するものが減少し、更に農業牧畜の収益が激減したため、益々これ等の産物が減少するの傾向がある。畜産物の減少は最も著しく、現時歐洲に於ては動物的食物の缺乏に苦しむといふ有様である。茲に於て海洋に於ける魚貝の獲得は、最も古き經濟であると共に又最も新らしき經濟となりつゝある。無限の

食料たる魚貝を産する海洋の布置の状態は今後に於ける一國經濟に重大なる意義を有するものといはねばならぬ。我國の民族發展史を考ふる上にはその水産業の特殊性に注意せねばならぬ。之は單に精神上の問題のみでなく、經濟上に頗る重要な問題である。即ち海洋は食糧問題解決の手段として、又貿易發展の過程としての水産業經濟の新天地となつた。實に我國の水産業は世界に比肩するものなき有様であつて、各國が自給自足排他閉鎖の經濟を行ふに至れば、之は我國の最も強味とする所である。今後の水産業の發展如何は懸て經濟地域の構造變化に大なる影響あるものといはねばならぬ。

第三 動力源としての水利

河川湖沼は耕作、交通、水産の方面よりも更に動力源として新らしき意味を有するに至つた。動力源としての水利は全く地勢によつて決定せられるのであつて、如何に水平的に水量が多量であつても、垂直的に落差又は水壓が少くしては動力源となり得ない。この點に於ては我國は比較的有利なる状態にあつて、從來唯一の動力源たりし石炭の缺乏は、この水力の比較的多量なるによつて補足することが出来る。動力源としての水力の出現は、經濟の地理的分布殊に工業

の集中分散に對して著しき影響を與へつゝある。石炭と原料と勞働費との關係に於て工業の立地論が行はれてゐるが、最近の水力の普及、價格の低廉化は三者の立地牽引力に變化を生ぜしめ、經營規模の大小にも變化を生じつゝある事は注目すべき問題である。

第五節 災 害

第一 經濟地域の構造條件としての災害

前項に述べたる自然的諸關係は、概ねその存在することによつて經濟の成立發展を助長促進するの可能性を有するものとして考察されたのである。即ち經濟的發展に對する積極的能働的條件と見らるべきものである。然るに茲に述べんとする災害は、その存在、發生する事によつて却つて經濟の進歩が阻害せらるるのみならず、已に成立し發展しつゝあるものをも破壊し去るが如き破壊的否定的條件である。災害には人爲と無關係なる天變地異もあり、又人間の不注意に基くものもある。地震、暴風、洪水、高潮の如きは前者であり、火災の如きは後者に屬する。かかる災害の頻發度は地方によつて著しく異なる。之は常に國家間に於て異なるのみな

らず、國內の各地域各時代によつてもそれぞれ異つてゐる。例へば我國の如きは、その自然的環境よりして災害の多大なる點に於て世界屈指である。吾人が日本災異志を繕いて見る時は、三千年の間よくも之だけの災害に襲はれたものであると驚くの外はない。而して又之が對策として歴代の政治家、人民が如何に種々の制度を設けたか、思ひ半ばに過ぐるものがある。實に我國の歴史は災害史であり、災害復興史であるといふも敢へて過言ではあるまい。ある外人が日本の今日の明媚なる風光は日本人數千年の苦悶の表徴史であるといつたが、蓋し至言である。之に引き比べ歐洲大陸の如きは戰禍によつて國土の荒廢に歸した事は屢々あるが、かかる天災によつて經濟力の破壊された例は比較的に少ない。從て西洋の學者は一般社會科學に於ては勿論、地理學に於ても、又地域劃定論に於ても、災害を論じたものは殆どない有様である。災害の最も多く頻發せる我國は各地域に於て著しき特殊性を形成してゐる。之は我國独自のものといふべきであると共に、我が國民經濟の特殊性を研究し、更に各經濟地域の個性の究明には、最も注目すべき問題である。從て數千年來災害に對して日本人程敏感であり、且つ諸種の對策施設の發達したものは稀れである。

第二 災害の經濟心意に及ぼす影響

災害の襲來は一瞬にして數百年來の文化を破壊し、生産力を減殺するのみならず、直接に人畜を傷害せしめ、遂には飢饉、鬭争を齎すを常とし、人間多年の努力も水泡に歸する場合が少なくない。故に災害は直接に經濟の發達を阻害すると共に人間の努力心を消失せしめ、將來への希望と計畫とを無意味ならしむるものである。人生の有爲轉變、諸行無常を感ぜしめ、今日あつて明日なきの人生觀を懷くに至る場合が少なくない。然るに經濟なるものは合理主義に立脚して、永遠的繼續性の豫想の下に行はるゝ計畫的活動である。富を蓄積し資本を運營する所以のものは、將來への希望と収益の永續性を考ふるからである。人間が物心の努力を傾倒するものも百年の後にその成果が存続するからである。故に天災地變の頻發によつて凡べての計畫的活動が破壊され、中絶せらるゝに於ては、何人も將來への努力と計畫とを企圖しなくなるであらう。人間は必しも物質的結果のみを期待して活動するものではないが、併し計畫と餘剩價值蓄積のなき所に經濟の發達しうる筈はない。故に自然的事情によつて影響せらるること大なる時代に於ては、天災の頻發する地方には計畫經濟は到底發達することは出来ない。我が國民が今日表

面的には全く資本主義的ではあるが、眞實の資本主義者となり得ず、財貨に對する觀念が歐米の諸國民と著しく異なる所以は、かかる長年月の災害による苦悶の結果によるものが少くないと思ふ。例へば「江戸子が宵越の金を使はず」といふが如き經濟心は、當時江戸に於ける災害の頻發と社會不安の生み出したものであつて、かくの如き社會に於ては浪費的消費は増長するが、計畫的經濟、生産活動の發達すべき筈はないのである。而してかかる天災地變は地方によつて異なるが故に、之がために經濟地域の構造は著しく差異を生ずる。

更に災害に對する防止、復舊の努力は應て災害頻發地の特異性を生ずる。我國の如く殆ど週期的に災害の發生する國に於ては種々の共濟方法が考案され、かの古來より存する三倉制度、郷倉の如きは、支那より最初移入せられたるものではあるが、かかる制度が我國に特に發達完成したるは、全く災害の頻發に基くものといへよう。從て資本的蓄積の代りに直ちに利用消費しうる物資の蓄藏が重要視される傾向がある。交換價值よりも使用價值が經濟生活を支配する。住居その他の建築につきても特殊の發達を遂げることとなる。今日では災害に耐へ得る建築法が發達したが、昔時に於ては、如何なる方法によるものにも耐へる事が出来ぬから、災害の際に成るべく損害と危険とを少くする方法が講ぜられ、その結果、小規模の木造建築が發達した

のである。尤も之は建築材料及び氣温濕度の關係にもよるが、我國の木造建築の發達は地震といへる最も恐しき天災の頻發と關係があると思ふ。

災害の發生は凡べてのもの破壊ではあるが、同時に新なるものの誕生、事物の變革を意味し、靜的なるものを動的なるものとするの效果がある。社會的生成物はそれが一旦出來上つた上は、容易に之を變革する事は出來ぬ。人間の意思によつて之を斷行せんとすれば、社會的摩擦を起し多くの犠牲を拂はねばならぬ。變革運動を中心として必ずや社會闘争が發生する。併し突如として發生する災害は人々の意思の如何に拘はらず、その猛威を奮ふて事物を破壊し去るのであるから、一種の自然的革命である。人爲の破壊は各人抗爭の原因となるが、自然的破壊は憤懣を持ち行く所がなく、已むを得ざる事として諦めてしまふ。日本人に諦めの觀念の強いのは之が爲めであるときへいはれる。我國の歴史を見るに、勿論二三の變革期ともいふべき時代はあつたが、西洋、支那の如き流血の慘事を見る事少かりしは、自然的變革が常に濟し崩し行的に行はれ、社會組織の弊害が極度に増大して如何とも出來なくなり、遂に暴力による革命を行ふ外なき事に立ち至つた事がないからであるまいか。自然の破壊力によつて富の集中その他權勢の兼併なるものが長きに亘つて存續し得ない場合には、社會的反目抗爭を必要としない

のである。大天災一度襲來すれば貴賤貧富、老幼何れも一切無差別であつて、千金を抱いて死するものあれば、裸一貫にて命拾ひをするものもある。明日の富者も今日は住むに家なき者となる。尻の持ち行き場のない破壊である。併し天災の難をのがれ得たるものは再び更生への途を辿る。如何に生活に對して無關心なるものも、凡べてが破壊されて生活が困難となれば活動せざるを得なくなり、今迄休止せるものまでも動き出すこととなる。即ち社會的に眠れる人も物も覺醒され、潜在力が現實力として活動するに至る。社會に對する活を入れる事になる。之は我國の炎害後の事蹟を緋けば明かなる史實である。又一定の所に於て復興が困難となれば、人々は集團して他へ移動せざるを得ぬ。徳川時代に於ても、災害頻發地方の人々が著しく移動性を有し、例へば東北地方の如きは年々集團的國外遁走者が續出し、當局者の之が對策に腐心したる事實は、この間の事情を物語るものである。

災害は聚落の形態を變化せしめ、又その地位の移動を促進する力が大である。殊に我國に於ては最も著しい。之は前述の如く我國の從來の建築法に基くのであるが、災害の頻發によつて一舉に聚落が破壊され、地形が變化するが故に、聚落の定着性が著しく減殺される。故に古き時代と今日と同一名の村落又は都市にても、その所在の著しく偏倚してゐる場合が多く、甚し

きは全く別個の場所となれるものもある。かくの如きは西洋には極めて稀なことであつて、之は全く災害と聚落形態との關係に基くものといはねばならぬ。以上は専ら我國の事實につきて一般的に述べたのであるが、更に我國の各地域各時代に就いて見るに、災害の發生度は決して同一ではない。而してその發生度によつて、各地域各時代の經濟力、文化度、人情氣質、人生觀は異なるのである。故に災害の頻發度は他の自然的諸關係と共に各地域、時代の經濟的特殊性を明かにする上に最も重要な意義を有するものであり、且つ我が國民の經濟心意と外國人のそれとを比較研究する上には必ず一考を拂ふべき問題である。要するに天災地變は各國、各地方それぞれ程度の差こそあれ時々襲來すべきものであるが、我國の如き災害國は殆ど世界無比ともいふべきである。この巨大なる破壊力を有する災害が我國の國運、文化の發展、經濟の伸張に如何なる影響を及ぼしたるかに就いては多くの學者の論議せし所であるが、何れも損得功罪相半ばするものとせられてゐる。災害の多き事必ずしも不幸に非ず、その少き事必ずしも幸福に非ず、之は常に道學の意味からいふのでなく、社會組織の生成發展の上よりもかく論じうるのである。かくの如く災害が我國の經濟的發展に對し著しき特殊性を與へ、又人心に與へた影響は頗る大なるものがあるが、更に之を國內につきて見るも、災害の頻發度、種類等が各地域

によつて異なるが故に、各經濟地域の構造の特殊性の研究にはこの問題に注意するの必要がある。舊來の地理學は主として歐米の研究方法を踏襲したる結果、我國の經濟地域の構造條件として災害を論じたるもの少きは甚だ遺憾とする所である。最近我國に於ける災害の頻發、之に伴ふ經濟的損失の大なるに鑑み、災害科學の如きものが提唱されるに至つたが、かかる特殊科學の成立は正に我國に於ける天災が國民生活に如何に重大なる關係を有するかを物語るものであり、恐らく世界に類例のなきものであらう。まして經濟地理學に於ては經濟地域の特殊性を論ずる場合には、災害を重要な構造條件として考察すべきである。

第五編 經濟地域編制論

第一章 經濟地域編制の意義

地表空間の各部分は何れも異質性を有し、而かもその異質性を有するが故に各部分は構造的聯關に於て一の地的統一體を形成しうるのである。即ち地表の各部分は夫々の異質性に於て地域的個性と機能とを發揮し、他の地域と區別されつゝ、同時に各地域と聯關し結合して一體をなして居る。而かも各地域の個性の聯關は他の地域の個性と因果の關係に在るのではなく、構造的聯關であり、同時的並存であり、非接續の接續である。固より一地域の變質が延いて他の地域の變化を惹起するが如き事あるも、かかる現象は經濟地理學本來の研究對象ではない。何となれば、時間を超越したる地域はないといはるるもの、時間的變化の過程の研究は、地域的個性を理解するの手段として行はるるに止り、概念的には經濟地理學の限界に達し得ざる範疇である。故に經濟地理學はその研究領域として、先づ地域的個性の研究より出發し、その各地域が他の地域と如何なる構造聯關を有しつゝ、地的統一體をなすかを研究する事を堅持せねば

ならぬ。この故に第三編に於て經濟地域を如何にして劃定するかを明かにし、第四編に於て經濟地域が如何なる構造要素によつてその個性が形成され、更にそれを可能ならしむるの條件として文化的諸條件及び自然的諸條件を考察したのである。

我々は地表全部を一の地的統一體と見ることによつて、地理學的認識の確立は可能となるが、之には種々の前提條件が存するのである。第一には、人間の地的認識の發達と、現代の文化段階に於ては、限られたる小地域は如何に統一的であり發達してゐようとも、その文化的欲求を充足する事が出來ず、凡ゆる方法を講じて世界的聯關を確立せざるを得ぬ必然的要求の存する事である。第二には交通機關の發達に伴ふ地理的距離の短縮、人間、財貨、資本の移動性の増大したる事である。而してこの兩者は互に因となり果となりつゝ地的統一體は外延的にも内充的にも發展した。即ち之等の條件は更に國際主義、自由貿易主義を促進し、從來全く地的聯關を有せざりし國々が漸次に緊密なる關係に入り、世界の各部分が渾然として地的統一體となつたのである。只觀念的のみ理解しうるが如き遠隔地が意外にも吾人の生活する日本といへる經濟地域と連繫してゐる。かくの如く精粗の差異こそあれ、經濟を通して各地域は連繫せざるものはない。而してこの連繫は各地域が互に地域的個性を有するが故である。若し各地域が獨

自の個性を有しなければ連繫する事は意味がなくなるであらう。換言すれば各地域は獨自の個性と構造を有し、それは懸て他と異なる機能を發揮しうるからである。地表各部分に於て全く同一の構造を有し、同一の機能を有する地域が並存したりとせんか、かかる場合には兩者は單に並存するといふに止り、それが互に働き合つて地的統一をなし得ない。それが一體として理解されたとするも單に外延的に擴大したるに止り、何等働き合ひ補填し合ふ所なく、内包的質的に發展止揚される事は不可能であり、從てその獨自の機能が發揮されるどころか、却て縮小するの虞がある。固より現實には同質の地域は地表に存在せず、而かも右の如き條件が整備するに伴ひ益々地的統一が行はれるのである。この異なる各地域が、その獨自の個性、機能によつて地的統一をなす組織を地域編制と名ける。從て地域的編制に於ては、各地域の個性の特異性が顯著なるほど、各地域はその機能を發揮しうるのである。故に經濟地域編制論は、之を實體より見れば經濟地域機能論ともいふべく、又經濟地域給付論ともいふ事が出来る。蓋し各地域がその固有の特異性、之より生ずる機能を通して編制され地的統一をなしうるのは、各地域が獨自の給付能力によつて相互に働き合ふ事が出来るからである。何等獨自の給付能力なきものは、如何なる方法を以てするも有機的統一體として編制される事は出来ない。而して一の統

一體としての社會は、人的、物的、時間的、空間的に分化し、同時に合化して互に給付し合ふが故に存立しうるのであるが、地表を一の經濟的有機體として見るならば、各地域は、恰も人體の各肢體がその絶對的機能によつて給付結合をなせるが如く、地域的肢體化によつて給付結合を形成して居る。この地域的給付結合が地域編制に外ならぬ。本書に於て敢へて編制 (die Gliederung) なる語を用ひ、編成なる古き語を排したのは、單に恣意によつて、各地域に特定の經濟活動を営ましめ、以て國民經濟を形式的に編成せる關係をいふのではなく、一の有機體の各部分の結合關係の如く、國民經濟に於ける各地域の肢體化と同時にその統一化の關係を示さんがためである。

かくの如く地域編制の由て形成される理由は、各地域が独自の機能、之に伴ふ給付能力の存する事であるが、この機能、給付能力はその地域の有する個性の如何によつて決定され、更に地域の個性は構造要素と構造條件の組み合わせ關係によつて決定されるものである事は、屢々述べたる所である。併し乍ら地域の編制は、必ずしもその固有の機能、給付能力に即應して形成されて居るとは限らず、又初より今日あるがまゝの姿を有したのではなく、將來も此のまゝの状態を存續しうるものではない。蓋し地域の編制は、各地域が如何に独自の個性と機能を有

すればとて、そのまゝ漫然と自然に構造的聯關をなすものではなく、種々の地的統一の條件が加り、更に地的統一の程度は常に變化し、時と所によつて一定の指導原理、經濟組織を以て一定の目的を到達せんとするからである。地表の各地域は古き昔より夫々の個性を有し、從て異なる機能と給付能力とを有した。併し今日の如く各地域が一體となりて聯關しては居なかつた。精々、歐洲、地中海沿岸、或は印度、支那といへるが如き部分に於て地的統一が行はれ、且つ地域編制があつたにすぎぬ。地理學に於ける世界は地的統一をなせる地域の綜合體であり、地域編制に参加せる地域の全體をいふのであるが、この意味に於て、昔は地球全體が世界ではなく、歐洲、支那、印度等は夫々の世界であつた。而かもその世界の内部に於ける各地域の個性の構造が異り、又之を統一するの前提條件、目的、指導原理等を異にするが故に、各々の世界の地域編制の状態は著しく異つてゐた。斯の如く地域編制は常に變化して止まないものであるが、已に屢々述べたるが如く、變化の過程を経る事なくして地域の個性、機能、給付能力、更にその編制の意義を理解する事は出来ないけれども、かかる研究はどこまでも歴史學に屬すべきものである。地理學は現在に於ける地域編制を研究するものである。併し現在に過去を含み且つ未來を含むが故に、地域編制論は過去の成果を通して現實の組織を考へ、それは更に未

來の組織を考察すべき契機を胚胎してゐる事は言ふ迄もないが、概念的には發展變化の過程と、分布配置の聯關即ち地域編制とは明かに區別されるべきものである。

現代の世界は殆ど地球全體と見る事が出来る。如何なる寒冷氷結地域も、又如何なる酷熱の原始林地域も、何等かの關係に於て地域編制に参加して一の統一的世界を成してゐる。而して世界的地域編制に地表の各部分に参加する形式は、概ね國家的領域又は國民經濟領域としてであつて、未開地にして未だ一國をなさざるものは何れかの國家に隸屬する植民地として世界的地域編制に参加するの外はない。世界的地域編制に於ける一地域たる國家又は國民經濟領域は更にその内部に種々の經濟地域を包藏し、之が一定の編制の下に獨自の地域的個性に基く機能を發揮する。更に地域編制の精粗、合理化の程度、方向等は、地域の有機的統一の程度、經濟及び政治の指導原理、目標によつて決定せられる。同じく資本主義による諸國家、獨裁政治による諸國家を見るも、その地域編制は決して同一ではない。又各國が世界的地域編制を組織する原理と、各國内に於ける地域編制の原理も亦自ら異なるものである。

經濟地域の編制に關する研究は、地表全體を一の地域統一體として取り扱ふ場合には各國民經濟はその構成要素たる經濟地域と見る事も出来るし、或はブロックに大別してその地域編制

に於ける國民經濟の地位を考察する事も出来るし、更には一國民經濟のみにつきてその地域編制を研究する事も出来る。併し何れにするもその根幹をなすものは國民經濟であるから、先づ國民經濟内部に於ける地域編制の研究を第一義とすべきものである。故に本書に於ては國民經濟に於ける各經濟地域が如何にして編制せらるるかを中心問題とする。又國民經濟の地域編制を研究主題とするのであるから、各地域の個性を綜合的に觀察し、その全體に於ける意義を究明するに力めねばならぬけれども、之は最後の到達點であつて、それ迄には個々の經濟現象のみにつきて孤立的に地域編制の理論を定立し、更に之を現實化して、國民經濟に於ける經濟地域を劃定し、その編制の意義を明かにするの必要がある。

尙ほ本書に於ては國民經濟全體に互る地域的編制を主たる課題とするが故に、國民經濟の各地域がそれぞれの個性、構造によつて劃定されて居る事を前提とし、この劃定されたる各地域が如何に編制されてゐるかを究明しようとするのである。併し後に述ぶるが如く、國民經濟の各地域は最初より有機的地域統一體ではなく、社會の發展と共に有機的に統一され、各地が全體の部分として地的聯關をなすに至つたのであるから、各地域は孤立的に夫々その内部に於て特殊の地域的編制を形成してゐたのである。又有機的統一體をなせる現今の國民經濟の各地域

につきて見るに、各地域も亦その自然的、社會的、歴史的事情に應じて獨自の地域的編制が行はれてゐるわけである。例へば最近に於ける國土計畫に於ては、我國を九大地域に區劃してゐるが、この九大地域は相當に廣き範圍に互るが故に、その内部に於て地域的編制が問題になり、更に之を細分して小地域に區劃し、各細分地域の内部も亦一定の地域的編制をなし、以て全體の編制に参加してゐるのである。故に理論的にいへば、最初より國民經濟全體に互る地域編制を論ずる事は不可能にして、先づ個々の地域につきてその内部の編制を研究し、之を綜合して初めて國民經濟全體の地域編制が明かにされるものといはねばならぬ。併し國民經濟全體の地域編制の如何は、その各地域内の地域編制の状態と相關的であり、部分と全體との關係にあるが故に、本書に於ては、便宜上全體の編制より考察する事とした。

現今の各國民經濟は凡て何等かの關係に於て國際經濟の一環をなし、之から離脱する事は困難である。故に國民經濟内の地域編制は、國際的經濟地域の編制を前提とする。從て國際的關係の變化は直ちに一國民經濟の地域的分業、地域編制に於ける地位の變化を齎し、それは懸て國內に於ける地域編制を變革せずにはおかないのである。而して一國民經濟の地域編制は、各經濟活動部門に互りて一般的綜合的に考察さるべきものであるが、併し乍ら研究方法の現階

段に於ては、かくの如き考察は殆ど不可能である。ブレードル (A. Predoin) の如く、一般經濟理論として、經濟活動の地域的配置の理論、從て立地理論を形成し、之によつて經濟地域の編制理論を樹立せんとするものもあるが、結局、現實の地域編制を研究しようとするれば、先づ個々の特殊部門につきて、その地域編制を検討し、之を綜合集成する事によつて初めて一國民經濟の地域編制が明かにされ得るのである。更にこの各部門につきての地域編制は、先づ演繹的に各部門の地域性、展擴性を考究しなければならぬから、地域編制の究明には立地學的方法が最も必要である。故に從來の各種經濟部門の地域編制の研究は恰も立地學そのものの如き觀を呈してゐるが、立地學は個々の經濟活動が最も有利有效に營まるる地點、從てその配置の關係の研究を主たる任務とするものであつて、國民經濟の全體に互り綜合化するものではない。之に反し地域編制論は常に國民經濟の全體の見地より統一的綜合的に行はるるものなるが故に、立地論と同一ではない。併し立地理論を前提とし、その上に立つて地域編制論は成立しうるものである。

最後に一言すべきは、廣く經濟部門といへば、生産より消費に至るすべての過程が包含されてゐるが、消費は生産の出發點であり且つ終極點であつて、その地域編制は人口の分布状態を

前提としてゐる。又商業その他の配給に關する經濟活動は、財貨の人的、地理的、時間的價値の創造と看做し一の生産活動とされたが、之は狹義の生産と消費とを前提とするものにして、その地域編制は第二義的である。故に結局に於て經濟活動の地域編制は狹義の生産活動に限定されざるを得ぬ。而してこの意味の生産活動は、經濟地理學の類別の際にも述べたるが如く、水産業、鑛業、農業等の原始産業と、その生産物を原料とする工業とに區別する事が出来るが、之等の産業はその立地學的性格を異にするのみならず、更に各産業部門も種類、規模によつて、その立地學的性格が異なるが故に、立地決定の條件、因子の結合關係によつて夫々特異の地理的分布をなさざるを得ぬ。茲に自ら地域編制の重要性を生ずるのである。而して水産業、鑛業の如き原始産業は自然的關係の制約が決定的であつて、その立地問題と之に伴ふ地域編制の問題は比較的に簡單であるが、農業、工業は文化的條件に由てその地理的分布が決定される所最も大であり、而かもその分布は廣汎なる地域に亙るが故に、各經濟部門につきて地域編制の論ぜらるる場合には殆ど常に農業、工業の立地學的研究より出發してゐる。併し前にも述べたるが如く立地論は經濟活動の性格を演繹的に考察し、更に抽象的假設の下にその理想的立地を決定する學問であるが、地域編制論は立地論の要求する諸因子、條件が如何なる地域に實在するか

を地表の各部分に索め、特定の經濟活動が果してその地域に於て合理的に運営されてゐるか否か、更に各地域が如何に聯關し、その特殊なる經濟的個性によつて國民經濟的編制に對し合理的有機的に參加せるや否やを研究するものである。

第二章 經濟地域編制の原理

第一節 經濟地域編制の原理の意義

經濟地域の編制は、地表の各地域が独自の個性と機能とを有するが故に行はれる給付編制を意味する事は已に述べた通りである。各地域は地域編制に参加する事によつて益々その機能を發揮する事が出来る。各地域が統一的編制に参加し、独自の機能を發揮して自己を完成し、更に一國又は世界の文化、經濟の發達に貢獻する事は一種の給付であり、分業である。地域編制によつて各地域が独自の經濟的機能を發揮し給付編制に参加する事を地域的分業ともいふ。人間が夫々特殊の業務を分擔して分業をなす場合に、從來の資本主義的自由主義經濟に於ては、それは必しも客觀的合理的に當人の個性に適當し、從て最大限の機能を發揮し、社會全體の經濟力を有效適切に發現して居たか否かは疑問である。只、一個人は貨幣的利得の大小のみを目標として恣意により自己の欲する業務を分擔したのである。勿論各人が夫々恣意によりて分業

をなすとはいへ、社會全體が最大利得を追求する以上、自然的調節が行はれ、不適當なる分業は永續し得ないであらう。併し資本主義社會に於ては資本が絶對の支配力を有するが故に、人は必しも自律性を有せず、資本が人間を動かすのである。分業は資本の収益率を最大限に齎すべく編制されざるを得ぬ。從て人間の分業のみならず、各地域が分業する場合にも、資本の収益率が第一に考へられ、國家全體の經濟力を發揮する上に果して合理的であるか否かは別問題とされた。併し資本主義的自由主義を認むるならば、資本の収益率の最大化を計る事が合理的であり、合目的である。之に反し資本主義を否認するならば、又は資本主義が自己矛盾によりて崩壊し他の新しき體制を採らざるを得ないとするならば、新なる合理主義が要請されるわけである。故に各地域が如何にして編制され、從て如何なる地的分業形態をとるかについては種々の指導原理が存する。之を大別して資本主義以前の地域編制の原理、資本主義的自由主義の原理、資本主義以後の原理の三とする事が出来る。又有機的統一の充分に行はれたる地域の内部に於ける地域編制、即ち完全なる地域的分業と、然らざるものとの間に於ても、その指導原理は異なる。例へば國內に於ける分業と國際間の分業とは同じく地域的分業ではあるが、その分業の行はるる根本原理は本質的に異なるものである。更に國際間の地域的分業も、自由貿易時

代と、今日の如くブロック的排他的經濟時代とによりて、その編制原理は異らざるを得ぬ。

第二節 資本主義以前の地域編制の原理

資本主義經濟以前に屬する時代は最も長期に亙る時期にして、ピュッヒャーに従へば、之を封鎖的家内經濟時代と都市經濟時代とに區別する事が出来る。家族共產體、村落共產體、莊園經濟の如きは前者に屬する。この時代は全く封鎖的排他的にしてその地域的統一體は極めて狭小のものであり、即ち、氏族、村落、莊園に限られたのである。従て地域的差異が少く、人的分業は或る程度に行はれたけれども地域的分業は殆ど存在しなかつた。地域的に原料の産出が制限され且つその運搬の困難なるものにつきて僅かに地域的分業が行はれたにすぎぬ。各社會地域相互間には上層階級の奢侈的需要を充足するために極めて僅少な裝飾品等が交換されたが、之は必しも原費法則による交換ではなく、他の地域に絶對的に存在せざるものにつきて、或は贈與調貢の形に於て、或は鬪爭掠奪の形に於て行はれ、従て繼續的ではない。故にかかる財貨の流通は未だ眞の地域的聯關をなさしめる事は出来なかつた。この時代に於ては特定の社

會の内部に於てすら各地域が独自の個性と機能とに依て地域編制が成立してゐなかつた。蓋し各地域が殆ど同質にして、特殊のものゝ外、敢へて交換の必要なく、その独自の機能によつて相互に働き合ふ必要がなかつたからである。已に述べたるが如く、同質の地域は地的統一をなし得ずして、却て相排擠する事はこの時代の事情によつて明かである。併し乍ら、かかる封鎖的狀態は強大なる權力の發生によつて次第に打破され、廣大なる地域がその權力の統制下に屬し、茲に初めて各部分は却て独自の機能を發揮するに至つた。蓋し權力によつて統一されたる廣大なる地域の内部に存する各村落、莊園は、從來已むを得ず同一の經濟形態を有せざるを得なかつたが、併し本來その自然的事情は決して同一ではなかつたのである。然るに廣大なる權力社會の成立は、各地域をして種々の機能によつて權力者に貢獻せしむるに至つたから、各地域はその特殊の事情に適應する經濟を營むを以て最も有利と考へ、又然かなさざるを得なくなつた。而してかかる情勢の下に生れたものが都市經濟である。

都市經濟とは中世の歐洲中部に於ける經濟的特徴より名づけられたるものであるが、その實質的特徴は生産者と消費者との直接交換であり、その交換の機構としては専ら市場が利用された。即ち都市又は市場を中心として大體往復一日行程の範圍内の地域が完全なる經濟地域を形

成してゐる。而してこの地域は、封建領主又は國王の政治的統一下にあるのみならず、更に市場商人の成立によりて、多くのものが經濟的に連繫するに至り、市場商人は一の地域に於ける特産品を次々に配給し、從て各地域は次第にその自然的社會的事情に適當したるものを生産して他の製品と交換する事が出來た。かくして經濟地域の擴大に伴ひ、各地域は獨自の機能を發揮して地域編制に参加するに至つた。併し此の時代の地域的分業は未だ專業として行はれたものではなく、而かも貨幣的利潤のみを目標とするものではない。直接に必要なものを生産する事を第一とし、その餘れるものを以て他の餘れるものと交換する事を旨とした。最初より自己に於て全然必要とせざるものを生産し、之を他人に與へて、自己に缺乏せるものを獲得しようとしたのではない。封鎖的家内經濟は自己生産であり、都市經濟は顧客生産であるといはれるのは之がためである。從てこの時代に多少の地域的分業ありとするならば、その社會自身に於て絶對的に必要なものにして、且つその原料の產出が自然的に束縛されたるものに限られた。故にこの時代に於ては地域的個性は必しも顯著なる特異性を有せず、獨自の經濟的機能を發揮する事が不可能であつた。國家全體の各地域は政治的には結合して一體をなしたが、經濟的には未だ眞の地域的編制をなさず、地域的結合關係は恰も同質の細胞の結合の如き状態にあ

つた。之は地域的社會が狭小にして異質性に乏しく、且つ社會を構成する人間の能力、欲望が低級且つ均等であつた當然の結果である。要するに資本主義以前の地域編制は眞の有機的合理的編制ではなく、換言すれば各地域が獨自の個性による分業的機能の發揮による有機的聯關をもち得なかつた。又分業をなす場合にも、その社會に必要なものを生産する事夫れ自身が第一の目的であつて、他の地域との交換によつて相互に聯關するが如きは全く偶發現象にすぎなかつた。併し乍ら當該社會に必要なものはその原費の如何を問ふ事なく、地域内全體をあげて専ら之を生産し、尙ほ且つ不足するが如き場合には、他の地域より之を獲得するために敢へて暴力闘争をも辭しなかつたのである。而して一の社會が絶對に必要な財貨の生産はその原費の如何を問はず生産せられるとはいへ、その社會地域内に於て若し場所によつて生産原費が異なる場合には、その最も有利なる所に於て立地が決定されることは論を俟たない。又かかる小地域に於ける立地の決定は、財貨の循環距離が僅少なるが故に運送志向性は殆ど問題とならない。要之、この時代には各地域の間には、絶對的原費の法則は行はれず、原則として孤立してゐるが、小地域の内部に於ては却て絶對的原費の法則が完全に行はれたともいひうる。かくの如く資本主義以前に於ては、國家組織の確立されたる後に於ても、尙ほ一國內に於け

る各地域は所謂領域經濟として孤立し、封建領主は互に封鎖的經濟を營みしが故に、各地域の有する經濟形態は殆ど異なる所なく、只その地域に廣狹の差、進歩の程度、貧富の差が存したるに止り、本質的には同一であつたから、特殊のもの外、交換を行はなかつた。只都市の發達により都市と農村との區別が明かとなり、兩者の間に地域的分業が行はるるに至つた。而してこの地域的分業は、都市、市場を通して地域編制を促進するに大なる効果があつた。併し國と國とが繼續的通商貿易をなし、その特異の經濟力によつて結びつくが如きは未だ充分に發達しなかつた。この事は都市經濟の特質であり、又資本主義經濟以前の特徵である。

第三節 資本主義時代の地域編制の原理

歐洲の封建經濟、都市經濟の末期に於て國王は次第にその權力を増大し、自國の富國強兵を計るために、各地域の生産力の増進に力め、交通制度を確立し、人及び物資の流通を容易ならしめんとした。茲に重農主義、カメラリズム等による經濟政策が實行され、更に海外遠隔の地と貿易し、或は植民地を獲得し、之より珍貴の財貨と金銀の移入蓄積に力を致し、遂に重商主

義が各國の政治を支配するに至つた。かくの如き富國強兵の策を實行せんとすれば、嘗に一國が政治的に統一される必要あるのみならず、國內の各地域をしてその有する最も特異の經濟力を發揮せしむるの必要があり、之は總て地域的編制の合理化を促進した。かくして近代的合理國家の成立を見、産業革命となりて、凡べての封建的束縛が解除され、茲に初めて資本主義經濟が確立されたのである。

資本主義經濟は私有財産制の絶對性を認め、更に自由主義、營利主義によつて資本の利益追求を事とするものである。之を可能ならしむ條件は種々あるが、就中、一國の各地域は完全に有機的統一をなし、各人は自由に職業に就き、自由に移轉し、如何なる場所に於ても、己の欲する經濟活動をなし、又資本が自由に流動して安全且つ迅速に利益を追求する事を可能ならしむる條件を必要とする。かくして一國が次第に有機的統一をなしうる時は、各地域はその獨個性によつて最大限の經濟的機能を發揮し、地域編制を合理化する事が出来る。例へば我國の明治維新以前の狀態を見るに、封建制度の必然的結果として各藩領は殆ど同一の經濟形體を形成し、特殊なる生産につきてのみ地域的分業が行はれたにすぎぬ。従て地域的個性は未だ顯著に現はれず、經濟的地域の編制は問題とならなかつた。(勿論各地域の内部に於ては地域編

制は考へられた)。然るに維新後、中央集權政治の確立と共に地域的統一が行はれ、地域編制が合理化されるに伴ひ、各地域に夫々特殊の産業が新に發達し、或は舊産業が衰滅し、未だかつて見ざりし地域的個性を生成するに至つた。外國に對しても僅かに和蘭、支那と貿易をなしたにすぎぬが、今や凡ゆる國々と何等かの形に於て經濟的聯關を結び、一の地域的統一聯關によつて世界的經濟編制に參加した。

かくの如く一國內に於て各地域が有機的に統一され、地域的編制が完成し、更には外國との間にも地域的聯關を生じ、所謂地域的分業をなしつゝあるが、併し乍らこの地域的編制、分業の形成を指導する原理は本質的に異なるものである。即ち各地域が完全に有機的統一の下に地域編制をなせる國民經濟の内部に於ては、各地域は原則として絶対的原費の法則 (absolute cost theory) が地域編制の根柢的原理であり、國際間の如き地域編制の不完全なる場合には、相對的原費の法則 (comparative or relative cost theory) に基くのである。この法則は地域的分業論、貿易理論として古くより主張されたものであるが、最近にはこの兩者は本質的に異なるものでもなく、又之を以て地域的分業や貿易の原理となす事は出來ぬとの反對説もある。この反對説は、一時國際關係の緊密となりたる事、又必しも相對的原費のみによつて貿易の行はれざる

事、更には國內に於ても國家權力、或は資本力の増大により必しも絶対的原費の法則の行はれてゐないし、又國內に於ても相對的原費の法則が行はれてゐる事、更に國內に於ても完全なる有機的統一はあり得ないのであつて、有機的統一を完全にし絶対的原費の法則によつて生産を行ふ事は却て不利にして、寧ろ外國より輸入するを有利とするから、必しも國內の各部分の經濟力が絶対的原費の法則によつて發揮されてゐないと主張されてゐる。成る程、眞の有機的統一をなさず、且つ資本主義經濟が行はれ、自由貿易の行はるゝ限りは、この反對説は失當ではない。併し乍ら國際關係が變化し、又資本主義經濟が變質して統制經濟の行はるゝ場合に妥當しない故を以て、之を否定する事は出來ぬであらう。只問題は資本主義的國民經濟に於て、完全に絶対的原費の法則が行はれ、各地域が独自の個性によりその經濟的機能を最大限に發揮してゐるか否かといふ點である。一の國民經濟は完全に有機的統一をなし、各地域が合理的編制をなしてゐるとは限らない。各人の經濟的心意が充分に發達して居るわけでもなく、又有機的統一の物的手段たる交通制度が必しも完備してはゐない。故に資本はその與へられたる状態に於て最大限の利益を獲得せんとするが故に、完全なる地域編制の立場より見れば不適當なる地域に於て生産企業が行はれてゐる場合が少くない。逆に資本は獨占力を有するが故に個人的恣

意によつて不合理なる地域に企業を起し乍ら充分に資本の利益を獲得しうる場合もある。かくの如きは眞の意味に於ける絶対的原費の法則が行はれてゐないが、併し絶対的原費の法則は、一面より見れば、客觀的絶対的なる原費の意味ではなく、資本主義の下に於ては資本の収益率の立場より見たる絶対的原費とも考へられるのである。又自由に貿易しうるならば必しも國內の各地域の有する機能を敢へて活用せず、外國より有利に輸入しうるものが少くない。故に國內に於ては他の比較的有利なるものを生産し、相對的原費の法則によつて外國よりの輸入に俟つ事となる。この意味に於ては地域編制は合理的でない。併し苟も國內に於て生産する場合に他の事情にして同一なりとせば絶対的原費の法則によらざるを得ない。蓋し人間が最も有効に生産を行はんとするならば、最少原費の地點に於てするは當然の事であつて、資本主義經濟も統制主義經濟も之を無視する事は出来ない。只資本主義は企業をして最大の利潤を獲得し、資本の収益率を増大せしむる事を唯一の目的とするが故に、敢へて國內に於て生産を行はず、或は國民經濟全體の關係を無視して生産を行ひ、之がために國民全體の利害と相反する場合を生じたのである。故に本節に於て論ずる所は、絶対的原費の法則は資本主義的自由主義的前提の下に、又相對的原費の法則は國際間に自由貿易が完全に行はれてゐる事を前提とするもので

ある。勿論、一定の地域が凡ゆる産業立地として絶対に有利なりとするも、それを全部集中せしむる事は不可能である。之は空間の有限性より來る當然の事であつて、一定の限度を越ゆれば、その中の或る者は他の比較的有利なる地方に分置せざるを得ない。又同一地域に於ては最も有利に生産をなしうるものゝみが存立しうるが故に、この意味に於ては相對的原費の法則が行はれてゐる。併しこの場合の相對的原費の法則の意味は、國際間の分業の場合とは異つてゐる。即ち國內に於ては絶対的原費の法則を本則とし、その實現を容易且つ可能ならしむるために相對的原費の法則が、空間の不代替性よりして行はれてゐるにすぎぬ。而して之は觀念的假設に非ずして現實である。

第一 國民經濟内に於ける地域編制の原理

國民經濟内の各地域がその独自の個性に基く地域的分業によつて地域編制を成すのも、又國際間に國家が夫々独自の經濟能力を發揮して貿易交換を行ひ、以て國家が独自の經濟地域を形成するものも、その根本的理論は本質的には同一であつて、只その地域の廣狹の差にすぎないかの如くに見ゆる場合がある。併し之は前にも述べたるが如く資本主義經濟と自由貿易の行はる

る限りは、兩者の間には根本的に區別さるべきものが存する。即ち國民經濟内の地域的分業は人體内諸機關の分業に比すべく、國家間の地域的分業は恰も各人の間に於ける職業的分業の如きものである。即ち一國內に於ける各地域の經濟的分業は、特定の地方が、本質的に變化するか、或は他の地域との關係により相對的に變化して本來の機能を發揮し得ざるに至らざる限り、他の地方が之に代つて地域的分業をなし、地域編制に参加する事は出来ない。即ち特定の地域は独自の個性と機能とによつて特定の産業につき絶對的原費優越を有するが故に地域編制に参加しうるのである。絶對的原費優越の存せざる地域は特定産業によつて地域編制の構成分子たり得ない。然るに國際間の分業は各人の職業的分業に類似し、如何なる産業につきても他國に比し、絶對的には不利なる地位にある場合にも、當該國民經濟の諸産業中相對的に有利なるものを營み、その生産物を以て外國と交易するならば充分に存立する事が出来る。例へば社會の一員として各人が職業的に分業をなす時は、たとひ絶對的に長所を有せざる人と雖も、その比較的長所とする所を營みて生活しうるに反し、たとひ凡すべての業務につきて絶對的に優越する者と雖も一人にて凡すべての業務に従事し孤立の生活をなし得ざると同一である。

經濟地域の有機的統一の如何によつて當該地域内に於て絶對的原費の法則の實現せらるゝ程

度が異り、從て地域間に於ける分業の合理化の程度、并にその經濟的機能を發揮しうるの程度を異にする。而して現在に至る迄の經濟的發達の段階に於ては資本主義的國民經濟は貨幣的収益追求を第一義とせしが故に、その限りに於て絶對的原費の法則によつて支配されてゐたのである。即ち資本主義的國民經濟に於ては凡すべての企業者は最も原費優越の地域に於て經營し、之を市場に配給して地域的統一を成すが故に、各地域が孤立して經濟的存続をなす事は殆ど不可能にして、各地域は人體の各機關の如くその特殊の經濟的給付力あるによつて、國民經濟の肢體をなし、各地域は専らその固有の機能を發揮する事に由て初めて最大の貨幣的収益を獲得する事が出来る。併し此の事は直ちに各地域が最大の經濟的機能を發揮し、社會全體の生産力を増加し、國民の需要を充分に充足しうるといふ事を意味するものではない。資本主義的合理主義は資本の収益率の増大のための合理主義化であり、換言すれば個人的企業として貨幣的収益の獲得を目的とするが故に、絶對的原費の法則の實現は屢々抑制せられる事がある。蓋し營利企業は貨幣的収益を増大するためには却て生産を減少せしむる事さへありうるからである。茲に絶對的原費の法則の實現の上に於て資本主義的歪曲が存するわけである。資本主義が一見最大限の生産力を發揮するかの如く見えて而かも生産抑制の結果を齎すといふ自己矛盾に陥り、

各地域が必しも客觀的合理的機能によりて地域編制に参加せず、從てその經濟的機能を發揮する事が出來ず、國民經濟全體の進歩發展を阻害する場合の屢々存したのとはかゝる事情によるものである。他の事情にして同一であるとするならば、絶對的原費の法則が行はれるのは當然であり、又資本家が一國內に於て企業を營み利潤を追求する限り、同一の條件の下に於ては絶對的原費の法則によらざるを得ぬ。而して資本主義の行はれた事は一の現實であるから、今はこの現實を與へられたるものとして資本主義的地域分業、從て地域編制の由て以て行はるる一般の原理につきて略述するの必要がある。

資本主義的經濟の發達の第一條件は凡べてのものが計算可能性を有する事であり、從て同質化しうる事、簡單に授受し且つ支配しうる事である。この意味に於て機械の發達と、凡べてのものを證券化して貨幣的に計算しうる事が必要である。資本主義經濟に於ては凡べての富を證券化する事が出來、具體的な富又は資本を直接に保有するの必要なく、從て資本家は自ら企業者として個々の生産に従事する事なく、居ながらにして各地の事業に資本を投下し、収益を獲得しうる。又企業家は自由に一般市場より資本を吸集してその欲する所に於て企業を經營しうるのみならず、労働者が一定の數に於て必ず産業豫備軍として存在するが故に、何時にても

必要とするだけの労働力を獲得する事が出来る。更に労働の移動力も交通機關の整備、教育の發達、知識の向上によつて著しくその速度を増加したると同時に、技術上の分業の細密簡單となりたると且つ職業が階級的束縛より解放せられたる爲め、轉業の自由を生ずるに至つた。故に國民經濟内に於ては、各種の産業及び各地域に於ける同種の産業の間に比較的完全に收益闘争が行はれ、収益の水準化が敏速に行はれ、特定の産業又は特定地域の産業が特に多大の利益を收め、又は不當の損失を蒙るが如き状態は資本の絶對的獨占の行はるゝ場合の外、到底長く存続する事が出来ない。即ち一國民經濟内の一地域が種々の産業につきて他のいづれの地域よりも凡べて不利益なるが如き場合には、その地域には全く産業が成立せずして、その地域の資本労働等は他の絶對的に有利なる地域に集中するに至る。例へば甲地域に於いて一定の原費を用ふる時は銅二噸又は鐵十噸を生産しうるに反し、乙地域に於いては同一量の原費を費すも僅に銅一噸鐵三噸を生産しうるにすぎずとせば、兩地方の間には銅と鐵とにつきて地域的分業の行はるゝ事はない。銅鐵につきて絶對的に不利なる乙地域はかゝるものゝ生産に従事せずして、他の絶對的に有利なる産業を經營するか、或は又全く産業を起さずしてその資本労働を他の地域に移動せしむるに至るであらう。若し乙地域が何等かの方法によつて強ひて銅鐵の産業に従

事するも、その生産物は原費に一致せんとするの傾向あるが故に、甲地域の生産物に比して高價となり、市場に於て甲地域のもと競争するを得ない。たとひ需要が増加して乙地域の價格を以てするもなほ多少の販路を見出しうる場合には、甲地域は更に生産を増加して乙地域と同一の價格を以て製品を販賣し、たとひ收穫漸減によつて増加部分の生産費が大となるも、而かも増加量以外のものにつきては乙地域よりも大なる利益を擧げうるが故に、結局、乙地域の銅鐵を生産する事は、甲地域の生産力のみでは需要に應じ得ざる場合は別として、國民經濟上有害無益の事といはざるを得ぬ。乙地域がその他の最も有利なる産業を營むか、或はその資本労働を甲地域の銅鐵の生産又は他地方の各種産業に投下するに非ずんば、國民經濟に於ける地域編制は不合理のものとなり、地的統一を攪亂する事となる。小藩の分立せる封建時代 又は都市經濟時代に於て一國の經濟の發達せざりしは、即ち一國內に完全に絶對的原費の法則による生産が行はれず、各地域がその原費を異にするに拘はらず、何れも同様の經濟形態をとつたからである。只先にも述べたるが如く、一定の地域は空間的に有限なるが故に、その集中累積は一定の限度があり、そこに生産形態、經營規模による選擇が相對的に行はれざるを得ぬが、併し根本原理に於ては何等の變化はない。

第二 國際經濟に於ける地域編制の原理

國際間に對立せる各國民經濟はその最も主要とする産業形態を異にし、大局的に見れば略ぼ産業の地域的分業を形成し、一の地域的編制をなすと雖も、これ等各國民經濟は必しもその絶對的に有利とする産業につきて地域的分業をなすものではない。若し然りとすれば、我國の如く所謂「有たざる國」として運命づけられたるものに於ては何等の産業も發達せず、之に反し北米合衆國の如く凡べての資源につきて絶對的に有利の地位にある「有てる國」に産業が集中せらるべき筈である。然るに我が國がその資源に乏しく耕地少きに拘はらず、よく國際貿易場裡に於て歐米の富裕國と對立し、殊に東洋、南洋方面に於て、又最近は近東、アフリカ地方に於て歐米の産業と競争し得るに反し、北米合衆國がその莫大なる資源と人口とを以てするも、なほ高率の關稅によつて國內の工業を保護せざるを得ざりし所以は、國際間に於ては絶對的原費の法則が行はれずして、相對的原費の法則が行はれたる證左である。國際間に於ては、交通機關の發達、國際知識の向上、超國家的なる資本主義の發展等により、國際關係は頗る緊密となり、人、資本、物資の移動性が著しく増大し、殊に資本は多分に國際性を有し専ら最大利益

を追求するが故に、その投資による移動性の増大、國際分業の利益の増加等により、各國間の分業を促し、それは懸て貿易交換に基く國際的地域編制の合理化を齎したるが如きも、尙ほ自然的人種的文化的諸事情を異にするため、完全なる有機的結合をなすに至らない。第一次世界大戰後、國際聯盟の成立と共に、世界各國は平和主義の下に一層有機的結合をなし、國際的地域編制の合理化が行はれるものと期待されたが、事實は却て反對の方向に進み、各國は閉鎖的排他的なるアウタルキーを行ひ、地域編制が解體されたる事實を見るも、國際間に於ては國民經濟内に於けるが如き有機的地域編制の不可能なる事は明かである。

超國家的資本主義經濟が嚴として存在し、自由貿易の行はるる場合には、各國は夫々他國に比しては絶對的に不利なる立場にありとするも、自國內に於て比較的長所とする産業を主として營み、而してこの産業を國內に於ては絶對的原費の法則によりて地域的分業の下に經營し、他の國も亦かくの如き過程を以て生産を行ひ、その所産を以て相互に貿易交換するのが常である。この事は資本主義の下に於て自由貿易の可能なる限りは最も有利且つ合理的にして、之によるの外はないのである。併し乍らかかる國際的地域編制は、國家に貧富の差の存する事が必然的運命的であるとの前提の下に於てのみ可能である。かかる經濟が世界全體の資源を最も有

效に利用發現し、人間の文化力を最大限に發揮し、以て文化の發展と人類の幸福を齎す所以に非ざる事は云ふ迄もない。故に相對的原費の法則による國際的地域編制は絶對的合理主義の立場よりすれば、眞の經濟合理主義を完遂するものといふ事は出来ぬであらう。結局に於て「有たざる貧しき國」の國民は、その勞働力のダムピングによつてのみ生活する事となり、「有てる富める國」はその天與の資源によつて有たざる國を勞働的に搾取して益々文化財の蓄積を大ならしむる事が出来る。併し乍ら世界人類が有機的統一體としての世界經濟を完成し、絶對的原費の法則によりて合理的に地域的分業をなしうるならば、今日の如き國際間の貧富の問題を除き、世界の經濟的長所を最大限に發揮し、經濟社會を理想化する事が出来るであらうが、併しかくの如きは全く實現する事能はざる空想に等しきものである。各國の國境が撤廢せられ世界が統一的經濟體となり得ずとすれば、之を現實の與へられたる條件とし、この條件に最も適應せる方法によつて國民經濟の合理化を計るの外はない。かくして國際間には相對的原費の法則が存立し得たのである。故に相對的原費の法則による經濟は人類經濟の究局的合理化の立場よりいへば決して理想的のものではない。相對的原費の法則の行はるべき前提が失はれ絶對的原費の法則の行はるべき前提の完成せらるるか、或は國際的地域編制が解體し、各國は自由貿

易をなし得ざるに至つた時は、相對的原費の法則は最早その存立の理由を失ふであらう。故にこの意味に於て相對的原費の法則はそれ自身歴史性を有するものといはねばならぬ。

從來各國民經濟は一見國際親和的の如くにして實は排他的である。之は今日の民族意識及び國家組織を異にする必然の結果であるが、而かも各國民經濟はかかる矛盾の前提の下に貿易通商により最大の利益を擧げん事に力め、國民經濟の根本組織を破壊せざる限りに於て、他の國民經濟と交渉し、生産上最も長所とする貨物の貿易によつて互に利得の追求を行つた。然らば各國民經濟が如何にして相對的原費の法則によりて國際的地域編制をなし、自給自足の不便をさけて地域的分業の利益を確保しうるかの理法を説明しよう。已に國內に於ける産業の地域的分業を述ぶる際に示したるが如く、一國內に於ては銅鐵の生産につき、同一の原費に依て甲地域は銅二噸鐵十噸を獲得しうるに、乙地域は銅一噸鐵三噸を生産しうるにすぎざる場合に於ては、甲乙兩地域間に於て銅鐵の生産につき地域的分業の行はるる餘地はない。然るにかくの如き關係が甲乙の二國間にありたりとすれば、銅鐵の生産につき甲乙兩國間には分業が行はれるのである。即ち同一の原費によつて銅二噸鐵十噸を生産しうる甲國に於ては銅一噸と鐵五噸との價格が相等しからんとし、銅一噸鐵三噸を生産しうる乙國に於ては銅一噸と鐵三噸との

價格が相等しからんとするの傾向を有する事は云ふ迄もない。故に甲國は銅よりも鐵の生産につき比較的有利であり、乙國は鐵よりも銅の生産につき比較的有利である。特殊の事情を生ぜず、自由貿易の行はるゝ限り、甲國は専ら鐵の生産に従事し、乙國は銅の生産に従事し、銅一噸に對し鐵三噸以上五噸以下の一定の比率を以て、甲國の鐵と乙國の銅とを交換すれば、これによつて兩國は共に鐵二噸だけの利益を收むる事が出来る。而して銅鐵の交換比例が銅一噸に對して鐵三噸以上五噸以下の如何なる點に於て決定せらるるかは種々の事情に影響せられるのであるが、鐵三噸以下又は五噸以上の割合となれば特殊の場合を除きて兩國間に二者の交換は行はれなくなり、從て地域分業も停止するわけである。なほ相對的原費の法則による交換の利益は、貿易國の比較的長短の差の大なる事、又貿易貨物の種類の大なる事（貿易額の増加により）、及び貿易國の多數なる事（利益の分配が公平となる故に）に由て増大するのが常である。かくして各國はその比較的長所とする所によつて國際間の經濟的地域編制に参加すると同時に、國內間に於ては絕對的原費の法則によつて地域的分業をなし、以て經濟的地域編制の合理化を計らんとするの運動が不斷に行はれるのである。

第四節 統制經濟時代に於ける地域編制の原理

第一次世界大戰後、資本主義經濟は急激に變質し始めた。已に述べたるが如く、ベルサイユ體制は世界各國を有機的に結合せしめず、一民族一國家の原則は却て各國をして閉鎖主義をとらしめ、アウタルキー、計畫經濟を必然的に進展せしめた。又大戰による巨大なる物資の消耗は國際貸借關係を變革し、從來貨幣の基礎とせられたる金が一二の國に集中し、貨幣の減價は資本主義的經濟活動の指導力を喪失した。茲に於て貨幣を根柢とする資本主義經濟は國際間には勿論、國內的にも破綻を來したのである。貨幣は資本主義社會の公分母であり、之によつて萬物が強固なる結合をなし、萬人は貨幣的収益率を唯一の指南車として活動した。即ち貨幣が資本主義經濟の統制者であつた。然るに今や貨幣はその統制的機能を失ひつゝあるのである。又資本主義は貨幣的収益率のみを追求するものなるが故に、終には生産そのものに何等の意義を認めざるに至り、生産は貨幣的収益獲得のための必要なる害悪とさへ考へらるるに至つた。この事は人も資本も凡べて怠業状態に陥らしめ、人口の一定量は必ず失業者として産業豫備軍

を形成し、次第に社會の必要とする丈の生産が行はれなくなつた。人と物とが夫々の機能を最大限に發揮する事も出來ず、又時間的にも空間的にも、人と物との活動が全く無政府的狀態に没落した。茲に統制經濟の必然的發生が要求されるのである。

更に統制經濟を促進したるものは、各國がアウタルキーを行ひ、出來る丈け自國內に於て自給自足の經濟を營まんとした事である。自國の資源、資本は自國に於て活用し、從て資源の輸出を行はず、又外國より成るべく輸入せざる方針をとつた。自由貿易の下に於ては、已に述べたるが如く、一國は必しも絶對的に經濟的優位に立つの必要なく、又國內に必しも豊富なる資源を有する事を必要としなかつた。勤勉精巧なる多くの人口を有するならば、原料を購入して之に加工し、その生産物を輸出する事によつて原料の代價を支拂ひ且つ自國の需要を充分に充足する事が出來た。有てる國と有たざる國との區別は昔より存在したが、自由貿易の下に於ては、かかる問題は意識されなかつた、又意識するの必要はなかつたのである。然るに一度國際關係の變化、國家的自給自足の原則によつて國民經濟の營まるるに至れば、國內に於ける經濟原則は全く一變せざるを得ぬ。たとひ原料を購入しうるとするも、その製品を輸出する事が出來ねば、金を無限に保有せざる限りその代價を支拂ふ事が出來ず、從て爲替關係の不利を生じ

益々輸入が困難となる。故に國內に存する資源又は製品にして絶對に他國になく、而かも絶對に之を必要とするが如きものを生産せざるを得ない。故に如何に多くの原費を必要とするものが開發に力めざるを得なくなる。從て自由貿易の下に於ては到底成立し得ざるが如き不利なる事業をも起し、外國に依存せし原料につきて代用物を國內に求め、成るべく外國よりの輸入を抑制する。かくして國內に於ける各地域はその保有する諸種の能力を最大限に發揮せざるを得ない。而して之が指導原理は、從來の如く單に資本の收益率の大小ではなく、苟も國家の需要を充足するの必要あらば、如何なる方法をも敢へて辭しないのである。即ち凡べてのものを生産過程、再生産過程に轉入せしめざるを得ないのである。再生産過程に志向する合理主義が新經濟原理として登場したのである。固よりこの場合にも原費を無視する事は出来ない。同一物が各地に存する時は、その最も原費優越の地域に於て生産の行はるるは當然であるが、只出来るだけ多量に生産する事が最高の目標となり、價格の下落による貨幣的利益の大小の如きは問題とならない。此の意味に於て統制經濟下の地域的分業は最も合理的に絶對的原費の法則による生産擴大に志向するわけである。更に國家の需要は多種多様であるが、從來はこの凡べてのものを自給したのではなく、自ら比較的長所得意とする所のものを専ら生産し、各國相互に交

換して、國民生活の多様性を充足し、需要充足の豊富化を計つたのであるから、貿易の盛なる國ほど却てその生産種類は單純であつた。然るに閉鎖的アウタルキー經濟を營まんとすれば複雑多様な需要を自給せざるを得ないから、凡ゆる産業部門の新生、或は休止せる産業の復興を見、地域的分業は複雑を極め、從て絶對的原費の法則の確守、地域編制の合理化を必要とするのである。統制經濟の前提條件として、一國民經濟が多種性 (Verschiedenheit)、統一性 (Einheitlichkeit)、包擁性 (Umfassenheit) を必要とし、更にその根本條件として農業的自給自足を絶對的に必要とするといはれるのは實に之がためである。

一國がアウタルキーと統制經濟を遂行するならば、貿易は全く阻害されざるを得ない。各國は資源の保有に力め絶對に自國內に産出し得ざるものか、或は極端に生産費を要するもの、外は、成るべく輸入する事を欲しない。凡ゆる方法を講じて輸出入を抑壓するに至つた。從て今や世界的地域編制なるものは殆ど解體したといふも過言ではない。各國は最早相對的原費の法則によつて物資の生産と交換とをなす事は出来ないのである。併し國家の必要なるものは如何なる方法を以てするも獲得しなければならぬから、茲に非經濟的方法が屢々とられるに至る。即ち國民は多大の犠牲を拂ひ、自らは或る生活需要の充足をなさずして、之を輸出に振り向け、

以て所要の物資の獲得に努力する事さへある。極端なる場合には國民の生活程度を著しく低下し、甚しきは飢餓輸出さへも斷行せざるを得ぬ。而してかかる場合に最も不利を蒙るは「有たざる貧しき國」である。「有てる富める國」は犠牲的輸出、殊に飢餓輸出をなすの必要なく、却て貧しき國の犠牲は富める國の富を益々増大し、その生活を益々豊かならしむるの結果となる。犠牲的輸出、飢餓輸出に於ても、或る程度に相對的原費の法則が行はれてゐるけれども、相對的原費の法則は多くの種類の物資が多量に自由に多くの國々との間に貿易せらるる時に有效に行はれ、且つ各國は失ふ所がないのである。故に今日に於ける貿易は眞の貿易ではなく、從て眞の經濟的有無相通による世界的地域編制ではない。かく觀じ來れば、今日の如き經濟體制に於ける貿易は果して人類の幸福を齎す經濟的行動なりや否やは再検討をなすの必要がある。吾人は貿易振興を考ふる前に、眠れる資源の利用發現と、人間の經濟力の發揮をなさしむるが如き組織と方法とが先決問題として考究されねばならぬと思ふ。各國が斯くの如く孤立し對立して閉鎖的アウタルキーを行ふ事は到底永く存續する事能はず、若し長く存續するならば、文化も經濟も衰退の外ないであらう。去りとて直ちに國際關係が調整され、自由貿易が復興する事は近き將來に於ては殆ど絶望である。茲にブロック經濟、廣域經濟(die Grossraumwirtschaft)

が必然的に要求されるのである。ブロック的廣域經濟内に於ける地域的分業、從て地域編制の如何は、之を構成する各國各地域の經濟的個性及びその經濟的機能の如何、更にはその結合關係、指導的地位に立つべき國家の統制力の如何によつて決定される。統制經濟が包擁性を要すといはれるのは、如何に一國が多種性を有し、又統一性を有するも、その地域が狭小なるに於ては多種性と統一性の機能が充分に發揮されないから、成るべく廣大なる地域を包擁するの必要があるためである。ブロック的廣域經濟に於ける地的統一、地域編制の原理は必しも國內に於けるが如き完全なる絶對的原費の法則にも非ず、さりとて國際間の自由貿易に於て行はれたるが如き相對的原費法則でもあり得ない。その地域的統一、地域編制の實狀に適應せる新しき編制原理を必要とする。それはこの兩者を止揚した國民的需要充足の原理ともいふべきものであらう。而して更にその原理の根柢をなすものは凡べての犠牲をして再生産に轉入せしむる事を志向とする經濟合理主義でなければならぬ。各國家、民族の自然的歴史的文化的基礎を無視せる共同體論の如き、又産業の發達、之に伴ふ地域的配置に關する公式論の如きは、新しき地域編制原理の確立によつて科學的實證的に検討せらるべきである。

第三章 經濟地域編制の變化

第一節 經濟地域編制の變化の意義

經濟地理學は經濟地域を與へられたるものとし、一定の時に於てその地域が如何に統一的に編制されてゐるかを研究するものである。故に經濟地域が如何なる變遷を経てそのあるがままの状態に達したかを歴史的に研究し、更にそれが將來如何に變遷すべきかを豫想するが如きは、その本來の研究任務とする所ではない。併し乍ら現在に現在へと移り行くと共に、過去を含むものであり、且つ未來を胚胎してゐるが故に現在でありうる。又現在に於ける一定地域の個性が如何なる構造を有し、如何にして形成され編制されたるかは、過去に於ける變化の過程を考察する事によつて初めてよく理解されるのである。殊に文化的並に自然的構造條件が經濟地域の構造要素並にその組織化されたる經濟的個性に對して如何なる影響を與へるかは、他の自然科学の如く個々の事物につきて實驗する事は出來ない。只歴史的に變化の過程を辿りてその影

響を推理するか、或は類似の現象を多く集め大量觀察によつて因果關係を類推するの外はない。何れにするも變化の過程を通してのみ、經濟地域の個性の形成、之に對する構造要素及び條件の意義を理解する事が出来るのである。

經濟地理學は概念的には經濟地域を靜止の状態に於て考察するものであるとせられるが、併しその研究對象たる經濟地域及びその地域編制の状態は常に變遷して止まない。經濟地域も亦一の有機體に例ふべきものであつて、經濟地域夫れ自身が辨證法的變質をなすのみならず、たとひ自らは變化せずとするも、經濟地域は他の地域と構造的聯關に於て地域編制に参加せしむるが故に他の地域の變化に伴つて相對的に變化せざるを得ぬ。前章に於て述べたるが如く、地域編制の指導原理もその經濟地域の變遷と共に變化するのであるから、地域編制の理論を明かにせんとすれば、經濟地域の變遷が如何にして惹起せらるるかに關して充分なる理解ある事を研究の前提とすべきである。併し地域の變遷それ自身の研究は、如何にそれが經濟地域の構造を知るに必要であるにしろ、經濟地理學的研究そのものに非ざる事は言を俟たぬ。經濟地域の變遷を歴史的に研究する事は、どこまでも經濟地理學研究の前提として取り扱はねばならぬ。經濟地域の編制の地理學的研究と歴史學的研究とは概念的方法論的に全く別個の範疇に屬すべき事

は屢々述べた通りである。最近に於ける經濟地域に關する研究に於て、歴史的變遷の研究が恰も經濟地理學固有の主題たるかの如く、その研究の大部分を占むるものが少くないのは、方法的に見て議論の餘地を存するものといはねばならぬ。

「經濟地域の個性、機能は辨證法的必然的に變化すべきものであつて、永遠に同一ではあり得ないのみならず、相互聯關の關係に於ても相對的に變化するのである。而かもこの變化は國民經濟の内部の關係及び國際關係の兩方面より齎さるるが故に、その變化の過程は決して單純に説明する事は出来ない。而して經濟地域の個性、機能、從てその編制の状態は、右の如き諸關係による質、量の變化のみならず、それは當然に他の地域との聯關の變化を來し、一地域が他の地域に對して有する結合關係に變化を生ぜしむるものである。例へば或る工業地方と農業地方とがその特殊の經濟的個性によつて互に聯關しつゝ國民經濟的地域編制に參加し、各々その機能を發揮せる場合に、その工業的經濟地域が急速なる大發展を遂げたとすれば、之と聯關せる農業地域は次第に變質して工業地域化されるか、或は農業地域たるの地位を維持するにしても、經濟的社會的には全く工業地域化され、工業地域の經濟力の支配を離れる事が出來なくなるが如き變化は常に行はれつゝある。即ち經濟地域の個性が量的質的に變化すれば空間的面積、

擴がりの變化を必然的に隨伴するものである。而してこの面積的擴大縮小化は、當該地域の有する經濟的個性、機能の大小、換言すれば經濟力の大小によつてその速度の異なるを常とす。かのヒンターランド (Hinterland) の如きは、一定の經濟地域が他の地域に對する經濟的影響力の關係を示すものであるが、併しこの場合には各地域が尙ほ獨自の個性的存立を有するのである。然るにその影響力の強化、普及によつて質、量共に變化すれば、その地域はその獨自の個性を失ひ、最早單なるヒンターランドに非ずして影響力の強大なる地域の中に包攝され、化成して地域的に一體となれるものである。

「かくの如く經濟地域の編制は、自らの辨證法的變質、相互聯關による相對的變化、之に伴ふ空間的面積の擴大縮小等によりて須臾も止る事なき變化をなす。併し如何に變化するも、之を貫き、之を導くもの、その志向するものは常に絕對的原費の法則でなければならぬことは已に詳述した所である。」

前節に述べたるが如く、國民經濟の有機的統一の程度、資本主義的企業、國家的統制等によつて、絕對的原費の法則の實現の合理化、合目的化の差異を存するのである。故に地域編制の變化は、右の如き前提の變化に伴ふ絕對的原費法則の合理的目的追求の速度を示すものといは

ねばならぬ。絶對的原費の法則を中心として國民經濟の地域編制を研究するが故に、「經濟地理學は靜止の状態に於て經濟地域の編制を研究するといふが、併しそれは現實にはあり得ないものであり、現實に在り得ざるものを研究するといふ事それ自體、無意義である」との反對を克服する事が出来るのである。この絶對的原費の法則と、國內に於ける地域の統一の諸條件又は地域編制を變化せしむる動因、並に國際諸關係の變化との聯關に於て經濟地域編制の變化する理由が明かとなるであらう。

第二節 國內關係による經濟地域編制の變化

國民經濟の内部に於ては、その資本主義經濟たると統制經濟たるとを問はず、程度の差こそあれ、各地域が絶對的原費の法則によつて地域分業をなし、地域編制に参加せんとするの傾向を有するが故に、各地域は獨自の經濟形態を形成し、或る地域に於ては工業が集中特化し、或る地域に於ては周約的園藝農業が行はれ、或る地域に於ては商業が行はれるといふが如く、夫特異の經濟的特徴によつて自ら各地域が區別される。從來の研究によれば各地域に特殊なる

産業が集中特化してゐる程度を以て國民經濟の發達程度の尺度の如く考へられたのであるが、併し之は必しも正當でない。何となれば、各國民經濟はその地域の廣狹に大なる差異があり、又文化的、自然的構造條件の組み合せ關係は國によつて異なるのであつて、諸條件が一地域に集中せるか、或は廣きに互て遍在せるか、更には山岳河川が多くして集中すべき平地域が少いか、或は平地帯にして何處に於て産業を起すも生産費に影響少きか等によつて異らざるを得ないからである。又集中特化には一定の限度がある。一地域に特定の産業の集中特化する時は、その經營上有利なる點多く、殊に傳統力又は獨占力の強き場合には集中特化による慣性 (Inertia) を生じ、他の條件が變化して、生産上不利の地位に立つに至りたる場合にも、集中による傳統的慣性は能くその不利を補填して餘りがある。併し極度に集中特化する時は已存の産業は新事態に即應するが如き體勢をとる事が困難となり、又土地の缺乏、交通の窮窟、衛生保健上の缺陷、日常生活の不便が増大し、求心力的集中は、結局、遠心力的分散を包藏しつゝ、辨證法的自己否定的に運行してゐるものといはねばならぬ。資本主義的自由經濟の行はるる時は、個々の企業利益さへ増大出来ればよいのであるから、國家全體の不均衡又は不利を無視して一地域に集中する事が行はれたのである。従て集中特化の大なる事を以て經濟的發達の尺度と考へるの

は、資本主義經濟の發展期に於ての見解であつて、資本主義の最盛期以後に於ては已に地方分散化が行はれつゝあつた。殊に最近に於ける統制經濟の強化は、人爲的に産業の地方分散によつて都市と農村、各産業部門、各階級間の調整を計らんとし、先づその地的地盤たる經濟地域の均衡を合理化し、以て國家の經濟的總力を擧ぐるに力を致すに至つた。更に科學の異常なる發展に伴ふ新産業は屢々大規模にして且つその形状が著しく新奇なものであつて、古くより産業の集中特化せる經濟地域に於ては到底之を營む事も出來ず、又その必要なく、却てより好き諸條件の具備せる處女地に新設するを有利とするに至つたから、産業の地方分散は益々促進せられつゝある。特に最近に於ける戰爭技術の進歩は愈々その破壊力を増大し、如何なる遠隔の地域をも攻撃しうるに至つたから、從來の如き産業の集中主義は全くその存在の理由を失ひ、産業の地方分散は益々その勢を増進するものと思はれる。前章に述べたるが如く、各國がアウタルキーによる自由貿易の停止は、外國に依存する事を困難ならしめ、出來る丈け自給自足を旨とするが故に、外國に比し相對的不利益なりとして放置されたる資源の利用開發に全力を注がざるを得なくなり、茲に自ら新産業が誕生し、各地域は急激なる變化を來し、從來全く山間僻地の山村たりしものが一大鑛業都市となり、或は寂寥たる漁村が一大重工業都市と化するが

如き地域的大變革を見るに至つた。かくして今や産業の地方分散に基き經濟地域の變化、之に伴ふ地域編制の再編成が問題となつて來たのである。故に産業の集中特化は今日では必しも高度の經濟的發展の表徴とは云へなくなつた觀がある。併し乍ら一面より見れば、集中特化が常に地方分散を自ら包藏してゐるのであるが、之と反對に、この地方分散は又自ら集中特化を伴ひつゝ運行してゐることも明かなる事實である。茲にも亦經濟地域の編制に於て辨證法的運動を見る事が出来る。

産業の集中特化にしろ、又その地方分散にしろ、各地域が地的統一をなし、合理的地域編制をなせるが故に、それは可能なのである。換言すれば絕對的原費の法則が行はれ得るからである。統制經濟による計畫的人爲的集中分散も、戰術的變化に基く分散も、恣意によつて行はれるものではない。地域編制が有機的に統一され、絕對的原費の法則が行はるる以上、最も原費優越の地域に於て集中し、又は分散するのである。故に如何なる事情にあれ、一國の經濟地域が有機的合理的編制をなす事は、絕對的に必要にして、之が整備する程、國家の經濟力は發揮せられるのである。換言すれば各經濟地域が獨自の個性に依てその經濟的機能を充分に發揮しうるのである。而して經濟地域の個性を發揮せしめ有機的合理的編制に參加せしむるために

は、その有機的統一の物的手段たる交通制度の發達が絶對的必要條件である。就中、鐵道の發達は、各國の有機的統一を助長し、國民經濟が完成された。更に鐵道の外に運河、河川交通の最も發達せる國ほど、地域編制は合理化され、各地域はその經濟的機能を發揮し、從て國家の大發展を齎したる事實に徴し、如何に交通の發達が地域編制の合理化に對して大なる役割を演ずるかゞ明かである。又最近に於ては自動車道路の發達、航空の進歩は地域編制に對して革命的變化を齎した。前に述べたる産業の急速なる集中分散の如きは、かかる交通の發達に伴ふ地域編制の有機的統一によつて初めて可能である。近代工業に立ちおくれたる我國が、世界勢の急轉によつて已むを得ず經濟地域の再編成をなしつつあるが、之とても若し交通制度が明治の初期又は徳川時代の如き状態にあつたならば、如何なる方法を以てするもその目的を達し得ないであらう。之に由て見るも地域的個性の變化、之に伴ふ地域編制の變化が、有機的統一の物的手段たる交通制度によつて促進される事が自ら明かであらう。

地域編制の變化を齎すものは交通制度の外に種々のものが考へられる。特に需要の變化、經營組織の變遷、技術の改良進歩の如きは最も著しき影響を與へるものである。例へば戦争が勃發して國家が軍事的大需要を生ずる時は軍需産業に全力を集中する事となり、從來の平和産業

は次第に衰退するか、或は軍需産業に轉向するが故に、自ら地域編制も變化する。又需要の激減によるパンニックの襲來が産業の壊滅を來し地域的個性を變化せしめた場合が少くない。經營組織も個人的小規模經營と資本主義的大規模とによりて産業の地域的配置を異にし、從て地域編制も自ら變化を來すのである。殊に統制經濟の下に於て國家の支配が強力となれば、從來の如き資本主義的經營が是正され、國家中心主義によつてその經營、配置が變化し、從て地域編制も當然に變化すべき事は現今の事實が明かに證明してゐる。貨幣制度の變革は産業の經營に大なる影響を與へ、特に極端なるインフレーションが産業のコンチェルンを促し、ために經濟地域の編制を變化せしむる事が大である。更に又技術の發達は常に人間をして有機的束縛より解放して無機的活動を可能ならしむるのみならず、從來利用し得ざりし資源を利用開發しうるが故に、已むを得ず他の産業に従事せる地方が、新に特殊産業を開始し、茲に産業の集中特化によつて急速なる發展を遂げ、地域編制上有力なる經濟地域となる事がある。この事は從來とても屢々發生したる所であるが、世界經濟の轉換と之に伴ふ國內的統制經濟の必要よりして生れたる新しき技術が、かくの如き大變化を惹起しつゝある事は實に現代の一大特徴ともいふ事が出來よう。この外、人口關係、國民の社會思想、經濟思想の變化も亦地域編制の變遷に重大

なる影響を有する事は言を俟たない所である。

第三節 國際關係による經濟地域編制の變化

國民經濟の變化發達は、前節に述べたるが如く、國內に於ける諸條件の變化に伴ふ地的統一、地域編制の合理化と利潤追求の強化によつて促進されたのであるが、併し之は同時に國際經濟の發展、自由貿易による國際經濟地域の編制の結果に外ならぬ。國民經濟は一の個別的經濟地域である。即ち獨自の經濟的個性による經濟地域である。個性の發展、之に基く獨自の機能の發揮は全體的聯關に於て初めて可能である。若し往古の如く各國が夫々孤立排他的にして國際經濟、自由貿易による地域編制なかりせば、到底今日の如き各國經濟の發展は在り得なかつたであらう。國際的地域編制が緊密となるに従て、各國民經濟はその獨自の産業を營み、相對的原費の法則に依て相互に交換し、共に利益を享受し得たのである。併し乍ら國內的に見るならば、國際關係の變化によつて或る産業は衰滅し、或は急速に發達し、從て地域的にも産業の分布が變化し、各經濟地域の構造は屢々變動し、それは應て地域編制を動搖せしめた。而して國

際關係の影響による地域編制の變化の大小は、外國に依存する程度によつて異り、即ちその輸入品につきて外國にのみ依存するか、輸出品の需要市場が外國を主とするか否か、外國よりの輸入品は一國の獨占的なるものか、他の國々にも存するか、輸出品は一國の獨占物か、生活必需品か、更には代替性を有するや否や等の關係によつて異なる。何れにするも自由貿易主義の下に於ては、各國は獨占力によつて世界市場を獲得せんとするが故に、國內的に資本的統制を行ひ輸出力の増大を計り常にダムピングを行はんとし、それは新しき優良製品を廉價に輸出する事となり、各國は互に産業上に大なる影響を蒙らざるを得なかつた。

國際關係の變化による國內産業の盛衰、之に伴ふ經濟地域の變化を我國の明治以來の事實に徴して見よう。外國と自由に貿易せざりし時には、我國民の生活様式は、外國に比して著しき差異を有し、この特殊の生活に適應すべく經濟組織が組み立てられ、特殊の産業が發達し、生活必需品につきては殆ど自給自足の状態に在つた。然るに開國以來世界經濟の一環としてその編制に参加するや、茲に相對的原費の法則に依て生産を行はざるを得なくなつた。當時我國には重工業、化學工業は殆どなく僅かに纖維工業が比較的有利とされたのであるが、その中、木棉工業の原料は主として關西諸國の在來棉によつたのである。然るに我國の如き農業事情の

下に於て棉花を栽培する事は之を外國に比すれば甚しく不利であり、茲に於て印棉、米棉が我國に殺到し來り、多年棉作地として著名なりし地方は間もなくその影を没し、之に代つて人口の過剩、賃銀の低廉、纖維工業的技巧の優秀といへる相對的長所によつて木棉紡績工業が急激なる發展を遂げ、遂に我國産業の大宗となり、顯著なる紡績工業地域なるものが自ら形成された。又我國在來の染料は主として植物性のものが多く、阿波の藍、東北地方の紅花の如きは地方特産物として殆ど獨占的地位を占め、特殊の經濟地域を形成してゐたが、獨逸等の化學染料の到來は、之等在來染料の生産を全く衰滅せしめた。更に製紙業の如きも國內各地に發達したが、生活形態の變化と共に、外國より洋紙又はその原料なるパルプが輸入され、之れ又殆ど影を没する有様である。この外、外國より廉價に輸入の行はるるに至りしため衰滅したる産業は枚舉に遑なく、從て我國國民經濟の地域編制は顯著なる變化を遂げた。在來の地方特殊産業なるものは、開國と共に殆ど衰退し、その地理的分布は根本的に變化した。之に反し外國との關係に於て新に産業の成立し、發展したるものも亦少くない。例へば製茶業の如きは山城近江等少數の地方に於て僅かに集中特化してゐたにすぎぬが、外國の需要増加により、その栽培、製茶の方法に一大變化を來したるのみならず、その生産地域は静岡、三重の如き新しき地方に發達

し、舊來著名なりし地域は經濟的には寧ろ重要性を失つた。特に養蠶製絲に至りては最も著しき地域的變化を遂げた事は茲に贅説する迄もなく、之は全く米國の需要増大によるものである。併し生絲に對する需要は奢侈的性質を有するが故に、その需要の増減、之に伴ふ價格の變動著しく、從て養蠶製絲地域は常に經濟的動搖性を有する。此の外、開國以前には殆ど注目されざりし産業が、外國の需要増加に伴つて各地に發達したものは實に多數に上り、意外の感に打たるゝものがある。かかる問題のみの研究と雖も歴史的地理的に大きな課題である。

右は我國の例によつて國際關係の變化が國內産業の盛衰を來し、從てその地理的分布の變化、地域的個性の形成に及ぼす影響を述べたのであるが、その變化は外國に比して特に著しきものがある。之れ蓋し我國が長く外國と交渉せずして特殊の生活様式をとりたる事、その自然的歴史的事情が頗る複雑多様にして凡ゆる生産が行はれた事、更には外國に全く存在せざるが如き原料、技術が存在せるが故に、新しき外國需要に適應しうる事等の理由により、その衰滅の度も甚しかりしと共に、又新しき産業の發生を可能ならしめたのである。殊に今次の世界大戰、支那事變が如何に我國國民經濟の地域編制を激變せしむるか重大なる問題である。茲に國土計畫の重要性を見るに至つたのである。

最近に至る迄は自由貿易に基き各國が進歩的積極的に貿易の發展を計らんとしたるが故に、各國民經濟は常に地域編制上に重大なる影響を受けてゐたのであるが、先にも一言述べたるが如く、今や各國はアウタルキー原則をとり、或はブロック主義をとりて閉鎖排他の國民經濟を營まんとし、相對的原費の法則に基き自由貿易は殆ど停止の状態となつた。茲に於て各國は絶對に國內に生産し得ざるものの外は輸入せず、又相對的原費の法則より見れば不利益にして外國より購入するを有利とするが如きものにつきても、敢へて國內に於て之を生産せんとし、若し尙ほ生産不可能ならば、國民的生命線の確保を理由として廣域經濟圏を形成し、或は武力によつても地域の擴大を計らざるを得なくなつた。かくの如く世界大戰後の國際狀勢の變化は、自由貿易時代とは異なる意味に於て、國內の地域編制を變革せざれば已まない有様となつた。地域編制の變革の上に於て實に劃期的のものといふべきである。産業革命の後、世界各國の地域編制は甚しき變化を遂げたが、今後はそれ以上の大變化が起るものと思はれる。而して之が編制の指導原理は凡べてのものを再生産過程に轉入せしむる事に志向する徹底的合理主義、絶對的原費の法則に基かざるを得ぬであらう。

第四章 農業地域編制論

第一節 農業地域編制の意義

地表空間の各部分はその独自の經濟的個性によつて經濟地域を構成し、各地域は相互に働き合ひつゝ、地域的給付編制に参加するが故に、地域統一體なるものが成立しうるのである。而して國民經濟も亦一の地域統一體にして、地表空間に於ける各種の經濟活動部門を綜合統一化したる經濟地域、從て地域編制の統一體である。併し乍ら地域編制の統一體たる國民經濟を經濟地理學の對象として研究する場合には、先づ個々の經濟活動部門、即ち之を具體化したるものとしては、各種産業部門を通じての地域統一體として考察するの外はない。換言すれば各種産業が現實に各地域に於て分布配置せる状態、その成立原因及び過程の研究をなすと共に、各種産業部門に個有の地域性、即ちそれが一定の地域に分布配置するに如何なる要因又は條件を必要とするかを演繹的に研究する事によつて、初めて國民經濟的地域編制を理解しうるのである。

故に國民經濟的地域編制を一般的抽象的に考察する事は不可能にして、先づその國に於ける最も主要なる産業部門につきて、各地域が如何にして地域編制に参加せるかを考察すべきである。之れ從來の經濟地理學が主として農業、工業の地理的分布を研究した所以である。殊に農業は最も古き産業部門として發達普及し、極めて特殊なる社會を除き、何等かの形に於て農業の行はれない地方は殆どあり得ないのである。農業は他の産業に比して土地の擴がりを必要とする事最も大なるのみならず、收益遞減の法則が顯著に行はれ、且つ有機的生産なるが故に自然的事情に支配せらるゝ事甚しく、更にその耕作技術の如きも社會的、經濟的事情によつて決定せられざるを得ぬ。然かも地表空間は自然的社會的經濟的歴史的に著しき差異を有するが故に、農業の地域的分布配置は必然的に顯著なる特殊性を有するのである。若し國民經濟の如き有機的地域統一體が成立せず、各地方が孤立的封鎖經濟を営む場合には、その特異の事情の下に於て自給自足するに止るが故に、各々特殊性を有するに拘はらず地域編制に参加する事が出来なかつた。即ち各地域は不利なる状態を忍びて殆ど同様の農業生産を行ひ以てその生活必要を充足せざるを得なかつた。各地方はその特殊なる條件に適應するが如き農業の專業化が行はれず、從て各地域は獨特の農業地域としての個性を發揮する事は不可能であつた。故に多くの特異な

る農業地域が形成されて居る事、從て之が一定の組織によつて地的統一體として編制に参加してゐる事は、國家が一の國民經濟といふ地的統一體として完成せる事を前提とするものである。即ち農業生産が自由且つ合理主義の下に於て絶対的原費の法則によつて行はれ、その生産物は農業者の消費して尙ほ残れる部分は商品として農業者以外の者に供給され、農業生産手段、農業者の日常必需品は商工業者より購入されざるを得ぬこと、換言すれば完全なる流通經濟の成立せる事を意味する。封建社會に於ては完全なる流通經濟が成立してゐなかつたのであるから、各領域は同種同様の農業形態を有し、相互に聯關して交換するの必要なく、從て國家全體が農業を通じて一の合理的地域編制をなし得なかつた。併し乍ら各領域の内部の細分地區は夫々地理的事情を異にするが故に、その異なる條件の下に於て之に最も適合するが如くに各地區が農業につきて一の地域編制を形成せし事は言ふ迄もない。何となれば農業は工業と異り、廣大なる土地の擴がりを絶対的に必要とし、然かも必ず一定の中心によつて生産と消費とが統合されざるを得ないからである。例へば、個々の農業經營につきて見るも、圃場を中心として經營が行はるゝが故に、圃場と耕地との距離の大小、耕地の性質によつて、恰も後に述ぶるチューネンの孤立國に於けるが如く、その栽培作物の種類、集約度を異にする事によつて初めて農業經

營が合理化され、從て農業生産力は増進し、收益率も増大する。之れは各地區の有する個性と機能を絶對的にも相對的にも最大限に發揮しうるからである。換言すれば圃場を中心として各地區が最も合理的有機的に編制に参加してゐるからである。この編制原理は經濟地域の擴大された場合にも妥當するのみならず、更に一層その必要を見るわけである。

資本主義經濟を原則とする場合には、交通の發達、交換買賣の自由、貨幣的利益の追求、資本の利子、土地の地代等が、農業經營の方式、形態の決定に大なる關係を有するが故に、生産物の絶對量の大小は必しも經濟活動の指導力を有しなかつた。換言すれば、その生産物の價格と生産に必要な投下費用總價額との差の大小、即ち市場關係による貨幣的利益のみが農業の經營場所の定位、集約度、種類を決定したのである。之に反し氏族社會、村落共同體、莊園の如き封鎖的家内經濟に於ては、經濟内の食糧の自給自足が第一義的重要性を有するが故に、生産の絶對量が農業の配置を最も強力に支配する。固より絶對量が多大であつても生産に要する原費が過大であり、然かも地區によつてその差が大である場合には、その地區的配置は異らざるを得ないが、自給自足經濟に於てはその地域が狹小にして且つ各生産主體が自給自足性を有し、流通過程に入る部分は極めて少量であるから、運送費の如きは農業の地理的配置上比較的

重要性が少い。然るに經濟地域の廣大なる資本主義經濟に於ては、市場に流通する分量が多大にして、遠隔地に轉々として運搬されざるを得ないのであるから、運送に關聯する諸事項が大なる影響を有し、換言すれば交通關係、距離の問題が最も大なる意味を有し、生産絶對量の大小は必しも一企業體の獲得する貨幣的利益の大小と一致せず、從て之が地理的配置を決定するとは限らない。故に資本主義以前に於ては、極めて特殊なる農産物、即ち自然的社會的に絶對的制限を有するものについては、一國全體より見て、特殊農業地域が形成されたが、他の一般的農業につきては、種類、集約度に於て特殊なる農業地域が形成されなかつた。各地域の内部に於てのみ生産の絶對量、生産の技術的可能度(特に自然的條件に基く)によつて地域編制が行はれ、距離の大小による費用は地域編制上さして大なる意味を有しなかつた。之に反し資本主義的國民經濟に於ては、生産の絶對量、生産の技術的可能度(自然的、社會的、經濟條件に基く)の外に、距離の問題が最も大なる役割を演じ、之によつて利潤、利子、地代が決定され、それは應て農業經營の地理的配置、從てその編制が支配されるのは當然である。而して資本主義經濟以前に於ても、苟も經濟活動である以上、一定の生産は計量と目的適應とを旨としたのであるが、併し生産技術が幼稚であり、又生産量、生産費用等の測定は容易ではなく、多くは

傳統によつて生産活動が指導され、從て正確なる數量的計算の下に生産の配置が行はれたのではない。又一定の地域に於ては一定の經濟活動のみが行はれ、同時に多數の經濟活動をなす事は不可能であるが、社會の發達しない時代には經濟活動は極めて單純にして多種類の産業は存在しなかつたから、何れの産業を何れの地域に於て行ふべきかの比較量定の必要が少かつた。當時は農業を主としたのであるが、之とても多角形的經營が行はれたのではなく、穀作を主とする單一農業にして、集約度につきては多少の地域的考慮が拂はれたけれども、何れの種類の作物を栽培するを以て社會全體の立場より最も有利とするかといふ選擇比較量定の問題は起り得ないであらう。かゝる比較考量の必要な所には地域編制論は成立し得ない。若し地域編制の觀念ありとすれば、前述せしが如き個々の農場内に於ける圃場中心の生産配置につきてその萌芽形態を見出しうるにすぎぬ。蓋し當時に於ける經濟的認識力又は社會生活の指導精神よりすれば、廣大なる地域に於ける細分地域の統一的編制の如きは考量し得ないからである。故に當時の農業の地理的配置、その地域編制は現代の經濟學的概念を以て律する事は出来ない。

資本主義經濟は貨幣的計算の基礎の上に立ち、その損得利害は明白に算出しうるのみならず、特に價格の決定、從て收益率の算定に最も重要な基礎をなす所の距離は正確に算出しうるが

故に、農業の地理的配置、地域編制の經濟的合理性を論證しうるのである。更に今日の生産部門は實に複雑多様にして、然かも何れも最大の利益獲得を目標として鋭敏に運動してゐるのであるから、地域的制約を受くる經濟活動は自己の最も有利なる立地の獲得に力むるのは當然である。故に一定の土地に於ては、農業、工業、商業等凡ゆる經濟活動が立地闘争をなすのであるが、結局、最大の地代を獲得しうる經濟活動が勝利を博して之に蟠居する事が出来る。而して資本主義社會に於ては商工業が最も有利なる地位に立ち、小面積の地域に於て大なる地代を擧げうるが故に、その本來の性質と相俟ちて一地域に集中累積する事が出来、茲に自ら大小の都市の成立を見たのである。この大小都市を中心として之に必要な原料、食糧の生産、供給が行はれ、更に之等の都市も亦夫々の機能によつて相互に聯繫し、國民經濟が成立したのである。資本主義以前に於ては、農業は全國に分布してゐたが、資本主義の發達、交換經濟の發展の結果、農業の地理的配置は商工業に由て蠶食され、英國の如く殆ど全く重要性を失ひたる場合もある。かくて農業は都市より遠心力的運動をなしつゝ、一定の地理的分布をなすのであるが、この地理的分布は、社會的、自然的事情を除いては、生産と消費との距離の大小によつて決定せられるのである。殊に農業はその生産に於ては、土地の擴がりを必要とするが故に地理的に

分散性を有するが、その消費は大都市への集中性を有する。従て大小の都市、即ち集中的消費地を中心として農業の配置、従て農業地域編制が重要性を有する事となる。即ち栽培作物の種類、集約度、經營規模が錯綜して距離闘争を行ひ、茲に一定の農業地域が形成され、更にその地域編制が問題となるのである。廣域流通經濟の下に於ては、客觀的算定可能なる距離、即ち消費の中心地と生産地との距離によつて、一定の地域に於ける農業の配置、及びその編制は科學的研究の基礎を與へられるのである。

最近に於ては經濟活動は必しも資本の收益率、土地の地代、企業の利潤のみによつて指導されてゐない。又かゝる指導精神による經濟組織を以てしては國民經濟の運営は殆ど不可能となつた。殊に第二次世界動亂、支那事變、更には東亞廣域經濟圏の確立といへるが如き大事件の解決と、自由主義的營利原則とは到底兩立し得ないものがある。而してこの大事業の完遂には、何よりも先づ人口の増殖と食糧の確保を必要とするが故に、農業は種々の方面より考察され施策されねばならぬが、就中、農業生産力の増大が最も重要である。更に農業生産力の増大は、單に外延的に耕地の擴大を計り、或は生産技術を改良進歩せしむるの外に、之と關聯せしめて農業地域の合理的編制をも必要とする。農業地域の合理的編制は舊來の如き企業者の個人的收

益率の大小によるべきではなく、國民の食糧需要の充足、換言すれば先づ生産量の確保及び之が配給の合理化を以て指導原理となすべきである。この意味に於て、新しき農業地域の編制は、資本主義以前の編制原理と、資本主義のそれとの止揚されたものといふべきである。即ち生産量の絶對的多量又は生産可能度、生産費の最少化及び消費の三者の合理的調整を最高の目標とし、而して之は距離によつて統轄される。蓋し資本主義以前に於ては地域狹小にして生産と消費が地理的に殆ど一致せしに反し、現代の國民經濟は地域的に甚しく擴大し生産と消費とが距離的に懸絶してゐるからである。かくして如何なる地域に於て如何なる農業が經營され、更にその生産物が如何なる地方に配給せらるべきかは、國民經濟全體の地域編制及び農業地域編制との兩方面より考察するべき問題である。

資本主義以前の經濟地域の狹小なりし時代は別として、經濟地域の擴大せる資本主義時代、更には最近の國民經濟に於ては、距離の擴大せる結果、農業の地理的配置、地域編制に關して、生産と消費中心地との距離の大小が決定的に重要性を有し、距離を無視してはこの問題を理解する事が出来ない。而して地域編制論に於ける距離は、單なる物理的幾何的距離ではなく、經濟的距離に換算されたものである。即ち農産物の種類、性状、交通機關の種類等によつて換

算されたる距離であり、更には生産上に於ける自然的社會的優劣も亦距離に換算されなければならぬ。この意味に於ける距離の概念なくしては經濟地域編制を統一的理論的に究明する事は出来ない。従て農業地域の編制に於ても亦然りである。農業の地理的配置を距離の關係よりして科學的に研究したる最初の人は即ちチューネンである。チューネンの研究方法につきては已に一言論及した所であるが、彼の方法は、多くの人々によつて或は理論的批判が試みられ、或は現實化してその妥當性を確認し、農業經營の地域性、更には一般經濟活動の立地問題、經濟地域編制論の研究に對し多大の影響を與へた事は周知の事實である。今日ではチューネンの學說は一の立地論として取り扱はれてゐるが、之は必しも正當ではなく、經濟地域の編制に關する根本理論を成すものといふべきである。少くともその立地論は農業地域編制の基礎をなしてゐるものといはねばならぬ。

方法論としての立地論の經濟地理學に於ける意味、従て地域編制論に於ける地位につきては已に簡單乍ら一應述べたのであるが、立地論は經濟活動の各部門の本質を演繹的に究明し、それが如何なる地域的條件の下に於て最も有効に運營されるかを研究するものであつて、必しも國民經濟全體の立場より考察するものではない。従て一定の經濟活動は如何なる地理的分布を

なすかの一般的抽象的理論の構成をなすものと解せられたるに止り、各經濟活動が立地論の原理に従て一定の地理的配置をなし、それが纏て一定の經濟地域を形成し、更に之が地域的編制下に統一される理論を研究するものではない。之に反し經濟地理學特に經濟地域編制論は、一方に於て立地學的方法によつて經濟各部門の個性に基きての地理的分布性を考察しつゝ、他方に於ては現實にこの經濟各部門が如何なる地理的分布を形成し、更にその結果如何なる經濟地域が構成され、且つ各經濟地域が如何に編制されて地域的統一體となれるかを研究する事を任務とする。之を農業につきて見るならば、その栽培作物の種類によつてその必要とする自然的、社會的、經濟的條件が異り、又之と關聯する集約度も異なるが故に、農業經營形態の地理的分布の必然性は演繹的抽象的に判定しうるわけである。併し現實の地表は千差萬別であつて決して同一のものあり得ないし、殊に農業は長年の間全く傳統主義によつて經營され、必しも各種農業の本質に適應するが如く合理的に地理的分布をなしてゐるとは考へられない。従て眞の意味に於ける合理的地域編制による地的統一が行はれて居るとは限らない。然るに最近に至り社會狀態の急變、交通機關の著しき發達は、純粹なる立地理論による農業の地理的分布の合理的究明、之に基く現實の農業地域編制の考察、批判が必要とされるに至つた。この意味に於てチ

チューネンの孤立國が如何に農業立地の問題を取り扱つたか、更に之が農業地域編制論を考ふる上に如何に重要な基礎を築いたかを述べよう。

第二節 チューネンの孤立國に於ける農業地域編制論

第一 孤立國の構想

チューネンの孤立國 (Heinrich von Thünen, *der isolierte Staat in Beziehung auf die Landwirtschaft und Nationalökonomie*) は、彼が實際に農業經營に従事したる經驗を科學化したる成果である。而して彼がかゝる不朽の研究を企つるに至つた動機は、當時獨逸の農業界に大なる影響力を有したるテール Albrecht Thier (1752-1828) の合理主義農業論に根本的批判を加へんとする事にあつた。即ち産業革命以後、獨逸の農業も一大轉換期に逢着し、農業經營の集約化が問題となり、舊來の穀草式より輪作式へ、放牧より畜舎飼養への轉換が主張され、その指導的原理として、テールは合理主義農業の名の下に、英國に行はれて居る輪作式經營を最も有利とし、

之を無條件に獨逸農業に適用せんとした。テールのこの運動は獨逸農業の革新と發展に對して大なる貢獻をなしたことは言ふ迄もないが、農業は自然的、社會的、歴史的條件に支配せらるる事大であるから、農業經營に於て絶對的合理主義を以て事を行ふ時は、却て種々の不合理なる結果を齎す場合が少くない。即ち農業に於ては寧ろ相對的合理主義こそ必要であり妥當である。集約農業が優良にして粗放農業が劣悪であるとする公式的な考へは經濟的に見て必しも正當ではない。集約度の如何は農業經營の良否を決定する根據とはならない。この點を明かにしようとしたのが孤立國である。即ち孤立國は「條件が異なるならば、二人の農業者は同一の集約度を有せずとも、共に優良なる農業者でありうる」所以を究明せんと試みたのである。

孤立國の構想は夙くより彼の腦中に描かれ、千八百三年の著述にかゝる「グロス・フロットベック村の農業」、千八百二十年の頃に發表された二三の論文に於て之を見る事が出来る。その後推敲と實證を重ね、終に千八百二十六年に「農業及び國民經濟に關する孤立國」の第一部が公刊された。之は「穀價、地力及び租稅の農業に及ぼす影響に關する研究」と題され、更に千八百五十年に、「自然、勞賃及びその利率並に地代に對する關係」なる論文が孤立國第二部第一編として發表されたのである。この副題目に示さるゝが如く、孤立國の目的は、從來チューネ

ンの研究者が考へて居たのと異り、單に都市よりの距離の大小によつて周約度の異なる農業が地理的に配置されるといふ立地學的考察のみではなく、農業經營の全般に互る一大體系を確立し、更に社會的、自然的事情に應じて、如何なる農業經營をなすべきか、如何なる農業經營もその事情、條件に應じて立派に存立しうる所以を論證するにあつた事はいふ迄もない。即ち地代論、利子論、勞賃論を數學的に詳論してゐる。又その農業經營の地理的配置の根原を價格と地代との關係に求めて居るのであるから、その穀價及び地代論が彼の研究の中心問題をなすものである。而して價格、地代と距離との關係に於て各農業經營の可能性を明かにし、從て一の經濟社會に於て、各地域が夫々の地域的個性に應じて農業地域の編制に参加すべき理論を究明したものである。要するに孤立國は、その獨特の研究方法及びその一大體系の故に、種々の學者によつて種々に解釋され、且つその研究方法は種々の方面に利用されるのであるが、余はチューネンの孤立國を以て單なる農業經營に於ける立地論ではなく、農業地域編制論の根本理論及び方法論を確立したものと解釋し度いのである。

孤立國の構想の基礎をなすものは典型化 (Idealisierung) と孤立化 (Isolierung) の二方法である。而してこの兩方法の巧妙なる結合と適用とによつて「孤立國」なるものを假設した。この

假設はチューネン理論の出發點をなすものなるが故に、その大綱を示せば次の如くである。

一、肥沃なる平野の中央に一大都市が存在すると假想する。平野には舟運の可能なる河流も運河もない。平野は全く同質の土壤より成り、いづれも耕作に適當する。而して都市を離るゝこと最も遠距離の地に於て平野は未耕の地となり、この地域を境として他の世界と全く分離してゐる。

二、平野には唯一の大都市が存在するのみであつて、國內の工業品の供給はこの都市が専ら之に當り、又都市はその周圍の平野より食糧品を獲得するの外はない。

三、全國の需要する金屬と食鹽とを供給しうる鑛山と食鹽坑は中央都市の近傍に存在する。

右の如くチューネンの孤立國は、空間的、自然的、經濟的抽象であるが、之を今説明しよう。第一は、孤立國の經濟の自然的條件を全く均質なりとし、他の國家とは經濟的に何等の交渉を有せず、自給自足をなすと假設する反面、國內の個々の單位はその經營能力が同一であり、然かも自由にその欲する所を經營し、且つその生産物を自由に交換しうるが如き有機的統一的經濟體となすのである。第二は、農業以外の産業を除外し、工業、鑛業の存在は、只農業經營を可能ならしむる生産手段、消費手段を供給するものとして附隨的に考察するに止り、然かも工、

鑛業は農業の必要とする物質を同一の價格を以て無制限に供給しうるものとし、従て農業と工業との間に於ける價格、利潤等の均衡問題を論外とする。第三には中央都市に於けるライ麥の價格を一シェッフエルにつき一・五ターレルとする。第四には中央都市よりの距離に應じて運送費が異なる、二四〇〇ポンド積一車^エ哩の運送費を $\frac{199.5x}{182.1x}$ ターレルとし、馬車の携行する飼料を差し引き、ライ麥一シェッフエル一・五ターレルとして計算すれば都市より^エ哩の地點に於けるライ麥の價格は $\frac{273-5.5x}{182+x}$ ターレルであると假定す。第五に、孤立國內に經營される耕種式は自由式、輪作式、穀草式、三圃式、林業、牧畜の六種に限定し、特にライ麥の耕作を中心とする。第六に、農業經營は完全なる合理主義によつて行はれて居る。

斯くの如き假設の下に於て、各地域が最も有利に農業を經營せんとするならば、右の六種の經營形態の中何れをとるべきか、換言すれば如何なる集約度によるべきかの命題が導き出されるのである。而してこの命題は農産物の市場價格と都市との距離の關係によつて初めて解明する事が出来る。即ち農産物は唯一の市場として中央都市を求めざるを得ず、又農業は都市よりその必要なる工業製品を獲得するの外はないのであり、然かも市場價格は唯一なるが故に、農地の純収益、その貨幣化されたる地代は運送距離によつて決定せられる。茲に於て距離の増大

による地代の減少を補填し、以て各地域の地代を均等化するには、農業經營の周約度を變更し、従て經營形態を變更するの外はない。かくすれば各地域に於て、その距離の大小を問はず、各々の農業經營體はその存続が可能となる。如何なる集約度、經營形態を以てするも地代を生ぜず、利潤を齎さざる距離に於ては、も早農業は存立し得ない。故に若し農産物の種類を多くし、且つ價格の變動が夫々異なるが如き場合には孤立國の議論を進める事は出来なくなる。又各地域の農民が自由に集約度を變更する事も出来ず、或は只一家の自給自足を以て満足し、市場生産をなさざるに至れば、孤立國の理論及び方法は崩壊せざるを得ぬ。

孤立國は右の如く全く抽象化したる假設より出發してゐるのであるが、併しこの假設の下に於て、その理論を進める場合に、彼は常に自己の經營せし農場の經驗的事實を基礎として居る。之が彼の研究が如何にも抽象的、孤立的であるに拘はらず、實證性と確實性を持ち、従て萬人を承服せしめた所以であり、今日尙ほ種々の方面に於て彼の研究方法が應用される所である。

第二 農業經營形態の地理的配置

右の如き假設及び條件の下に於て、各種の經營形態を考察するならば、自らその地理的配置

は最も明白に數字的に決定されるわけである。孤立國の農業は市場生産にして、地代の生ぜざる所に農業は存立し得ないことを前提とするが故に、チューネンが問題の中心とせるライ麥の價格及びその距離との關係に於ける地代につきて考察するの必要がある。チューネンの假設は、百平方ルートの土地よりライ麥の收穫八シエツフェルをあげうる十萬平方ルートの農場の地代は1,168 (Schm) 641 (Tr) とする。而して中心都市に於けるライ麥一シエツフェルの平均價格は一・五ターレルであるから、都市よりx哩の距離にある農場に於ては $\frac{273-5.5x}{182+x}$ ターレルであるとすれば、右の地代は $\frac{1168 \times (273-5.5x)}{182+x} - 614 = \frac{202202-7065x}{182+x}$ ターレルである。故にxに數値を代入すれば市場距離との關係に於ける地代は左の如く算出される。

市場距離	地代(穀物收穫量八シエツフェル 十萬平方ルートの地代)
一哩	一、〇六六ターレル
五	八九二
一〇	六八五
一五	四八八
二〇	三〇一

二四・七 一二四
二八・六 ○

右の計算はチューネンの經營せる七區穀草式農業より導かれたのである。七區穀草式とは、第一區ライ麥、第二區大麥、第三區燕麥、第四、五、六區放牧、第七區無毛休閒となす經營方式である。この方式は、先の算式によれば、都市を距ること二十八哩六に於ては、都市に於ける穀價が一シエツフェル一・五ターレルならば、地代は皆無となる。故にこの地點に於ては、七區穀草式は經營不可能となり、更にそれ以上距離が大となればその經營は損失となる。茲に於て他の經營方式によらざるを得ぬ。かくしてチューネンは自由式經營、林業、輪作式、穀草式、三圃式、放畜等につき、その特質を演繹的に研究し、更にその生産に要する費用、生産物の運搬費等よりして、距離との關係に於て地代を計算し、以て如何なる經營方式が如何なる地點に於て配置せられるのが最も有利且つ合理的であるかを闡明したのである。尤もチューネンは輪作式につきては數字的結果を算出してゐないが、理論上林業と穀草式との中間に配置せらるべきものとして居る。又自由式農業も(一)肥料を都市より仰ぐ場合と、(二)肥料を自給する場合とによつて、その地代の異なる事を算出して居る。今、各經營方式と距離と地代との關係を比較する

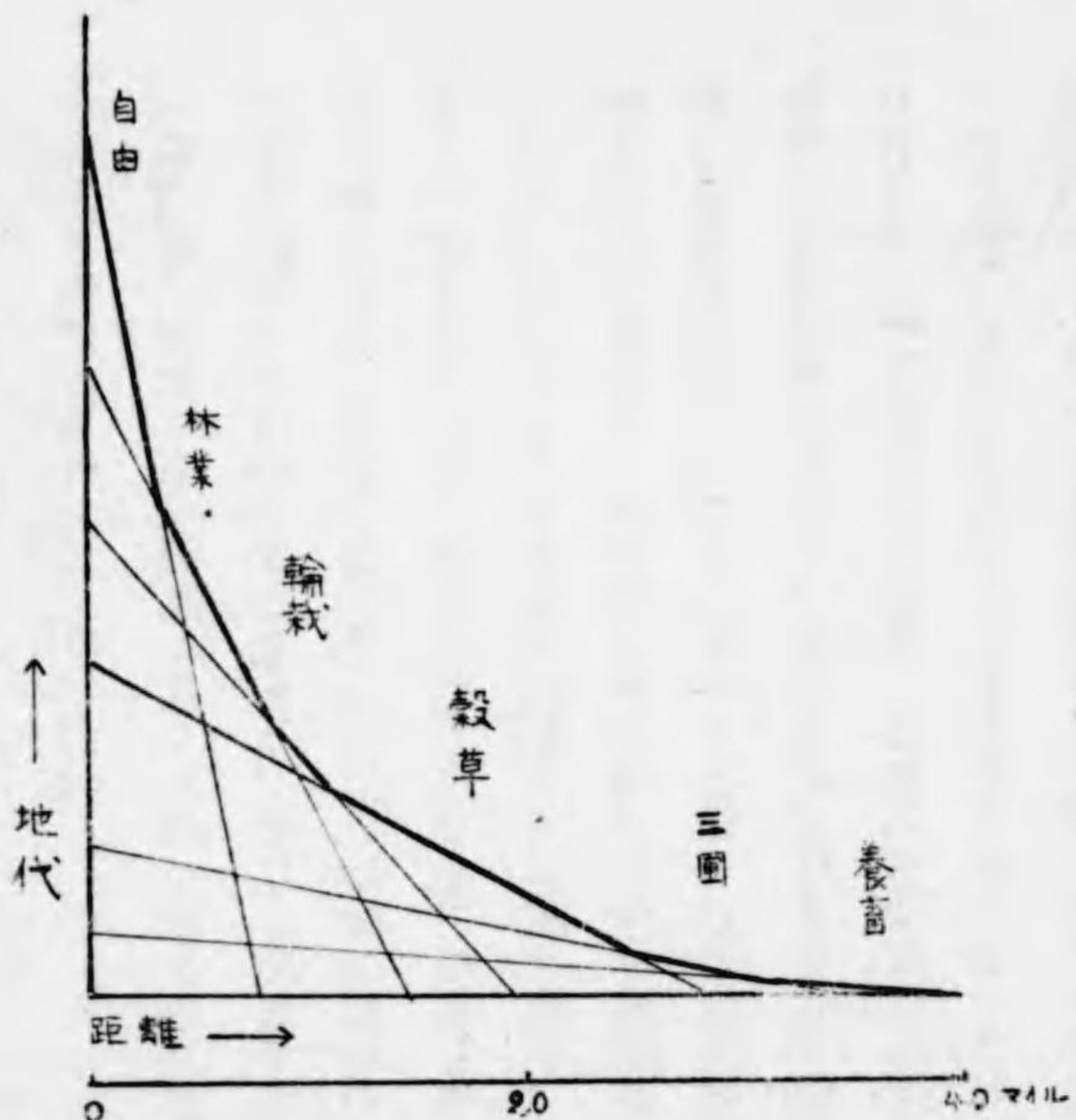
ために表示すれば次の如くである。而してこの計算は菊田木郎氏の生産立地論大要によつた。

都市よりの距離(哩)	十萬平方マイル			
	自由式	林業	穀草式	三圃式
0哩	114,904	4,548	1,066	690
1	11,033	4,017	1,066	690
4	3,733	2,458	935	623
5			892	577
七・三			755	
八・九				
10			655	
20			302	
24・7			183	
26・6				
30				
32・5				
40				
50				

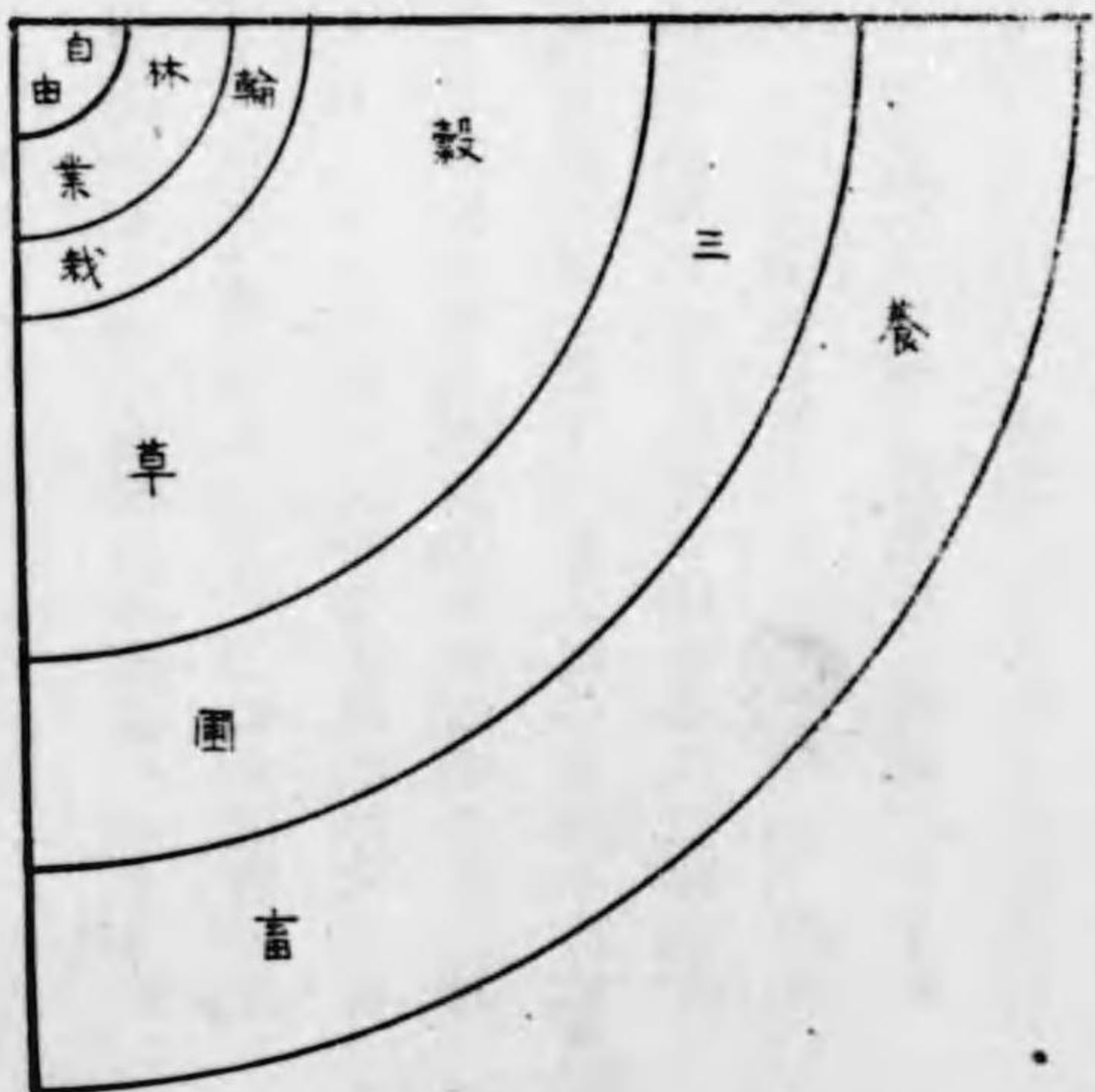
牧畜(乳牛一頭によ)るターレル)

更に之を圖表を以て示せば次の如くである。但し地代の高低は數字を正確に表はすものではなく、大體の傾向を示すものにすぎない。而して之は近藤康男氏の「チューネン孤立國の研究」

及び菊田氏の前掲書によつたものである。



第四章 農業地域編制論



第三 孤立國の現實性の問題

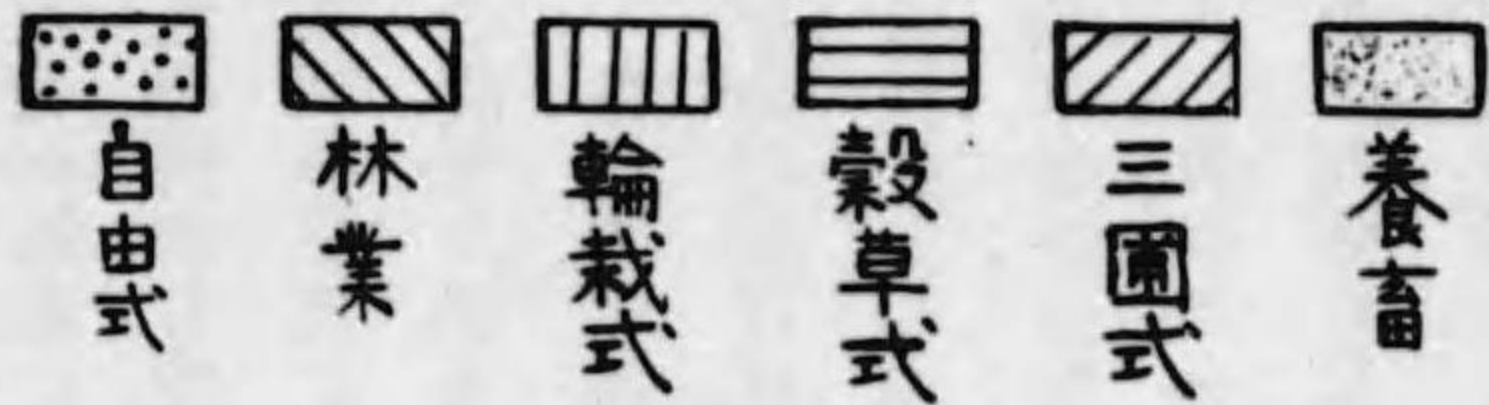
孤立國の構想は全く假設に基くものであるが、併し已述の如くその論證の基礎はチューネンの自ら經營せる農場の事實であり、單なる空想ではなく、その現實性につきて、孤立國第一部第二編に於て「孤立國と現實との比較」を論じてゐる。チューネンの時代に於ては鐵道が未だ發明されず、多分に領域經濟の色彩を有し、都市を中心として狭小なる經濟領域が形成されてゐたにすぎぬ。併し苟も農業が自給自足の域を脱し、交換經濟を營む以上、孤立國に於ける農業經營形態、集約度の地理的配置に關する根本原理は如何なる場合にも適用し得る。只現實の世界は地理的に異質であり、條件が複雑せるが故に、之によつて偏倚してゐるにすぎない。即ち各種の交通機關が發達し、經濟地域が擴大され、世界の如何なる地域も經濟的に聯關せる今日に於ても、絶對的原費の法則、地代鬭争の行はるゝ限り、チューネン理論は行はれざるを得ぬ。クルチモウスキー教授がその著農學原論に於て、チューネンの集約度學說の農學に於ける地位は、恰もニュートンの引力說の天文學に於けるが如く、分子說の化學に於けるが如く、ダルウイニズムの生物學に於けるが如きものであるといつてゐるが、更に我々は經濟地域編制論に於

て、特に農業地域編制に於ても、チューネンの構想及び理論の妥當性と重要性を認めざるを得ぬ。チューネン理論の把握は頗る困難にして、又缺陷全く無しとは云へないが、複雑多様な經濟地域の編制を理論的に究明するためには、先づチューネンの方法又は構想によらざるを得ぬ。故にチューネンの理論は、或はアエレンボフ (Friedrich Aerenboe)、フリンクマン (Theodor Brinkmann)、ラウル (Ernst Laur) の如き農業經營學者により、或はエンゲルブレヒト (Engelbrecht)、ワイズル (Leo Waibel) の如き農業地理學者或は一般經濟學者によつて、理論的、實際的に検討された。而してその現實性は、今日の如き經濟地域が擴大し、事情は著しく複雑化する時代に於ても、多少の缺陷はありとしても、大體に於て何人と雖も確認せざるを得ぬであらう。従てチューネンの理論を現實に當てはめる事によつて、世界經濟、國民經濟に於ける農業地域は勿論、經濟地域一般に於ける地域編制の理論が明かにされるわけである。チューネンの理論が如何にも現實から遊離したものと、如く現在の人々が誤解し易いのは、彼の時代と今日とが甚しく異つてゐるからである。即ち經濟地域の有機體化及び著しき擴大と交通の發達による農産物輸送力の増大に伴ひ、各國内に於ける農業經營が變化するため、靜止の状態に於て現實と比較する事が困難となり、且つ大小の國々が錯綜して生産と交易を行ふが故に、必しも世

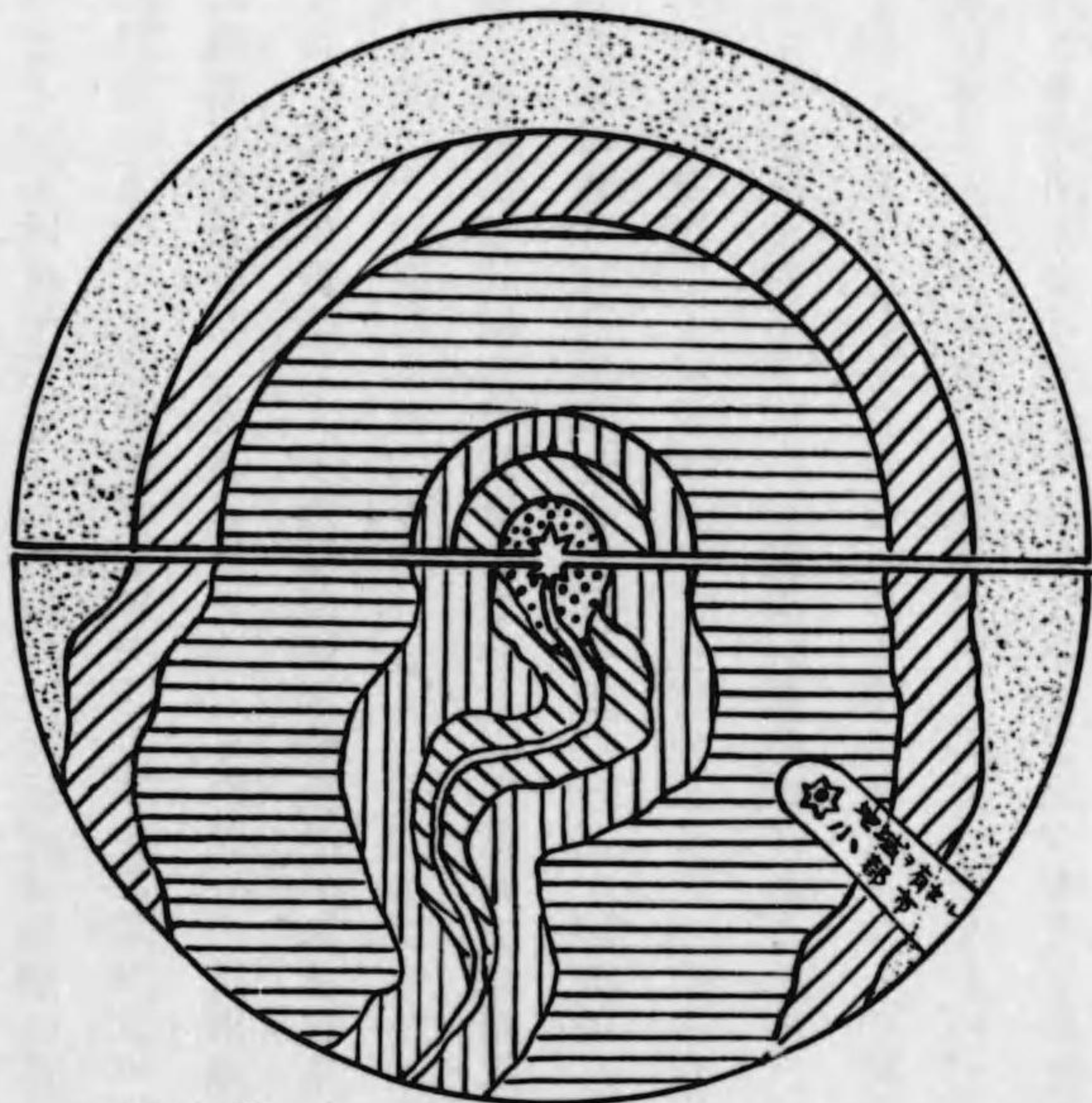
界全體の農業がチューネンのいふが如き地帯を形成してゐないからである。併し乍ら各地方の農業はたとひ點在的に配置せらるゝにせよ、特定の市場—都市を中心として求心力的地理的配置をなして一の農業地域を形態しつゝ、更に一層廣範なる地域に於ける大都市、市場を中心として農業地域を形成せんとするの傾向ある事は否認出来ない所である。只農業はその生産物の特殊性、運送可能性、價格との關係、土地の擴延性の必要等よりして、交通機關の發達と比例して遠心力的に運動する傾向が著しい。又交通機關の發達の結果、市場と農業の地理的配置との關係は、市場を中心とする圓環的、地帶的配置を攪亂し、副次的に交通機關と平行的地帯を形成せしむる傾向が有る。併し之は交通機關の發達により、農業地域が圓環的地帯と平行的地帯の錯綜によつて構成されつゝあるといふに止り、決して本質的差異ではないから、チューネンの地帶的農業配置論の根本理論は何等の動搖を見る事なく、凡べての現實の中を貫いてゐるものである。農業地域は現實には必しも圓環的地帯又は平行的地帯をなさず、農業地域が點在してゐる場合が多いけれども、交通機關が極度に發達し、廣大なる經濟地域が一の有機體の如くなれる今日に於ては、その點在的可能性は地帯の如く密接に連続せるものであり、所謂非連續の接續が現實に行はれてゐるのである。故にこの點在性と地帶性とは單に形態上の差異たる

に止り、地帯と同一視しても差支へない。チューネンも次に示す圖表の如く圓環的地帯を平行的地帯に迄發展して考へたに拘はらず、この兩者の交錯とも見るべき點在的地域の非接續的接續に思ひ至らなかつたのは、彼の時代的環境、特に鐵道その他交通機關が發達せず、各地域の有機的聯關の少かりし事に基くものである。要するにチューネンの理論は、經濟地域が、或は地帶的に、或は點在的に農業が配置分布してゐようとも、それが一の經濟地域として編制される根本原理たる點に於ては、交通の發達による地域聯關の變化さへ考慮に入れるならば、何等の變更を必要としないであらう。

孤立國の現實性の問題と關聯して、彼の研究方法そのものに就きての非難も少くない、その非難の骨子は、如何に距離と地代とに凡べてのものを換算し、之を圖表的に地帯として描出しようとも、夫れはどこまでも假設であり抽象であつて現實ではない。苟も現實を研究する經濟學がかゝる方法を採用することは意味をなさず、一の觀念的遊戯にすぎざる事、恰もアダム・スミスに於ける「經濟人」と同一であるといふにある。併し乍らチューネンの研究方法が、經濟社會が複雑になればなる程、多くの人々によつて援用されてゐるのを見れば、複雑多様な現實は之によつて理解し説明するの外なき事を示すものである。之が單なる空想的假設ならば、か



圖一第



圖二第

第一圖の説明
此の圖表は原書の第一章に於てなされた前提と、それから引き出された結論に從て定まる孤立國の姿を示す。原本の本文によれば養畜圏は都市から五十マイル迄延びるのであるが、此處では紙幅を節約して餘白を得るため、都市から四十マイル迄の距離とした。

此の圖表に於ては都市の周圍に形成される圏の半分しか記されてゐない。何故なら他の半分は單にこれに似てゐるといふだけでなく完く同一であり、容易に之を聯想する事が出来るからである。

第二圖の説明

此の圖表は孤立國が舟楫の便ある河川によつて貫流される場合の姿を示す。此の描寫に於ては舟運賃は陸上運賃の十分の一であるといふ前提が基になつてゐる。

第一圖表に於ては唯一つの細長い帯狀の地帯を占有するに過ぎない輪栽式が此處では普通とは違つた形をとつて非常に擴大し河川に沿つて國境に達する迄延びてゐる。養畜圏は退却して河川に近い所では全然姿を消すのである。たとへ程度はこれより少いにせよこれと同様の影響を齎らすものに大道の開闢がある。若し此の大道が平野の各地に向つて引かれるならば集約耕作の圏はすべて擴大する。然しそれらの圏は其の場合第一圖表に於けるが如き規則的な形状をとる。

線影を描いてない細長い部分は一小都市の領域を表はす。該都市の領域とは其の小都市に生活資料を供給し首都の方へは何物をも供給しない農村地區のことを云ふのである。此の小都市と其の都市の領域とを一緒にして他の特別な獨立國と考へることが出来る。然しそのやうな一小國に於ても穀物價格は中央都市に於ける價格によつて定まるものとする。

此の附屬小國(Nebenstaaten)は都市に對すると同様の關係にあるが、ヨーロッパ諸國と最高の穀物價格を支持し得る富める國(英國殊にその首都ロンドンとの關係である)。

ヨーロッパ諸國に於ても彼等が穀物を輸入も輸出もしない時ですら、その穀物價格はロンドンの世界市場によつて支配される。そして此の市場が閉鎖される時には穀物價格は全ヨーロッパを通じて下落するのである。

のサンシモン、フリーリエー等の空想的社會主義者の方法論が直ちに影を没したのと同じように、その古き研究方法が今日迄存続しうる筈はない。チューネンによつて確立されたる孤立方法は、正に物理學の實驗に於ける高速度寫眞の如きものである。人間の感覺を以てしては現實界の物

理的運動は、動態に於ては如何にしてもその實體を把握する事は出来ないであらう。若し把握したりとすれば却てそれは概念的抽象的把握である。現實に動くがまゝの形に於てその力學的運動の法則を究明せんとすれば、高速度寫真に撮るの必要がある、併し寫真となつたものは已に抽象であり靜態であつて、現實の力學的運動そのものではない。然かもこの靜止の状態にある抽象たるフィルムを連續的に廻轉する事によつて現實の姿が再現され、且つその力學的運動の實體を理解する事が出来るのである。之と同じくチューネンの研究方法は運動物體のフィルム化と同一である。従てこの研究方法によつて各經濟地域の現實につきその地域編制を研究し、之を綜集成し、交通機關に基く聯關といへる廻轉機によつて統合して見るならば、初めて農業地域編制の現實と理論が闡明されるわけである。

第五章 工業地域編制論

第一節 工業地域編制の意義

封建制度が存續して未だ資本主義經濟の發達せざりし時代に於ては、各國は殆ど農業を専らとし、工業は農業生産のためにする附隨的産業として營まれ、或は極めて低級なる日常必需品の生産をなすか、或は少數の權門富者の奢侈品の生産をなすに止り、工業が地方的に專業化される事は極めて稀であつた。然るに産業革命以來、諸種の生産機械の發明、交通の發達の結果、各國の間に農業、工業につきて專業化が行はれ、更に國內の有機的統一化に伴うて絶対的原費の法則が生産を支配するに至り、傳統主義の強く行はるゝ農業に於てすらも、その地理的配置が變化し、特に新しく成立したる工業は、その計算の可能性の大なる故に、最も顯著にして且つ合理的なる地理的配置を見、各種産業は細分され、それは懸て特殊なる經濟地域を形成する事となつた。かくして細分化されたる特殊經濟地域は更に統合せられて一の經濟的地域統一體

の必要を生じ、工業を通じての經濟地域編制の問題が、農業その他の經濟地域編制の問題と相
關聯し、或はその中心をなして論議せらるゝに至つたのである。國際主義による自由貿易の盛
なりし時代には、經濟の發達せる國は自由にその欲する物資を獲得し得たるが故に、却てその
專業とする工業の種類は單純にして、特に有機的性質の工業の如きは極めは僅少であつた。併
しそれにしても生産能率を最大限に發揮せんとすれば、その地理的配置を合理化し且つ之を統
一化するの外はなかつた。殊に多種多様の工業を營み、或は全く新しき工業を興す場合には、
國民經濟全體の立場よりその地域的編制を考慮せざるを得なかつた。

農業の如き計算可能性の少き有機的生産に於ても、前章に於て述べたるが如き經濟地域の編
制に關し、一定の法則が定立されるのである。況して近代工業は計算可能性の基礎に立つもの
であり、然かも自然的事情に支配せらるゝ事は農業に比して少いのであるから、その地理的配
置は極めて計算的、合理的に考察しうるのである。只從來の工業立地論又は工業地域論に於て
論ぜられた所は、主として工業企業が如何なる地點に於て經營せられるならば、經營利潤を最
大化しうるか、換言すれば貨幣的企業利得を如何なる地點に於て最も多大にあげうるかを中
としたものであつて、夫れが果して國民經濟全體の立場よりして最も有利であり、合理的であ

るか否かは、反射的結果として知りうるにすぎなかつた。併しチューネンの孤立國に於ける地
代中心の理論が、結局に於て農業の地域編制の相本原理たる事を失はぬと同様に、工業立地理
論に於ける從來の原理の中を貫くものは、如何なる經濟組織の下に於ける工業立地論にも適用
され得る。蓋し從來の工業立地論は、生産物が自由に市場に配給される交換經濟に於て、如何
なる地點に於て經營すれば最も費用が少くてすむか、換言すれば原費優越(Kostenvorteil)は何
れの地點に存在するかを指導原理としてゐる。如何なる工業生産と雖も生産原費を最小限にす
る事によつて、他の事情にして同一であるとするれば、最も多く經營利潤を獲得しうる筈である。
只資本主義に於ては資本の獨占力によつて企業が經營されるが故に、國民經濟全體の立場より
見て絶對的に原費優越の地點に於てのみ工業が經營されるとは限らぬ。併し一定の條件又は段
階に於ては、各種の工業は最も生産原費の僅少なる所に於て經營されるのは當然であり、從て
工業が一定の地域的配置をなし、工業地域が自ら形成されるわけである。

近代工業の發達は、國家が一の國民經濟として地域統一體をなし、且つ資本勞働の自由移動、
企業の自由を前提とし、又その生産物は國の内外に自由に賣買しうる事を前提としてゐる。即
ち完全なる商品生産であり、生産されたものは必ず廣大なる市場に供給されるのである。而し

て工業は地方的に制限されたる天然資源又は農産物その他の原料、動力によつて財貨の生産を行ふものなるが故に、原料の獲得即ち生産地點への原料の運送、生産技術に影響する氣候その他の自然的社會的環境並に勞働等が重大なる役割を演ずる。農業はその本質上生産に於ては分散的にして、その消費に於ては集中的であるに反し、工業はその生産に於ては集中的であるが、消費に於ては分散的である。故に工業はその生産立地を決定する場合には、先づ各種原料、動力の獲得上最も原費の少き處、換言すれば各種原料、動力の運送費の少き地點を求め、更にその生産されたる財貨は廣大なる市場に供給されざるを得ぬから、その商品の市場への運送費の少き地點を求め、その他自然的社會的條件、又は勞働費等最も原費優越の地點に於てその立地が決定されるわけである。かくの如く工業は初めより生産過程、配給過程に於て地域的統一性を要求し且つ之を前提とするが故に、工業の地域的編制の問題は經濟地理學上最も重要な地位を占むるものである。農業に於ては最近その生産物の種類も増加し、又經營形態も多様となつたけれども、特に工業に於てはその生産物の種類は實に無數にして、然かもその性質に應じて經營規模も亦多種多様であり、従てその地理的配置は複雑を極めて居る。農業はその土地束縛の大なる事、傳統主義の強烈なる事等の故にその變遷の緩慢なるに反し、工業は常に進歩

發展を旨とし、且つその地理的移動も比較的に容易なるのみならず、その計算可能性の大なるが故に、最も合理的計量に基いてその立地を決定しうる。之れ立地理論に於て、又經濟地理學に於て工業の地理的分布、工業の地域編制が専ら研究せらるゝに至つた所以である。

工業の地域編制理論の基礎をなすものは、農業に於ける農業立地論と同様に、工業立地論である。經濟地理學は先づ現在の工業地域の形成過程、その地域編制を研究すると共に、工業立地理論によつて演繹的に工業の地理的分布配置の本質を究明し、以て現實の地域編制を理解すべきものである。之がためには先づ個々の工業部門につきて、その立地論的理論を確立し、之を現實化して統一的に之が地域編制に参加せる諸關係を究明しようとするのである。工業が一定の地方に分布して特定の工業地域を形成し、更にその地域の内部に於て集積特化し、その極限に達すれば再び分散して新なる地方に集中するが如き過程は現實である。斯くして一定の時代に於ては、一定の地域は特殊の工業地域を形成するものであり、而してこの特殊の地域は自己の獨特の個性によつて地域編制に参加し、經濟的地域統一體なるものが成立するのである。工業の地域編制の基礎理論たる工業立地理論は已にロッシャー (W. Roscher) 等によつて唱道され、チューネンの構想中にも覗ひうるのであつて、爾來多くの經濟學者は工業が一定の地域

的分布を形成する立地理論を構想しにのであるが、就中、アルフレッド・ウェーバー (Alfred Weber) は徹底的孤立化方法によつて工業立地の一般理論を確立し、工業の地域的分布、從て地域編制の究明に對し最も大なる貢獻をなしたる人である。故にウェーバーの研究方法の大様を概説する事とした。

第二節 アルフレッド・ウェーバーの工業地域編制論

第一 ウェーバーの工業立地論の構想

ウェーバーの理論は一千九百九年に著はされたる *Über den Standort der Industrien* と千九百二十三年社會經濟學原理叢書收載の *Industrielle Standortlehre* なる論文中に展開されてゐる。その研究對象及び方法はチューネンのそれと一見著しく異なるが如きも、チューネンの影響の大なる事は何人も否認出來ないであらう。チューネンが孤立國を假設し、價格、地代、距離との關係に於て農業の地理的配置を考へ、之によつて農業の地域編制を明かにせんとしたるに對し、

ウェーバーは、工業を抽象化し、生産上に於ける原費優越 (Kostenvorteil) を凡べて距離と重量とに還元し、以て工業は如何なる地點に集中特化し、その集中特化せる各地域が如何に統一編制されるかを明かにせんとした。勿論、彼はその著書に於ては一般的に工業の立地理論の定立に力めたるかの如くに思はれるが、彼の門下生をして實地に調査研究せしめたる所を見れば、獨逸國民經濟内に於ける各種工業の地理的分布及びその地域的編制を究明する事を旨としたものと思はれる。又ウェーバーのハイデルベルヒ大學に於ける講義は、私の嘗て聽講したる所によれば、正にこの純粹立地理論の基礎に立ちて獨逸國民經濟の地域編制を論じたものであつた。故にウェーバーの工業立地論は單なる立地論に非ずして、國民經濟地域編制論の基礎的理論たる事は明かであつて、之れ本書に於てその立地論を説述する所以である。

チューネンは一の完全なる經濟體に於ける各種農業經營が如何に配置されるかを研究しようとしたが、ウェーバーは先づ個々の工業生産過程を抽象化し、之を一の立地體 (Standortseinheit) とし (人によつては立地單位と譯するも、單位では餘り狹義に失するが故に立地體又は立地統一體とすべきであらう) この立地體が一定の場所に志向し、そこに自己の立地を決定せんとするの、その場所が他の場所以上に、立地體に對して有利なる原費優越の地點たるが故である。

而して一定場所の原費優越の大小によつて立地體を牽引する力が異なる。即ち一定場所の原費優越は立地牽引力の函數であり、この立地牽引力の基礎たる原費優越は種々の立地因子(Standortsfaktor)の組み合わせによつて構成される。

立地體は一種の財貨を生産する工業生産過程に限定し、同じ種類のもでも品質の優劣あるものを生産する場合には之を別個の立地體とし、各々独自の志向性を有するものとす。立地體には全然獨立の生産過程に止るものと、多數の生産過程の連繫複合せるものとがあるけれども、その分離しうるものは獨立のものとし、然らざるものは一個のものとして取り扱ひ、常に一個の單純なる工業生産過程として考察する。之は孤立化方法をとる場合に當然の前提である。

立地因子は原費優越の構成要素であり、一定の場所は夫々異なる原費優越を有する。一方、工業は夫々の差異に従てその生産過程に最も多く必要とする原費を異にし、従て立地因子の相對的重要性は異なるわけである。併しかゝる因子の特異性につきては一應論外とし、凡べての工業生産に必要な一般的立地因子のみにつき、その作用の一般的法則を決定し、特殊の工業生産のみに作用する特殊立地因子は現實的研究に屬せしむる。従て特殊事情は、地域が餘りに擴大される時は、その作用が著しく大となるが故に、統一性の大なる國民經濟地域に限定して理論を進める。

立地因子をかく一般的に見るも、之が一定の地域に工業を集中特化せしめ、その分布配置を決定する作用は決して同一ではない。ウェーバーは立地因子を類別して、(一)一般的立地因子と特殊立地因子、(二)自然的技術的因子と社會的文化的因子、(三)地方的因子(Regionalfaktor)と集積分散因子(Agglomerativ- und Deglomerativfaktor)となし、就中、立地論上第三のものが最も重要なりとして居る。地方的立地因子は工業を一定の地方に牽引する因子であつて、産地に於ける原料價格、原料及び生産物の運送費、労働費は之に屬する。原料の價格の差は運送費の差と見做し、又労働費は運送費によつて定つた立地の偏倚(Deviation)を生ずるものとし、凡べて運送費に還元せしむる。換言すれば凡べてを距離と重量とに換算して單純化を計る。集積分散因子は、地方的因子によつて牽引され志向せしめられたる工業が、その地方の内部に於て一地點に凝集し、又は凝集せるものを更に分散せしむる作用を有する因子を指稱し、地方的因子以外のものにして工業の立地決定に影響を與ふる凡べての一般的因子を包括する。而して之も結局に於て生産原費の多少、原費優越の如何の問題と關係する。故にウェーバーの立地論は、恰もチューネンが價格、地代、距離の三點を根本として、農業の地理的配置を論じたるに對し、

生産原費、運送原費の結合による原費優越を、距離と重量とに還元して工業の地理的配置を論じたるものといふべきである。故に彼の構想は運送志向論(Transportorientierung)、労働志向論(Arbeitsorientierung)及び集積分散論に於て展開されてゐる。

第二 運送志向論

運送志向論はウェーバーの立地論中に於て基礎的意義を有するものである。即ち生産原料も生産品も、その性質の如何を問はず、運送費に還元し、之を、後に述ぶるが如く、凡べて計數的に算定して立地を抽象的に且つ嚴密に決定する基礎とした。而して運送志向論に於ても一定の假設を想定し、先づ消費地、原料産地、労働地(即ち狹義の工業生産の現實に行はるゝ所)を假定し、この三者を結ぶ運送は直線的に行はるゝものとし、且つ消費地と原料産地の位置を固定し、労働地は移動するものとす。生産物及び原料は一定の價格を以て思ふまゝに需要し、且つ供給しうるものとし、更にその生産物及び原料の運送費は距離と重量のみによつて決定される。従て原料、製品の特性、例へば腐敗性、新鮮性の要求、容積の大なる事等は、之を距離或は重量に換算する。又運送路は鐵道を標準とするのであるが、今日では鐵道の一キロ當りの

建設費が異り、トン・キロ當りの運送費も異なるのみならず、鐵道利用度も異なるけれども、之等も皆重量又は距離に換算する。更に交通機關の種類、之に伴ふ運賃、運送能力等も鐵道運送による距離と重量に換算する。

右の如き前提の下に於ては、工業は労働地即ち立地を、運送費の最少の地點に定めんとするは當然である。運送費の最少の地點を運送立地(Transportstandort)といひ、この運送立地向つて工業が牽引せらるゝ事を運送志向(Transportorientierung)といふ。運送志向性は、原料の地理的配置の状態、原料の性質即ち原料と生産物との關係及び消費地との關係によつて決定せられる。この點よりして運送志向を論じたるはウェーバーの最大の貢獻である。

イ、原料の地理的配置

生産原料には特定の地方のみに産出しうるものと、何處にもその欲する所に於て調達しうるものがある。前者を地方特産原料(Lokalisiertes Material)といひ、後者を遍在原料(Ubiquität)といふ。遍在原料のみを使用する工業は消費地に於て立地を定める。何となれば立地の附近に於て容易に原料を調達しうるが故に原料運送費が節約されるからである。即ち遍在原料による工業の運送志向性は消費地志向型である。地方特産原料による工業は、他の事情にして同一で